

日本中央アジア学会報

第15号

2019年

目 次

研究ノート

- ソ連期ウズベキスタンにおける社会主義的近代化と女性 …………… 宗野 ふもと … 1
——「シャフリサブズ『フジュム』芸術製品工場」の労働者の事例から——

特別寄稿

- ウズベク語における
クルアーンの解釈と翻訳について…………アブドウルマジード・ハサンハン・ヤフヤー … 23
編訳・注釈 木村 暁／編訳・注釈・序文 和崎 聖日
- イチャン・カラ水利抄史…………フダーイベルガノフ・カーミルジャーノフ … 53
解説・編訳注 木村 暁

追悼

- 真田安先生のご逝去を悼む……………新免 康 … 77

日本中央アジア学会 2018 年度大会プログラム……………87

日本中央アジア学会 2018 年度大会発表要旨

- クルグズにおける非畜産業従事者の家畜資産保有の経済的利点…………大倉 忠人 … 90
——ナルン州アクタラ地区並びにナルン市におけるプレ調査報告——
- ロシア帝政期南東コーカサスの村落における家族の姿…………塩野崎 信也 … 92
- アクトゥバの音楽構造の分析…………ウメトバエワ・カリマン … 94
——新資料から見直すクルグズとカザフスタンの語り物 (Oral Narrative) ——
- 革命期及びソ連初期における
カザフ人とクルグズ人エリートの関係について…………ベクトゥルスノフ・ミルラン … 96
- ソ連中央アジア創成期におけるクルグズ人旧首領一族の動向…………秋山 徹 … 98
——民間所蔵史料と公文書館史料による復元の試み——

サマルカンド市所在グリ・アミール廟出土の織物について	村上 智見 ..	100
「中央アジア+日本」対話	ディシュコフ・アルマス ..	103
——着想から実行へ——		
日本中央アジア学会 2018 年度大会公開パネルセッション報告要旨		
一つの文書から何を読み取るか	小松 久男 ..	106
——近現代史の史料について——		
中央ユーラシア史研究がロシア史・比較帝国論に対して持つ意義	宇山 智彦 ..	108
内陸アジア史研究と中央ユーラシア史	新免 康 ..	110
——近現代新疆研究の動向を中心に——		
日本中央アジア学会 2018 年度大会公開講演要旨		
中国元代医書に見る「回回医学」の特徴	方 麗娟 ..	112
	要旨翻訳 熊倉 潤	
タジキスタン政治の変遷	周 耿生 ..	113
——世俗・宗教関係の考察——	要旨翻訳・追記 熊倉 潤	
書評		
Ayida Kubatova, <i>Kırgızistan'da Ceditçilik Hareketi (1900–1916)</i> , Aktaran: Ali Ünal, Ankara: Bengü, 2018, 276 p.	小松 久男 ..	114
中央アジア関連研究文献リスト2018		121
投稿規定・執筆要領		126
日本中央アジア学会会則		132

JACAS BULLETIN

No.15

2019

Research Note

Socialist Modernization and Women in Soviet Uzbekistan:

A Case Study of the Workers at the “Hujum” Artistic Products Factory SONO Fumoto .. 1

Special Contributions

The *Tafsīr* and Translation of the *Qur’ān* in the Uzbek Language .. ABDULMAJID Hasanzon Yahyo .. 23

(Translated and edited by KIMURA Satoru, WAZAKI Seika)

The History of Water Use in Ichan-Qal’a XUDOYBERGANOV Komiljon .. 53

(Translated and edited by KIMURA Satoru)

Eulogy

In Memory of Professor SANADA Yasushi SHINMEN Yasushi .. 77

Program for the 2018 Annual JACAS Workshop 87

2018 Annual JACAS Workshop: Abstracts of Presentations

Economic Benefits for Absentee Herd Owners in Kyrgyz Republic: OKURA Tadato .. 90

A Preliminary Survey in the Ak-Tala District and the City of Naryn

Families in Southeast Caucasian Villages in the Russian Empire SHIONOZAKI Shinya .. 92

Musical Analysis of Akhyn’s Poetry:

Kyrgyz and Kazakh Oral Narrative Reconsidered from New Materials UMETBAEVA Kalyiman .. 94

Qazaq-Kyrgyz Relations

during the Revolution and the First Years of Soviet Power BEKTURSUNOV Mirlan .. 96

A Study of a Former Chieftain Family of Kyrgyz in the Early Stages of Soviet Central Asia

Based on Public and Private Archive Sources AKIYAMA Tetsu .. 98

Textiles Unearthed From the Gur-i Emir Mausoleum in Samarkand···MURAKAMI Tomomi·· 100

“Central Asia Plus Japan” Dialogue:

From Idea to Implementation·····DISSYUKOV Almas·· 103

2018 Annual JACAS Workshop: Abstracts of Public Lectures for the Open Panel Session

What Can We Read Through an Archival Document?·····KOMATSU Hisao·· 106

The Significance of Central Eurasian History

for the Study of Russian History and Comparative Imperial History·····UYAMA Tomohiko·· 108

Studies on Inner Asian History and Central Eurasian History:·····SHINMEN Yasushi·· 110

Focusing on Research Trends in Studies of Modern and Contemporary Xinjiang

2018 Annual JACAS Workshop: Abstracts of Public Lectures

Characteristics of “Huihui Medicine”

in Chinese Yuan Dynasty Medical Books·····FANG Li-Chuan·· 112

(Translated by KUMAKURA Jun)

The Political Transition in Tajikistan:·····CHOU Keng-Sheng·· 113

Interaction between Secular and the Islamic Forces

(Translated by KUMAKURA Jun)

Book Review

Ayida Kubatova, *Kırgızistan'da Ceditçilik Hareketi (1900–1916)*,

Aktaran: Ali Ünal, Ankara: Bengü, 2018, 276 p.·····KOMATSU Hisao·· 114

List of Publications in the field of Central Asian Studies in 2018····· 121

ソ連期ウズベキスタンにおける社会主義的近代化と女性 —「シャフリサブズ『フジウム』芸術製品工場」の労働者の事例から—

宗野 ふもと

I. はじめに

本稿は、ソヴィエト連邦時代（1922～1991年）のウズベキスタンにおける女性の社会主義的近代化の実態を、ウズベキスタン南部のカシュカダリヤ州シャフリサブズ地区シャフリサブズ市にかつて存在した「シャフリサブズ『フジウム』芸術製品工場」(*Shahrisabz «Hujum» badiiy buyumlar fabrikasi/u*)⁽¹⁾の元労働者への聞き取り調査と公文書館資料に基づき明らかにする⁽²⁾。「シャフリサブズ『フジウム』芸術製品工場」は、1928年の設立当初は生産組合だったが1960年に国営工場に改編された⁽³⁾。以下、本稿では生産組合・国営工場の双方を指して「フジウム」と表記する。

フジウムは、イスラーム及び家父長制に基づく「前近代的慣習」から女性を「解放」する目的の下、1928年にシャフリサブズの女性活動家たちにより設立された。最初は、「ドゥッピ」(*duppi/u*)という刺繍入りの縁なし帽子を生産する15名程の小さな組織だった。しかし、活動家の勧誘、第二次世界大戦中の男性の出征に伴う女性の労働参加、1960年代に本格化する機械化によりフジウムは規模を拡大し、1980年代半ばには2千人以上の労働者を擁する大工場となった(図1)。

しかし、1991年にソ連が解体すると状況は一変した。フジウムは、材料確保や機械修繕の困難に直面し2005年に倒産したのである。だが、フジウムが培った技術や人間関係は維持された。元労働者は年金を元手に元労働者同士で互助講を開催し、失業、社会保障の縮小、継続的なインフレなどの不安定な生活を凌いだ。また、観光客向けの土産物を生産する工房

(1) 以下、ロシア語の単語は“r”、ウズベク語の単語は“u”を付す。

(2) 本稿は、宗野 [2017] を元に2017年9、10月、2019年5月のフィールド調査の成果と考察を加えたものである。

(3) 手工業の生産組合 (*artel'ir*) は家内工業者の共同経営組織である。1920～30年代に家内工業の計画経済への引き込みを目的とし設立された。国から支給された材料を用いて生産活動を行い国が生産物を買取る。得られた利益は組合員間で分配される [奥田 1977]。国営工場はすべての生産手段が国有化された組織で、国の生産計画に則り生産活動を行い、労働者には国から給与が支給される。

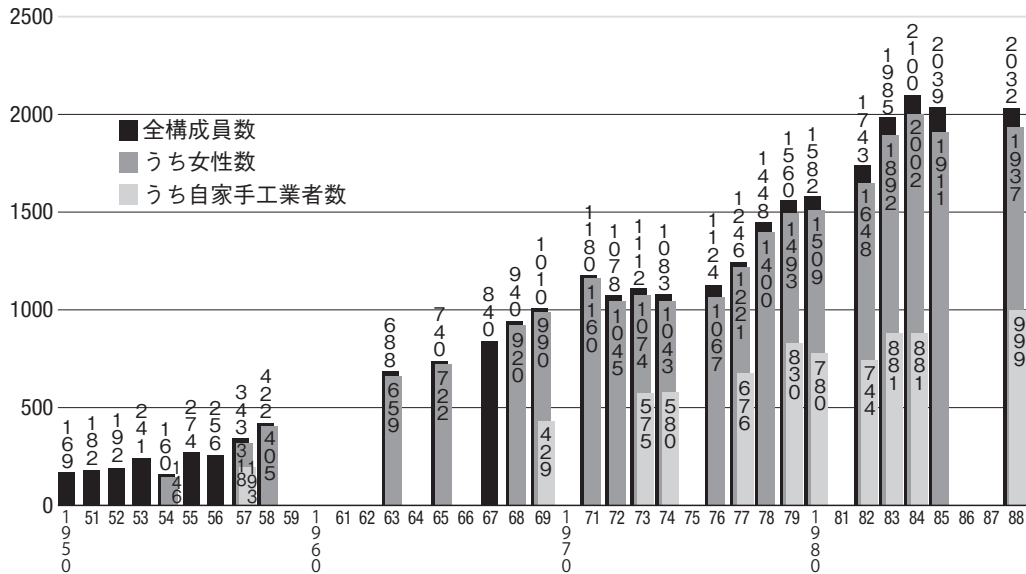


図1 フジウム構成員数の変遷 (1950～1988年)

QVShTDA f. 44 "Shahrisabz tumani 'Hujum' badiiy buyumlar fabrikasi" を元に筆者作成。

を立上げ、手工芸生産の新たな局面を創り出す元労働者もいた。

現在のシャフリサブズにおける手工芸生産の礎となり、元労働者の生活を今も支えるフジウムはいかなる組織だったのか。フジウムで女性はいかに働いていたのか。以下では、ソ連時代の女性に対する近代化政策を概観したのち、女性に関する先行研究と社会主義的近代化に関する人類学的研究を挙げ、本稿の視座を示す。次に、フジウムの組織的変遷と元労働者の労働経験をフィールド調査で得られた資料に基づき明らかにする。最後に、フジウムの元労働者にとって社会主義的近代化とはどのような経験だったのかを考察する。

1. ソ連期ウズベキスタンにおける女性に対する近代化政策の系譜

20世紀初頭の中央アジア定住地域における一般的な女性の生活は、家庭で家事・育児や手工芸生産に従事するというものだった。稀に外出する際には、「パランジ」(*paranji/u*)と「チャチヴォン」(*chachvon/u*)という全身を覆うヴェールを着用した。結婚は12歳頃で、相手は両親が決めるもので、縁談が成立すると婚資(*qalin/u*)が婿側の両親から嫁側の両親に支払われた。一夫多妻婚も見られた。家族は、年長男性が家族の行動を管理する家父長制家族が一般的であった。嫁いだ女性は、夫や舅姑の世話をし、男児を産むことが強く期待され、これに沿えない場合は一方的に離婚されることもあった。当時この地を訪れたロシア人は、女性がこの状況をいかに捉えているかどうかに関わらず、イスラームや家父長制的慣習の下で「不幸な」生活を送る女性を、中央アジア定住社会の「後進性」や「抑圧性」の象徴として

批判的に捉えた[帯谷 2016]。

1917年の十月革命を機に、ソヴィエト政権は、女性参政権、離婚の自由、男女同一賃金など男女平等に関する法整備を先進諸国に先んじて実施した。1919年には、男女平等を実現すべく共産党の一部門である女性部 (*Zhenskii otдел/r*, 通称 *Zhenotdel/r*) を設立し「女性解放運動」を開始した。ソヴィエト政権は、早婚、婚資の授受、一夫多妻婚の慣習がある中央アジア定住社会の女性は、他地域の女性よりも抑圧されており、これらの「前近代的慣習」から女性を「解放」することを重要な課題とみなした。女性部主導で、女性の権利をめぐる討論会、法律相談、識字教室などの草の根的啓蒙活動や、家事労働の社会化が各地で行われた。女性の経済的自立を実現するために、絨毯、刺繍、乳製品の生産組合が設立された。

スターリンが重工業化と農業集団化に舵を切ったことは、女性解放の理想主義的色合いを変えていく。1927年に実施された反ヴェール運動では、女性を抑圧する封建的諸関係に「攻撃 (*hujum/u*)」(フジウム)を仕掛けることが宣伝された。本稿の対象である「シャフリサブズ『フジウム』芸術製品工場」の名称は、これにちなんでいる。だが、反ヴェール運動の真の目的は、社会主義建設の障害であるイスラームの弱体化と女性労働力の確保にあったといわれる [Massell 1974]。

1928年に始まる全面的集団化以降は、女性解放とは、女性が労働者になり産業化に貢献することだと宣伝されるようになった。1930年には、「女性問題は解決した」と突如発表され女性部も解散した。1920年代後半に始まる女性に対する近代化事業は、前時代における政治、経済、文化領域における男女平等を目指すものではなく、五か年計画達成のために実施されたといえる [Buckley 1989: 128]。その一方で、労働者の夫を家庭で支える妻も産業化に貢献すると称賛されるようになり、女性は家庭と社会において活躍することが期待されるようになった。

女性の社会進出は、出征した男性に代わり女性が働く必要が生じた第二次世界大戦中に進んだ。村落部の女性はコルホーズ員やソフホーズ員として農業に従事し、都市部の女性は繊維工場の工員、教員、医療従事者などとして働くようになった。1950年の統計では、ウズベキスタン全労働者に占める女性の割合は40パーセントであることから、少なくない女性が労働者になっていた [五十嵐 2009: 21]。しかし、ウズベキスタンの女性活動家トフタホジャエヴァが、綿花畑に散布される殺虫剤が原因で悪性腫瘍を患いながらも労働英雄として称賛された女性、薄給の集団農場で働きながら家庭では「革命前」と同じように家族の世話に明け暮れた女性を挙げるように、女性の社会進出は多くの矛盾をはらんでいた [Tokhtakhodjaeva 1995: 111–114]。

1953年に始まるフルシチョフ体制の「脱スターリン主義」によって、女性の政治参加の必要性が再認識された。1920年代前半のような女性解放運動は実施されなかったが、なぜ女

性は政治活動をしないのかという問いが生じ、女性の二重負担の顕在化、家事・育児の社会サービスの有効性に疑問符が付された[Buckley 1989: 159]。続くブレジネフ時代には、「女性問題は解決されていない」と宣言され、女性の就労促進、女性管理職の増加、職種の偏り解消の試みがされた。一方で、当時全ソ連的に深刻化していた出生率低下、経済成長鈍化、労働力不足を解決するため、女性は家外で労働しつつ子供を産み育てる役割を持つとされ、社会サービスの充実化、パートタイム労働の導入などが検討されたが、その成果は不十分だった[Buckley 1989: 168]。一方、ウズベキスタンでは人口増加に伴う過剰労働力が生じ、全ソ連的な出生率低下や労働力不足とは状況を異にしていた。しかし、「女性問題は解決されていない」という公式見解の下、伝統的なジェンダー規範が未だ女性に影響力を持つことへの批判や、女性の社会進出の重要性が強調された[Constantine 2001: 142–150]。こうした状況は、家庭における女性の役割の固定化と二重負担の維持につながった。

ゴルバチョフによって断行されたペレストロイカは、人工妊娠中絶や売春など、1930年代以降、公的な出版物では取り上げられなかった女性問題を議論する機会を開いた[Buckley 1989: 191]。さらに、男性も家事・育児をすべきという主張も現れ、スターリン以来当然として受け入れられてきた、女性と家庭のつながりに疑問が投げかけられた。しかし、公式見解にとらわれない自由な言論活動は、皮肉にも経済立て直しのために断行された経済合理化と相まって、家事・育児ゆえに男性のように働けない女性は、本来の居場所である家庭に戻るべきという主張を生み出していった。この論調は、1991年のソ連解体後における女性の高失業率の一因となり、こうした伝統回帰志向は、ウズベキスタン独立後のナショナリズムと結びつき強化されていく。

2. 女性は解放されたのか：先行研究と本稿の視座

女性に対する近代化事業は、先行研究ではいかに評価されているのか。その論点は、ソ連時代ならびにソ連解体以後に行われた研究に大別できる。

●ソ連時代の研究

スターリンの「女性問題は解決済み」という宣言は、社会主義イデオロギーの正当化を使命とするソ連の学術状況において、男女の格差問題を正面から取り上げることを困難にさせた。研究者の目的は、就労促進、教育普及、反ヴェール運動が女性を解放した／しつつあるという、社会主義の成果をアピールすることにあった[Aminova 1977]。多くの女性が革命後に共産党員になったこと、反ヴェール運動では封建的遺物が一掃され、女性は男性と同等に働くようになったことが示され[Bikzhanova, Zadykhina, i Sukhareva 1962: 326–327]、ソ連経済のさらなる発展のため、家庭にいる女性を社会的生産活動に巻き込むことや女性労働者

の生産効率向上の方策が議論された [Ubaidullaeva 1969]。

ソ連研究者とは異なる主張をしたのが西側諸国の研究者である。Massell [1974] は、女性解放の目的は女性を労働力として動員し社会主義建設を進めることにあり、女性の自立や男女平等は建前だと主張した。Lubin [1981] は統計データに基づき、中央アジア女性の教育及び就労機会は拡大したが、女性は非熟練の職に就き、高等教育における退学率が高い傾向にあることを示した。そして、中央アジアでは男女平等は達成されていないと主張した。Tolmacheva [1993] は、イスラーム信仰実践は女性が行う傾向にあり、家庭ではイスラームに基づく男女のあり方が維持されていると論じた。

ソ連時代の女性に関する研究の多くは、女性は解放されたか否かを論じたものである。これらの研究から、ソ連時代に女性に対する教育普及、就労促進、政治参加の試みが行われていたこと、限定的ではあるが教育や労働において女性の地位は向上した一方で、女性や家族に関する伝統的な規範は維持されていたことが明らかとなった。しかしながら、イデオロギー上の制約や資料アクセスが困難だったことから、女性の社会主義的近代化の実態は明らかにされなかった。

●ソ連解体後の研究

1991年のソ連解体を機に、公文書館資料の利用やインタビュー調査が容易になったことで、外国人研究者の研究が本格化し、ソ連時代の女性解放や女性の経験の解明が進んだ。Kamp [2006] は、1920年代の女性解放思想に共鳴した現地女性の言論活動に注目し、女性解放運動が現地女性によっても支えられていたことを明らかにした。1927年の反ヴェール運動に関して、Northrop [2004] や Edgar [2006] は抵抗活動に着目し、これは当時権力を失いつつあった現地男性による復権のためであったこと、抵抗活動の中で伝統的なジェンダー規範や家族のあり方は、反ソヴィエトの象徴になったことを明らかにした。

スターリン期のヴェール着脱をめぐる「政治」に着目した須田 [2011] によれば、女性解放は、そのコミットの程度により現地住民を序列化し差異化するプロセスであった。現地住民は、社会主義的生活様式と価値規範を身に付けているかを監視し合い、「旧習」を維持する人を排除し、排除の恐怖を目の当たりにしながら自己を規律づけたという [須田 2011: 51]。しかし、人々は排除に対する恐怖ゆえに社会主義的生活様式や価値観を妄信したのではなかった。一見模範的な党員だが家庭では「旧習」を維持する男性、国際女性の日が近づいた時だけヴェール廃棄を提案する女性活動家 [須田 2011: 43–44] がいたように、不断の差異化プロセスは、人々に社会主義的価値規範と伝統的価値規範の両者の内面化を促したのである。

ソ連時代に、女性が「社会主義」と「伝統」という異なる価値規範を内面化したことは、Constantine [2001] も主張する。彼女は、現地女性が、自らの権利を自覚し政治に参加し、

労働者として社会に貢献し、将来のソ連を支える子供を産み育て、家庭を切り盛りするという「ソヴィエト的女性らしさ」を受け入れたのは、給料や年金という経済的インセンティブと、教育や医療の無料という社会サービスの享受を通して、ソヴィエト政権に依存するようになったからだと述べる。

ソ連時代に人々がいかにして「伝統」と「社会主義」両者を内面化したかについては、人類学的研究においても議論されてきた。クルグズスタンの農村において親族ネットワークの研究を行った吉田[2004]によれば、1920年代後半に行われた農業集団化はウルックという父系出自分節を基盤に実施され、その結果ウルックは制度的に強化されたという。また、ウズベキスタン東部リシトン市の陶業の社会主義的近代化を取り上げた菊田[2005, 2013]の研究も示唆に富む。リシトン市では1930年代後半に生産組合が設立され、陶業は社会主義的生産体制に組み込まれた。しかし、生産は親方を長とする既存の工房単位で行われたために、師弟関係や守護聖者崇敬は維持されたという。これらの研究からは、ソヴィエト政権は、伝統的な社会関係を体制に組み込みながら近代化事業を進めたこと、それゆえに、伝統的な社会関係や価値規範は体制の中で居場所を見つけたことがわかる。この視点に立つと、須田[2009]の言う不断の差異化や、Constantine [2001]の言う経済的インセンティブ及び社会サービスとは異なる、伝統的な社会関係及び価値規範と社会主義を建設する志向との関わりが見えてくる。

フジウムは設立からソ連末期まで構成員の多くは女性で、家事・育児に忙しい女性は自宅で生産活動をすることもできた(第三章で後述)。菊田が、社会主義的生産体制への改編がなされても、生産の場で「慣習の再生産」が行われたと指摘するように[菊田 2013: 345]、女性解放を目指したフジウムにおいても、「手工芸生産は女性の仕事」「家事と育児は女性の仕事」という伝統的なジェンダー役割が再生産されていた。社会主義建設という近代化事業がその理念に逆行するような状況をもたらしたのはなぜか。

アブー＝ルゴド[2009]は、女性に対する近代化事業は、女性の役割の変革を目指したのではなく、解放を通して家庭における女性の役割を再定義し強化する側面があったと述べる。河本[2008]も、多子母を叙勲する「母親英雄制度」や女子学生の家庭科必修化などを通して、ソヴィエト政権は家庭における女性の役割に介入していたことを指摘する。アブー＝ルゴドや河本の議論を参考にすれば、ソヴィエト政権は、国家の発展に資する限りにおいてこれを支持した可能性が浮かび上がる。これらの議論を踏まえ、本稿では、社会主義を建設する志向と伝統的な社会規範は対立的な関係にあったのか否かという視点から、ソ連期ウズベキスタンにおける女性の社会主義的近代化の実態を明らかにする。

3. フィールドワークの概要と資料

シャフリサブズ市は、ヒッサール山脈とザラフシャン山脈を望む水資源豊かな地に位置し、人口は約9万人、その多くはウズベク人という地方都市である [Azizxo‘jaev va b. 2005: 26]。ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国が成立した1926年、シャフリサブズはカシュカダリヤ州シャフリサブズ地区の中心地としてソ連行政機構に組み込まれ、州第二の近代都市として機能するようになった。

本稿で依拠する資料は、フジウム元労働者の聞き取り調査、カシュカダリヤ州シャフリサブズ地区国家文書館 (QVShTDA) 所蔵のフジウムの年次生産計画と報告書、その他関連資料をまとめた「シャフリサブズ地区『フジウム』芸術製品工場」(*Shahrisabz tumani «Hujum» badiiy buyumlar fabrikasi*) (1942～1992年)、新聞などの刊行物である。第Ⅱ章、Ⅲ章で紹介する元労働者の語りは、2010年4月～2011年11月と2017年9～10月の調査、2019年5月の補足調査で収集した。

聞き取り調査はインフォーマントの知人を紹介してもらいながら、元労働者13名(表1)に行った。13名はシャフリサブズ市内に居住し、12名がシャフリサブズ市内、1名(H)が市外出身者だった。聞き取りはウズベク語で30～90分程度行い、筆者一人で行うこともあれば紹介者等が同席することもあった。聞き取りでは、名前、生年、勤続年数、フジウム参加のきっかけ、労働環境(労働形態、給料、施設、社会保障)、フジウムと家庭生活の関わり(家族との家事・育児の分担)について質問した。2010年に調査を始めた頃は、フジウムの情報が不足していたため、フジウムの歴史や労働環境を中心に話してもらった。フジウムの基本情報を得た2011年以降は、インフォーマントには主にフジウムと家庭生活の関わりを話してもらった。2011年と2017年の調査では許可を得て音声を録音した。

聞き取りを行った元労働者はどのような人々か。13名中12名は、10代後半の若い頃に就労した(Fを除く)。その12名のうち9名は義務教育⁽⁴⁾修了後すぐにフジウムに就労した。残り3名のうち2名のEとJは義務教育修学中にフジウムに就労した。彼女らはフジウムの援助を受け高等教育や中等専門教育機関で学び、その後管理職に就いたエリートである。

フジウムを就労先に選んだのは、進学が叶わなかった(I、K、L、M)、他に働くところなかった(C)という理由が挙げられている。ここから、フジウムは義務教育修了者の就労先だったことがわかる。また、母や祖母が働いていた(B、E)、女性ばかりの職場だった(J)という理由からは、フジウムは女性のための就労先だったこともわかる。

13名中Dを除いた12名はいずれも就労期間が20年～40年程度で、フジウムの労働をもって年金受給資格を得た人々である。退職時の役職は、生産活動のみを行う自家手工業者、後輩指導とノルマ管理を行う職長、管理職的立場の品質管理部門、絨毯部門長、労働者委員会

(4) 10年または11年間の初等教育と中等教育を指す。

表1 聞き取りをしたフジウム元労働者一覧

名前	生年	労働期間	労働年数	聞き取り実施日 ^{*1}	フジウムに参加したきっかけ	結婚経験 ^{*2}	結婚後の家族構成	学歴	就労部門 ^{*3}	自家手工業者	共産党員	就労時の同居家族	退職時の同居家族	家事・育児の負担
A	1922	1940頃～77頃	38年位	2011/10/18 (○)	貧しかった	死別	夫、娘(1人)	義務教育	刺繍部門→刺繍部門(職長)			不明	娘、娘婿	不明
B	1938	1956～1981	26年	2011/4/20、10/17 (○)、2019/5/20	母と祖母が働いていた	死別	夫、息子(1人)、娘(6人)	義務教育	絨毯部門→絨毯部門(職長)→刺繍部門(部門長)→絨毯部門(部門長)→労働者委員会		共産党員	舅、姑、夫、夫の妹(2人)	夫、息子、息子の嫁、娘(6人)	一人でやった
C	1941	1959～1992	34年	2010/10/10	絨毯織りに興味があった。他に働く場所がなかった	既婚	夫、息子(1人)、娘(2人)	義務教育	絨毯部門→絨毯部門(職長)		共産党員	父、母、兄、兄弟(1人)	姑、夫、息子	姑が手伝う
D	1946	1965頃 半年ほど	半年	2010/9/20、2019/5/20	夫に教職に就くのを反対された	死別	夫、息子(3人)、娘(4人)	高等教育	ミシン刺繍部門			舅、姑、夫、夫の兄弟(3人)、夫の兄弟の嫁(3人)	就労時と同じ	嫁たちと分担
E	1951	1965～2005頃	41年位	2011/02/10 (○)、2017/09/30 (○)、2019/5/19	母と祖母が働いていた	離別	夫、息子(2人)、娘(2人)	高等教育	絨毯部門→品質管理部門→工場長→絨毯部門(部門長)		共産党員	父、母、兄弟(4人)	息子、娘	一人でやった
F	1937	1966～1985	20年	2017/9/30	家にいるのが退屈になった	死別	夫、息子(3人)、娘(8人)	義務教育	絨毯部門	自家手工業者(1971頃～)		夫、娘(1人)	夫、息子(1人)、娘(3人)	一人でやった
G	1948	1966～1998	33年	2017/10/2 (○)、2019/5/19	ミシン刺繍には興味がなかった	死別	夫、息子(2人)、娘(3人)	義務教育	絨毯部門	自家手工業者(1980～)		父、母、兄弟(2人)、姉妹(7人)	夫、息子、息子の嫁、孫	一人でやった
H	1948	1967～1992	26年	2017/9/30 (○)、2019/5/20	姑にフジウムで働くよう言われた	死別	夫、息子(4人)、娘(4人)	義務教育	ミシン刺繍部門→ミシン刺繍部門(職長)		共産党員	姑、夫、夫の兄弟(2人)、夫の兄弟の嫁(2人)	息子(3人)、息子の嫁(2人)、娘(1人)	嫁たちと分担
I	1950	1969～2000	32年	2017/10/2 (○)、2019/5/20	父に進学を反対された	死別	夫、息子(2人)、娘(1人)	義務教育	ミシン刺繍部門→ミシン刺繍部門(職長)			父、母、兄、姉妹(2人)	夫、息子(2人)、娘(1人)	母親が手伝う
J	1955	1970～2000	31年	2017/10/2 (○)	女性ばかりの職場	離別	夫、息子(1人)	中等専門教育	絨毯部門→ミシン刺繍部門→縫製部門→品質管理部門		共産党員	父、母、姉妹(3人)	息子	一人でやった
K	1959	1976～1998	23年	2011/10/17	進学できなかった	既婚	夫、息子(2人)、娘(3人)	義務教育	ミシン刺繍部門→ミシン刺繍部門(海外輸出部門職長)			父、母、兄弟(2人)、姉妹(2人)	夫、息子(2人)、娘(3人)	夫の妹、夫が手伝う
L	1962	1980～2005頃	26年	2011/10/22、2019/5/21	病気になり進学できなかった	既婚	夫、息子(1人)、娘(3人)	義務教育	ミシン刺繍部門→縫製部門→ミシン刺繍部門→縫製部門	自家手工業者(1985～86、1988～1990)		祖父、父、母、兄弟(3人)、姉妹(5人)	姑、夫、息子、娘(2人)	子供を保育園に預ける
M	1963	1981～2003	23年	2010/10/10、2019/5/20	大学に進学できなかった	既婚	夫、息子(2人)、娘(2人)	義務教育	ミシン刺繍部門→刺繍部門(職長)			父、母、姉妹(3人)、兄弟(2人)	夫、息子(2人)、息子の嫁(1人)、娘(2人)	子供を保育園に預ける

*1 ○は録音 *2 初回聞き取り時 *3 ()内は役職、→は部門及び役職変遷

と差異がある。管理職に就いた3名(B、E、J)は共産党員で、自家手工業者だった3名(F、G、M)は共産党員でない。長期間のフジウムでの労働経験を有する12名は役職に差異があり、そこには共産党員か否かが関係していたことがわかる。

家族生活とフジウムでの労働との関わりは、13名中8名が結婚前に就労し(C、E、G、I、J、K、L、M)、4名が結婚後に就労した(B、D、F、H。なおAは不明)。共通点は結婚後や出産後も働いたことである。家事・育児の負担については、5名が一人でこなした⁽⁵⁾、5名が嫁、姑、母親と分担、2名が子供を保育園に預けた、と答えた。元労働者は、家事・育児の負担の程度に個人差はあるが、フジウムで働きながら家事・育児をこなした。

まとめると、聞き取りを行った元労働者の多くは、義務教育修了後(あるいは修学中)にフジウムに就労し一定期間働き続けた。彼女たちは共産党活動との関わりや家庭の事情により役職に差異はあったが、フジウムでの労働と家事・育児を両立していた。

II. フジウムはどのような組織だったのか

本章では、「シャフリサブズ『フジウム』芸術工場50周年の饗宴のための、半世紀の道のりについての工場長の講話」(Shahrisabz “Hujum” badiiy fabrikasining 50 yilligiga bag’ishlagan taitalari yig’ilishda korxonasi yarim asrlik yo’li tog’risida fabrika direktorining ma’ruzasi) [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 235] を中心とする公文書と元労働者の語りに基づき、フジウム設立と変遷を概観する。演説原稿は、フジウムの女性解放と連経済への貢献をアピールするプロパガンダ的内容だが、この資料を読み解くことで、フジウムが公的にどのような組織として位置付けられていたかが明らかになる。

1. フジウム設立と女性解放

中央アジアのオアシス定住社会では、刺繍は、覆い、帷、壁掛け、衣服に施される生活に欠かせない装飾だった。女性は家族のために刺繍を縫った[Chepelevetskaya 1961: 18]。

1928年、7人の女性活動家が刺繍入り民族帽子のドゥッピ生産に特化した生産組合フジウムを設立した[QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 178: 3]。ザイニッディノヴァは以下の様に設立の様子を演説する。

(略) シャフリサブズでは、女性を自由へ解放する歴史は「フジウム」工場の歴史と固く結ばれている。(中略) 共産党、ソヴィエト、社会組織の多方面にわたる文化的、政

(5) 一般的に、10歳頃になると女性は家事や育児を手伝うようになる。ゆえに「一人でこなした」と答えても、娘や夫の姉妹が元労働者の手伝いをした可能性はある。

治的成果は、社会主義建設の活動的建設者になった女性が、公衆の面前で根本的な変化を生み出したことである。何千人の女性が次々にパランジを燃やした。彼女たちの中から、女性の自由のための多くの闘争活動が現れた。この活動的な女性たちは、他の女性の間で説得するという偉大な仕事をした。彼女たちは、平等のための社会主義建設に参加した。町では女性のための生産組合の設立が始まった。

1928年の春に設立された芸術製品を生産する生産組合は、女性が働く工場の一つとなった。生産組合には、「フジウム」という名前が与えられた。この名前が与えられたのは驚くべきことではなかった、勿論のこと。この時、女性を自由へ解放することを目の当たりにしていた「フジウム」委員会は勝利し続けていた。「フジウム」生産組合は、町の女性に自由をつくる中心の一つに変わったのだ [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 235: 3-4]。

ここで、ザイニッディノヴァが「何千人の女性が次々にパランジを燃やした」と述べるのは、1927年に開始された反ヴェール運動のことである。第I章で触れたように、前近代的諸慣習の根絶を目指し行われた反ヴェール運動の名前を冠した生産組合は、前近代的慣習からの女性の解放を理念に設立された。

設立当初は小規模だったフジウムは、活動家の地道な勧誘活動のおかげで規模を拡大していった [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 235: 4]。1930年代後半にフジウムの経営は軌道に乗る。シャフリサブズ市に隣接するキタブ市及び周辺村落部では支部が設立された [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 235: 5]。1936年には、1973年まで工場長を務めた現地女性モヒニソ・ジャラロヴァ (Mohiniso Jalalova, 1910～2003年頃没) が組合長に就任した。元労働者の中で伝わる話として、Eは、ジャラロヴァが女性をフジウムに引き込んだ様子を以下の様に語る⁽⁶⁾。

家で、女性はみんな退屈だったので、ジャラロヴァは女性をフジウムに集めてから、一人ずつ女性を呼び出しました。ジャラロヴァは「お喋りをしながら縫いましょう。歌いながら縫いましょう」と言いました。彼女たちは歌いながら、踊りながら仕事をしました。女性たちは退屈でしょう。こうして、ジャラロヴァは女性を集めていって、フジウムに参加する女性は増えていきました。以前は、フジウムに参加したのは3人でした。それが7人に、10人に、そして30人になりました。

ジャラロヴァが組合長となった経緯は不明だが、元労働者の間では彼女がフジウム発展に最も貢献した人物と認識されている。

1941～1945年の第二次世界大戦はフジウムにも影響を与えた。シャフリサブズでも男性が

⁽⁶⁾ 2017年9月30日。

前線に赴き、女性が生計を支えなければならず、多くの女性がフジウムに参加した [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 178: 3]。

2. 工場への改編と規模拡大

1960年、フジウム生産組合は国営の「シャフリサブズ『フジウム』芸術製品工場」に改編され、生産部門新設、機械化、労働者増加が本格化した。1958年に422人だった構成員数は工場改編3年後の1963年には688人、新工場への移転が開始された1973年には1,112人、1984年には2,100人に増加した(図1)。構成員の多くは女性で、男性は修理工や染色部門で働いた。1969年の報告書には全構成員1,010名中、高等教育修了者0名、中等専門教育修了者162名、中等教育修了者587名、初等教育修了者261名とある [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 211: 1]。

1960年、絨毯部門と刺繍部門が新設された。1963年にはウズベキスタン初のミシン縫いドゥッピ「スヴェニル」を生産した [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 178: 8]。1977年には絨毯の半数は機械織りとなった [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 178: 9]。当時のフジウムは、絨毯部門、刺繍部門、ミシン刺繍部門、日用衣料を生産する縫製部門、染色部門を有していた [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 122: 8-9]。

機械化は進められたが、輸出、展示のための手仕事も続けられた。1975年のソ連国民経済達成博覧会にはドゥッピ2種類と絨毯が [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 167: 1]、1977年にはモスクワの歴史博物館にドゥッピ3種類、チョッキ、絨毯が収蔵され、輸出用のドゥッピ3種類が生産された [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 189: 1]。これらは高い技術を持つ労働者が生産した。製品デザインを手掛ける「創造的グループ(*ijodiy gruppa/u*)」も結成された [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 178: 4]。

3. 労働環境

工場の労働時間は、月曜から金曜、8時から17時だった。ミシン刺繍部門では17時～0時の労働時間もあり、Lは1985年に結婚するまで17時～0時の時間帯で働いた。送迎バスがあったので夜遅くても困らなかったという。Bによれば、平日に家庭の事情で出勤できなければ、土日に働くこともできたという。給料は部門ごと設定され、ノルマ分と超過生産分が合わせて支給された。絨毯部門のノルマは一日に35～40センチ織ることで、Cによればノルマ達成は難しくなかったという。給料は「他の仕事と比べて遜色なかった」(K)や、「生活には足りていた。安かったんだ。すべての物が」(B⁽⁷⁾)というように特段悪くなかったようだ。

自家手工業者として在宅で働くこともできた。ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国地場産業省の「民族芸術製品企業における在宅労働の体制に関する指導規定」では、芸術的技術

(7) 2011年4月20日。

を所有する職人を、居住地にしながら社会的生産に巻き込むことを重要な計画目標と定め、民族芸術製品企業が自家手工業者を雇用する権利を認めている [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 118: 1]。図 1 からは、1969 年から 1988 年にかけて自家手工業者は全労働者の半数近くを占めたことがわかる。

フジウムには食堂、保育所、クラブ、商店、診療所、図書室があった [Qashqadaryo haqiqati 1972: 2]。夜間学校で学びながら働く未成年や未就学者もいた。前者は共産党やコムソモールと関わりを持ち、中等専門教育や高等教育を受ける者も多く [Zaxarov 1979: 35]、工場の幹部候補生だった。休息旅行もあった。週五日制労働が導入された 1968 年には、ブハラやサマルカンド旅行、映画やコンサート鑑賞が企画され [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 105: 9]、1977 年には、313 人が保養施設の利用、共和国内や連邦内の旅行をした [QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 153: 58]。A は「一番目はレニナバード(筆者注：現ホジャンド)。二番目はコーカンドへ行って、宿舎に泊まって、三番目はアンディジャン、ナマンガンを回って、羊を一頭手に入れて、その後屠って、一晩中踊っていましたよ」と休息旅行の思い出を懐かしむ。ソ連時代に職場の特典で旅行したことは、元労働者から楽しい思い出として語られる。

4. フジウムと女性労働者

フジウムは、女性解放を目指し 1928 年に設立された。家族のために行っていた手工芸生産は、フジウム設立により、生産活動の対価として国から給料や社会保障の恩恵を受けられる労働となった。また、フジウム製品は国内外で高い評価を受けた。このことは、フジウムは手工芸生産を報酬を得る労働に変えるだけでなく、ソ連の文化水準の高さを内外に示す社会的意義を持つ活動に変えたといえよう。

しかし、元労働者はフジウムを選んだ理由を「女性ばかりが働いていたから」、「父親に進学を反対されたから」と述べた。こうした発言は、フジウムは女性を伝統的な価値規範から完全に解放したわけではなかったことを示す。フジウムの労働により女性は経済力を身に付けたが、むしろフジウムのような女性のための就労先は、労働現場におけるジェンダーの固定化を招いたのである。

Ⅲ. 元労働者たち：フジウムで働くことはどのような経験だったのか

本章では、B、E、G を中心にフジウムの労働経験を紹介する。聞き取りを行った元労働者は概してフジウムの労働生活を懐かしんでいた。これには、元労働者の多くがソ連の生活水準が向上した 1960 年～1970 年代を現役で過ごしたこと、一方で、聞き取り調査を行った 2010 年、11 年、17 年頃は、就労難、海外出稼ぎ者の増加、社会保障の縮小、慢性化するイン

フレなど不確実性の高い生活状況にあったことが関連するだろう。

しかし、調査では自らのフジウムでの労働経験を「ソ連時代の女性は本当によく働いた」(E)、「半年かかる研修期間を3か月で終えた」(I)、「刺繍の腕がよかったので海外輸出部門で働いた」(K)、などと誇らしげに話す元労働者を目の当たりにした。そのため筆者は、彼女たちがフジウムの労働を肯定的に語るのは、ソ連時代に対するノスタルジーだけではないと考えるに至った。本章ではB、E、Gの3名を取り上げ、彼女たちの語りから、元労働者がフジウムでの経験を肯定的にとらえるのはなぜかという問いに答えたい。

1. 働く母親の体現としてのフジウム労働：Bを中心に

Bは1938年生まれで(2011年調査時点で73才)、1956～1981年(18～43才)にフジウムで働いた。母と祖母が刺繍部門で働いていたのがそのきっかけである。彼女が絨毯織りに参加した時、機械化は進んでおらず、女性4人が2台の織機で作業するのみだったという。フジウム就労後、Bは家々を訪ね未就労の女性に就労を呼び掛けフジウム拡大に尽力した。また、共産党員になったBは、地区の党活動にも積極的に参加するようになった。

Bは1970年に絨毯部門長となった。キタブ地区にある支部とフジウムを行き来し、学校を訪れては学生に絨毯や刺繍の技術を教えた。その後は、工場の労働者委員会に異動し工場長の右腕として働いた。1981年にフジウムを退職したのちは、1995年まで地区共産党委員会の職員を務め、2006年までは地域住民の自治組織であるマハッラ委員会のオクソコル(oqsokol/u)⁽⁸⁾を務めた。Bはフジウム発展に尽力するだけでなく、地域社会の発展にも尽くしたキャリアウーマンだった。Bは、労働に対する考えと自身の働きぶりを以下のように語る。

筆者：部門長としてあなたはたくさん働きました。労働者の中には、よく働く人とよく働かない人はいましたか。その違いは何ですか。

B：エネルギーのある人は早く習得する。エネルギーのない人は、「ふわっ」としている人は習得できない。苦勞する。違いはとても大きい。私が15メートル織れば、一人は6メートル織る。私は15メートル織っていた。その違いは大きい。エネルギーになるためには、自分で面白がらなければならない。努力しなければならない。自分で努力せず、面白がらず、ただ何となく過ごしたら何ができますか。このような人は習得できない。苦勞する⁽⁹⁾。

⁽⁸⁾ マハッラ(mhalla/u)はアラビア語を起源とし、歴史的には近隣コミュニティを意味する。現代のウズベキスタンにおけるマハッラ委員会は、地区行政庁の末端組織として行政の補助業務を行う。オクソコルは元来「白髭」を意味する。一般的には共同体の長老を指す語であり、マハッラ委員会議長の職名でもある。

⁽⁹⁾ 2011年4月20日。

このように仕事熱心なBだが、現役時代は1人で家事と育児をしたと話す。以下は、女性の家事・育児と家外労働についての発言である⁽¹⁰⁾。

筆者：私の考えでは、ウズベク人女性は外で働くことよりも、家の仕事をするのが重要なので、他の場所で働くと言えば、大変にはならないのですか。

B：以前はそうだった。いいえ、大変にはならない。例えば私は7人の子供を育てた。働いた。7人の子供は大学卒業の学歴を持つ。私たちは彼らの家をつくり場所をつくった。私は50年働いた。女性は働くことを望めば働く。すべての女性は仕事をするのを望まない。家にいて夫の稼ぎに頼る人もいる。彼女らは少数で多くの女性は働いている。多くの女性は働いて自分を守り□□□⁽¹¹⁾働いている。女性は商売人になって働いている。自営業者として働いている。今や女性は、大・小のビジネスをするようになった。多くの女性は仕事をしている。学校で教師となって働く。病院で働いている。オフィスの事務員として働いている。幼稚園、学校、女性たちはたくさん。

筆者：このように働く女性は家の仕事を自分だけでするのですか？

B：自分でもする。手伝う人がいれば手伝う。いなければ自分でする。

筆者：自分ですることはできるのですか。

B：自分でできる。

筆者：家は大きいでしょう。家族も大きいでしょう。

B：お手伝いはいなかった。自分ですべてしました。

筆者：あなたは50年働きました。私にはできません。だから驚いています。

B：いいえ。結婚すれば、やらなければならない。家の仕事をする時間を見つけなさい。夫が帰って来る。料理を作らなければならない。あんたは働いて帰って来る。時間を見つけなさい。夫が来いと言えば□□□、料理を作るんだ。夫が服を洗えと言えば、夜も昼も働きながら、2時間の時間を見つけなさい、服を洗っておく、掃き掃除をする……

筆者：旦那さんは手伝わなかったのですか。

B：いいえ。手伝わない。主人は仕事がない時は手伝っていた。車でリンゴを買ってきたり、氷砂糖を持って来たり。家の外に出て手伝っていた。

Bは、家事に対して「時間を見つける」能動的な姿勢を重視し、女性が家外で働きながら家事・育児をするのは当然と考える。Bが現役だった1960年代は、公共ケータリング、家電製品の導入、保育園の数と質向上が行われたが、これらは不十分に終わり、女性は家事・

⁽¹⁰⁾ 2011年4月20日。

⁽¹¹⁾ □は不明箇所（以下に同じ）。

育児を担い続けることになった。B もまた、自身で家事と育児を担わざるを得なかったと考えられる。夫は買い出しをした、と B は話す。買い出しは伝統的なジェンダー役割では男性の仕事である。B は、フジムの模範的労働者でフジム発展の功労者だった。一方で家庭では、B は夫に付き従い家事と育児を担った。

B は、独立後ウズベキスタンの経済、学術、文化発展の功労者に贈られる名誉勲章 (*Shuhrat Medali*) を獲得した。2011年当時は、彼女はマハッラ女性部長をつとめ、ドゥッピ縫いをマハッラの子供に教えていた。B はフジムの幹部や地区共産党の職員として働き、引退後は地域社会の取りまとめ役をする有力者である。さらに現役時代の彼女は社会的地位を確立しつつ、家庭における伝統的なジェンダー役割を遂行した。B にとってフジムの労働と家事・育児は不可分の関係にあった。

2. 自家手工業者としてのフジムの労働：G を中心に

G は 1948 年生まれで (2017 年時点で 69 才)、1966～1998 年 (18～50 才) に絨毯部門で働いた。ミシンの音が苦手だったので絨毯部門に入った。当初、G は工場労働者だったが自宅に織機があったので夜も絨毯を織った。昼夜フジムのために絨毯を織ったので、給料を多く貰ったという。G は双子の姉をフジムに誘い一緒に働いた。G は結婚・妊娠を機に自家手工業者として働き始めた。G は自宅で働くようになった理由を以下の様に語る。

子供の面倒を見る人がいなかったんです。当時は、40 日の産後休業でした。チッラ⁽¹²⁾が明けてから仕事をしたのです。でも、私は家に織機を買いました。家で織りました。そして、子供の面倒を見ながら家事をしました。当時は、家畜もいたので家畜の面倒も見ます。その合間に絨毯を織っていました。

G は、姑をすでに亡くしており育児の助っ人がいなかったもので、育児・家事と家畜の世話をしながら自家手工業者として絨毯を織った。一方で、双子の姉はどのように働いていたのだろうか。

筆者：お姉さんも家で絨毯を織っていたのですか？

G：彼女の姑が子供の面倒を見ました。彼女はフジムで働きました。家では絨毯は織りませんでした。姑が子供の面倒を見ました。

筆者：面倒を見る人がいなければ……

G：家です。面倒を見る人がいればフジム工場で働きます。姉の夫は仕事へ行ってい

(12) 出産後 40 日間のこと。この期間は出産後の女性は外出を控えるべきとされる。

ました。彼女も仕事に行っていました。

姉には育児を手伝う姑がいたので、出産後も工場労働者として働き続けた。前章で述べたように、自家手工業者制度は芸術的技術を持つ人を社会的生産に巻き込むことを目的としていた。だが、Gの話からは、フジムの労働者にとっては、技術の有無よりも家事・育児の援助の有無が、自家手工業者として働くかどうかを左右していたことがわかる。

自家手工業者は待遇で違いはあるのか。主婦だったFは、「家にいるのが退屈になった」ために、1966年に娘を保育園に預けフジムで働き出したが、5人目の出産を機に自家手工業者になった。F曰く、自家手工業者と工場労働者は給料に差はなく、自宅で働けば子供が手伝うのでよいペースで織ることができたという。

Gは1998年にフジムを退職した。現在は、年金を受給しながらEの姪Yuの手工芸工房で娘と共に絨毯を織る。Gは年金を受給できること、フジムで修得した技術を生かし母子共々働き続けられることに対して、「神様のおかげ(*xudoga shukur/u*)」と何度も述べた。Gは年金や絨毯織りの技術を糧に現在の生活を営んでいる。自家手工業者は、フジム幹部になることはなくもっぱら労働者として生産活動のみに従事した。しかし、給料や年金に差はなかったという。むしろ、家の外に出ることなく給料や年金を享受できる自家手工業者は、家事や育児に忙しい女性にとって魅力的な働き方だったといえる。

3. フジムの労働に生きがいを見出す：Eを中心に

Eは1951年生まれで(2011年時点で60才)、1965～2005年(14～54才)にフジムで働いた。母親と祖母がフジムでドゥッピを作っていたのがフジムを選んだきっかけである。彼女がフジムで働こうと考えたとき、就労年齢には達していなかった。だが、ジャラロヴァ工場長の取り計らいで就労できた。Eは夜間学校に行きながらフジムで働き、卒業後はフジムの援助を得てタシュケント繊維産業大学で学び、フジム初の大学卒業者になった。

Eは20代半ばで工場長候補になるほどのエリートだった。しかし、Eの人生は「順風満帆」ではなかった。彼女は大学在学中に胃の病気で学業を中断し、学業に復帰し大学を卒業したのは28歳の時だった。卒業後には兄の紹介で結婚する。Eは、結婚生活とフジムの関わりを以下の様に語る⁽¹³⁾。

筆者：いつ結婚したのですか？

E：結婚？ 78年に結婚しました。大学を卒業して28歳で結婚しました。

⁽¹³⁾ 2011年2月10日。姪のYu氏(43才)も同席。

筆者：遅くないのですか？⁽¹⁴⁾

E：遅い。もちろん遅いです。でも、私は学位を取らなければならなかった。結婚すれば続けることができなかった。29歳で出産しました。今は3人の息子と1人の娘がいます。79年に出産しました。78年に結婚して79年に出産しました。

筆者：結婚してもフジウムで……

E：はい。フジウムで働きました。40年間フジウムで働きました。

筆者：ご主人は許したのですか？

E：はい。主人が許しても許さなくても私は働きました。主人は理解しなかった、学ばなかった。

Yu：叔母はとても苦労しました。叔母の夫は理解もなく学歴もない人なんです。良い人ではなかった。

E：子供がいたので一緒に住んでいましたが、最後は離婚しました。その後、私はやはり仕事を続けました。私は離婚したことを気にしなかった。なぜなら自分の専門に関心があったから。仕事が好きでなんです。

Yu：もし、工場長の時に叔母に夫がいなければ、叔母はとてもよい生活をしたはずですよ。叔母の夫は良い人ではなかった。

E曰く、夫は「理解の無い人」だったという。1986年にEは工場長になったが、出産で休業することになった。Eは工場長に復職しようとしたが、夫に反対され部門長として復職した。Eは工場長に戻れなかったことを悔やんでいた。1990年代後半に離婚後、Eはフジウムで54歳まで働き続けた。彼女は、働き続けたことを以下のように語る。

そうです。働かなければやっていけない。ここでは、困難があったとしても。そのためにも働かなければならない、働くためには力が必要、知識が必要、記憶が必要。皆が働くために。職業を愛すれば、なぜその職業なのかは説明しないでしょう。そうでしょう？この職業を愛した後は、説明できないですよ。やはり、私はまた工場へ来ました。私は、54歳から年金生活をしています。60歳になりました。8年、7年ですか、すでに7年間年金生活していますが、頑張っています。姪を手伝わなければならない。ビジネスに関して、彼女の代わりに走らなければならない。

女性にとって、離婚は経済的基盤だけでなく社会的地位を揺るがす。Eは離婚後もフジウムで働き子供を養った。フジウムでの労働は生計を立てるために必要だっただろう。だがそ

⁽¹⁴⁾ ウズベク人女性の初婚年齢は20歳前後なので、筆者はこのような質問をした。

れだけではない。Eは、結婚生活の破綻によって生じる経済的、社会的リスクを、労働に打ち込むことで埋め合わせたのではないだろうか。

Aもまたフジウムに「生きがい」を見出す女性である。彼女はフジウムに参加した当時のことを「1940年は、食べ物が無い。小麦を取って、少し落穂を拾って、少しの料理を作って食べるのです。全くの困窮ですよ」と振り返った。彼女にとってフジウムへの参加は、貧困からの脱出だった。「工場で働いたことは幸せなことですか」というEの質問に対して⁽¹⁵⁾、Aは「はい。私は工場のおかげで、パンを食べられます。工場のおかげで服を着られます。これだけ長い間、工場は私を養ってくれました。私には息子はいません。娘が1人います。私には工場だけです」と答えた。Aは、40年間フジウムで働き、ドゥッピの縫い手として勲章を授与された優秀労働者である。AやEの話から、彼女たちにとって、フジウムの労働で得た学歴や功績は、婚家に仕え男児を産み育てよという家父長制家族におけるあるべき女性像を実現できないという負い目を、覆すものだったのではないだろうか。

IV. 考察

前章で元労働者は三者三様ながら、結婚して子供(男児)を持ち家事と育児を担うという家父長制家族における女性像を意識しながら、フジウムで働いたことが明らかとなった。本章では、家父長制家族におけるあるべき女性像が存続する中で、元労働者たちはいかにソヴィエト的女性らしさを受容したのかを考察する。

ソ連時代の女性は家外労働と家事・育児の二重負担を担ったが、フジウム元労働者の多くも働きながら家事と育児をこなした。Bは、フジウム幹部として女性解放を支持し共産党活動にも積極的に関わる一方、女性が夫の言うことを聞き、家事・育児を担うことを当然視していた。この背景には、1960、70年代は女性の過重負担問題が顕在化し、家事と育児の社会サービス化が行われたがその成果は不十分だったため、Bも家庭と仕事の両者を担わざるを得なかったことがある。また、母親英雄制度や継続的な女性の就労促進により「働く母親」がソ連社会におけるあるべき女性像として提示されたことは、女性が家庭と仕事を担う状況の正当化につながったと考えられる。

Bがフジウムで働きながら共産党活動を行い、家事・育児をこなしたことは、ソヴィエト的「働く母親」の体現であると同時に、家庭における伝統的なジェンダー役割を遂行することでもあった。ゆえに、Bは家事・育児と家外での労働をこなしたことを誇りとし、他の女性もそうすべきだと考える。Bの事例からは、河本[2010]が指摘した、ソヴィエト政権が「家事と育児は女性の役割」という伝統的ジェンダー役割の温存に積極的に介入し、「働

⁽¹⁵⁾ Aの聞き取り調査にはEとその姪Yuも同席した。

く母親」像を生み出していたこと、それを女性が受容していたことがうかがえる。この介入は、アブー＝ルゴド[2009]が指摘するように、伝統的な女性の役割を社会主義の文脈に合わせ再定義し、イデオロギーとして強化するものだった。

従って、女性が家事・育児を担うという点において、女性に対する近代化事業は家父長制におけるあるべき女性像と相反するものではなかった。これは、1920年代に目指された「女性解放」は、1960年代以降は不十分に実施されていたことを示す。

伝統的なジェンダー役割が社会主義の文脈の中で再定義されたことは、ソヴィエト政権が関与しないところで、Gのような家庭にいながらソ連社会と経済に貢献する労働者になるという働き方を生み出した。上述したように、自家手工業者制度は家事・育児中の女性を対象とした制度ではない。だが、フジウムではこの制度の「読み替え」が生じ、家事・育児に忙しい女性のための制度として機能していた。

陶器生産では、社会主義的生産体制への改編後も親方を長とする工房単位の生産活動が行われたために、徒弟制度やイスラームの聖者崇敬が維持された[菊田 2005; 2013]。フジウムにおける自家手工業者制度の普及は、Bの事例から見出されたような、社会主義の文脈に合わせたジェンダー役割の再定義とは異なる形で、家父長制家族における女性の役割を温存した。これは、女性は家事・育児を担うべきという認識にとどまらず、EやAの語りから察知される、家父長制家族における女性のあるべき女性像の温存につながったと推測できる。

家父長制家族における女性のライフコースとは、女性は嫁いだ当初は夫、舅、姑に仕えなければならぬが、男児を産み育てることで地位を向上させ、最終的には家族や親族内で年長女性として非公式ながら重要な地位に就くというものである[Massell 1974: 395–396]。この認識が温存されたことは、当然ながらそれに沿えない人々を生み出した。Eの事例からは、労働を通して女性のオルタナティブな生き方が出現したことが明らかであった。

結婚生活が破綻したEは、嫁としての役割を果たせず、家族のなかでの地位を向上させることが困難な状況にあった。しかし、Eは大学卒業の学歴を持ち工場長も務めた。またAも男児を産むことが叶わなかったが、フジウムで長年働き優秀な労働者として評価された。彼女たちがフジウムの労働を通して得た功績は、家族や親族関係における不利な立場を相殺し、EやAが「仕事に生きる」ことを可能にしたのである。

フジウムは、前近代的諸慣習から女性を解放するという設立当初の理念とは裏腹に、家父長制家族における女性の役割やあるべき女性像の維持と強化を促した。しかし、その一方で、報酬、名誉、社会保障を伴うフジウムの労働は、伝統に沿えない女性たちに「仕事に生きがいを見出す」という新たな生き方を可能にした。EやAにとって社会主義的近代化とは、家父長制家族におけるあるべき女性の生き方に沿えないことを自覚しながら、それとは異なる生き方を通してアイデンティティを確立するという経験であった。

V. おわりに：女性の社会主義的近代化とは何か

ソ連期ウズベキスタンにおける女性に対する社会主義的近代化は、女性解放思想、産業化、伝統的なジェンダー役割が交錯する中で進んだ。それは、菊田 [2005; 2013] が明らかにしたように、1920年代にソヴィエト政権が失くそうとした「前近代的」価値観や慣習に支えられながら進められた。「女性は家事と育児をする」という家庭における伝統的な女性の役割にソ連国家への貢献という公的な意義を付与し、温存し、家庭と女性のつながりを強化するものだった。一方で、給料や福利厚生を享受でき、社会的地位を得られるフジムの労働は、家父長制家族におけるあるべき女性像を体現できない女性に、「労働を通して自らの役割を確立する」というオルタナティブな生き方を可能とした。ソ連期ウズベキスタンにおける女性の社会主義的近代化は、女性と家庭のつながりを再定義し強化する一方で、伝統的な理想像に沿えない女性の自己実現及び自己肯定を可能とする取り組みであった。

参考文献

公文書館資料

QVShTDA: Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi

44-fond “Shahrisabz tumani ‘Hujum’ badiiy buyumlar fabrikasi”

1-ro‘yxat, 105-yig‘ma jild “Plany, plany meropriyatii nadomnogo truda i drugie”

1-ro‘yxat, 118-yig‘ma jild “Akty proverki deyatel'nosti fabriki predstavitel'em ministerstvom mestnoi promyshlennosti UzSSR, akty proverki k kollektivnogo o dogovora za 1972 god”

1-ro‘yxat, 122-yig‘ma jild “Akty proverki deyatel'nosti predstavitel'em ministerstvom mestnoi promyshlennosti i gorraispolkomami za 1973 goda”

1-ro‘yxat, 153-yig‘ma jild “Perspektivnyi svodnyi plan fabriki na 1977-1980 gody”

1-ro‘yxat, 167-yig‘ma jild “Godovoi bukhgalterskii otchyot fabriki za 1978 god”

1-ro‘yxat, 178-yig‘ma jild “Trudovoi raport kollektiva fabriki: ministerstvo mestnoi Shakhrisabzskovo raiona”

1-ro‘yxat, 189-yig‘ma jild “Materialy po provedeniyu i provedeniyu itogov cots. Sorevnovaniyu fabriki za 1980 g.”

1-ro‘yxat, 211-yig‘ma jild “1968 yil uchun yillik hisobchilik hisoboti”

1-ro‘yxat, 235-yig‘ma jild “Shahrisabz ‘Hujum’ badiiy fabrikasining 50 yilligiga bag‘ishlagan taitalari yig‘ilishda korxonasi yarim asrlik yo‘li tog‘risida fabrika direktorining ma‘ruzasi”

定期刊行物

Qashqadaryo haqiqati. 1972. “Yuksalish odimlari,” (avgust 23).

英語文献

- Aminova, Rakhima Khodievna. 1977. *The October Revolution and Women's Liberation in Uzbekistan*, Moscow: “Nauka” Publishing House Central Department of Oriental Literature.
- Buckley, Mary. 1989. *Women and Ideology in the Soviet Union*, Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf.
- Constantine, Elizabeth A. 2001. *Public Discourse and Private Lives: Uzbek Women under Soviet Rule, 1917-1991*, Ann Arbor: UMI Dissertation Services.
- Edgar, Adrienne. 2006. “Bolshevism, Patriarchy, and the Nation: The Soviet “Emancipation” of Muslim Women in Pan-Islamic Perspective,” *Slavic Review* 65(2), pp. 252-272.
- Kamp, Marianne. 2006. *The New Woman in Uzbekistan: Islam, Modernity, and Unveiling Under Communism*, Seattle: University of Washington Press.
- Lubin, Nancy. 1981. “Women in Soviet Central Asia: Progress and Contradictions,” *Soviet Studies* 33(2), pp. 182-203.
- Massell, Gregory. J. 1974. *The Surrogate Proletariat: Moslem Women and Revolutionary Strategies in Soviet Central Asia, 1919-1929*, Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Northrop, Douglas. 2004. *Veiled Empire: Gender and Power in Stalinist Central Asia*, Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.
- Tokhtakhodjaeva, Marfua. 1995. *Between the Slogans of Communism and the Laws of Islam*, Lahore: Shirkat Gah Women's Resource Centre.
- Tolmacheva, Marina. A. 1993. “The Muslim Women in Soviet Central Asia,” *Central Asian Survey* 12(4), pp. 531-548.

ロシア語文献

- Zaxarov, C. M, X. Xikmatov. 1979. *Shakhrisabz*, Tashkent: Uzbekistan.
- Bikzhanova, M. A., K. L. Zadykhina, O. A. Sukhareva. 1962. “Obshchestvennyi i semeinyi byt,” *Narody srednei azii i Kazakhstana*. Pod red. S. P. Tolstova i dr. Moskva: Akademiya Nauk SSSR. S. 314-331.
- Ubaidullaeva, R. A. 1969. *Zhenskii trud v sel'skom khozyaistve Uzbekistana*, Tashkent: Izdatel'stvo “FAN” Uzbekskoi SSR.
- Chepelevetskaya, G. L. 1961. *Suzani Uzbekistana*, Tashkent: Gosudarstvennoe izdatel'stvo khudozhestvennoi literatury UzSSR.

ウズベク語文献

Azizxo‘jaev, A. va boshqalarga xokazo. 2005. “Shahrisabz,” *O‘zbekiston milliy entsiklopediyasi, 10-jild*. Toshkent: “O‘zbekiston milliy entsiklopediyasi” Davlat ilmiy nashriyoti, B. 26-27.

日本語文献

アブー＝ルゴド、ライラ 2009「フェミニスト的望みとポストコロニアル的状况」ライラ・アブー＝ルゴド編著、後藤絵美他訳『女性をつくりかえるという思想：中東におけるフェミニズムと近代性』東京：明石書店、14-72頁。

五十嵐徳子 2009「旧ソ連の共和国で大量の専業主婦は誕生するのか」『比較経済研究』46(1)、17-34頁。

奥田央 1977「ソビエトの工業化と農民的小工業(1)：クスターリ工業史の決定的段階 1928-1930」『社会科学研究』29(2)、1-90頁。

帯谷知可 2016「中央アジアのムスリム定住民女性とイスラーム・ヴェールに関する帝政ロシアの植民地主義的言説」『西南アジア研究』84、40-54頁。

河本和子 2010「フルシチョフ期のソ連における公私の区分とジェンダー」『国際政治』161、68-81頁。

菊田悠 2005「ソ連期ウズベキスタンにおける陶業の変遷と近代化の点描」『国立民族学博物館研究報告』30(2)、231-278頁。

——— 2013『ウズベキスタンの聖者崇敬：陶器の町とポスト・ソヴィエト時代のイスラーム』東京：風響社。

須田将 2011『スターリン期ウズベキスタンのジェンダー：女性の覆いと差異化の政治』東京：風響社。

宗野ふもと 2017「シャフリサブズ『フジウム』芸術製品工場について：ソ連期ウズベキスタンにおける手工業の集団化と女性の労働」帯谷知可編『社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族1』CIRAS Discussion Paper No. 69、12-22頁。

吉田世津子 2004『中央アジア農村の親族ネットワーク：クルグズスタン・経済移行の人類学』東京：風響社。

(筑波大学人文社会系)

慈悲深く慈愛あまねき神の御名において⁽¹⁾

ウズベク語におけるクルアーンの解釈と翻訳について

アブドゥルマジード・ハサンハン・ヤフヤー*

編訳・注釈: 木村 暁**、和崎 聖日***

序文: 和崎 聖日***

編訳者序文

本稿は、2019年2月時点においてタシュケント市内のアフマドジャー・カーリー集会モスクのイマーム・ハティーフ(説教師)補佐を務める、クルアーン学者ならびにハディース学者のハサンハン・ヤフヤー・アブドゥルマジードによるウズベク語の論攷(2016年5月29日脱稿)である。このモスクはウズベキスタン・ムスリム宗務局の管轄下の数あるモスクの1つであり、したがってこのイマーム・ハティーフ補佐職も宗務局の任命によっている。彼は、1981年1月12日にフェルガナ盆地のアンディジャンに生まれ、13歳でクルアーンのスーラ(神の徴たる章句)⁽²⁾をすべて暗唱したカーリー⁽³⁾である。ハーフィズ⁽⁴⁾としても名高い⁽⁵⁾。ハサンハン・カーリーの家系は、少なくとも11世代、すなわち約200～250年間にわたって余多のイスラーム学者が輩出した、ア

(1) イスラーム教徒の著述における伝統的な形式に則って、著者によりこの文言が題目の前に書かれている。なお、本稿における注釈はすべて編訳者による補足である。本文中における編訳者による補足は亀甲括弧内に記す。

(2) 本稿では、原文での文脈に応じて、「スーラ」ではなく「章」と訳し分けた箇所もある。

(3) 以下、本稿では「ハサンハン・カーリー」と記す。なお、カーリーはクルアーンの暗唱者への尊称である。原義は「クルアーンを誦み聞かす者」である。現代ウズベキスタンでは、宗務局に属するそのような資質を認められた宗教学者の公的な肩書としても用いられる。

(4) 原義は「保つ者」である。転じて、クルアーンの暗唱者を指す。この意味でのハーフィズはカーリーと同義である。ただし、とくに11世紀以降の中央アジアでハーフィズは、古典叙情詩や叙事詩を暗記し、それに旋律をつけて謳うすぐれた朗誦者を指す場合もある。またこの意味では、旋律をつけてクルアーンを美しく朗誦する者にもあてはまる。そのほか、ハディース学の分野で傑出した知識をもつ者をハーフィズと呼ぶこともある。

(5) ハーフィズとして著者ハサンハン・カーリーは、2005年にサウジアラビアのマッカで開催された第27回アブドゥルアズィーズ国王杯国際聖なるクルアーン大会に出場した。また2009年には、第19回ウズベキスタン・クルアーン大会の共和国大会で優勝した。今日では、ウズベキスタン・ムスリム宗務局付属ウズベキスタン・クルアーン大会組織委員会の委員長代理も務めている。

ンディジャンの宗教的名家である。たとえば、父ヤフヤーハンはブハラ市のミーリ・アラブ・マドラサでイスラーム諸学を学んだカーリーであり、また父方の曾祖父アブドゥルマジードはロシア帝国末期のアンディジャンで最も著名なカーディー（イスラーム法の裁判官）であった。

クルアーン学の最初の師であった父は1989年、彼が8歳の時に急逝した。その後、ハサンハン・カーリーは、当時のアンディジャンにおいて最も名高いクルアーン学者であったバドリッディーン・カーリー・カマリッディーン・オグリ(1946～2014年)⁽⁶⁾に師事し、フジュラ(政府未公認の私塾の総称)でクルアーン学を学んだ。この第2の師から、クルアーンの正統7読誦法の1つであるイマーム・アースィム・イブン・アブー・ナジュド・ターフィー(746年没)⁽⁷⁾による読誦法の2つの流派(ハフスとシュウバ)の教導の免状を得た。またイブン・ジャザリー⁽⁸⁾の『タジュウィード⁽⁹⁾序説』の教導の免状も別の師から得ている。ハサンハン・カーリーの筆になるクルアーン読誦学の書籍もいくつか刊行されている。そのほか、ハサンハン・カーリーは双子の弟フサインハン・カーリーとともにクルアーンを読誦し、その音源を収録したCD『聖なるクルアーンの読誦』(タシュケント: Semurg' media, 2011(et al.)年)を発売したほか、ソ連時代の著名なカーリーたちによるクルアーン読誦の音源を収録したCDシリーズ『不滅の響き』(タシュケント: Semurg' media, 2017(et al.)年)も企画した。

クルアーン学以外のイスラーム諸学に関して、ハサンハン・カーリーは政府公認のイスラーム教育機関イマーム・ブハーリー名称タシュケント・イスラーム高等学院で学び、2008年に同学院を修了した。その一方、今日のウズベキスタンで最も権威のあるイスラーム学者と評されるアンディジャン出身の故ムハンマド＝サーディク・ムハンマ

(6) バドリッディーン・カーリー・カマリッディーン・オグリの師は、第2次世界大戦後のウズベキスタンで最も傑出したカーリーとしてその名をはせたアンディジャン出身のムハンマド・ムビーヌ・カーリー・アミンジャン・オグリ(1914～76年)である。ハサンハン・カーリーの妻は、ムハンマド・ムビーヌ・カーリーの孫娘にあたる。

(7) クルアーンの読誦学では、正統7読誦法のそれぞれの創始者あるいは名祖はイマームと呼ばれる。イマーム・アースィムは、クルアーンの読誦法をズィッル・イブン・フバイシュとアブドゥッラー・イブン・マスウード、アブドゥッラー・イブン・ハビーブ・スィルミーから学んだ。最後の人物はクルアーンの読誦法を第4代カリフのアリーから学び、アリーはそれを預言者ムハンマドから学んだという(“Qiroatlar va qorilar,” URL: <http://islom.uz/maqola/654>, 閲覧日: 2019年1月5日)。

(8) ダマスカス出身のハディース学者・シャーフィイー派法学者(1350～1429年)。本名はムハンマド・イブン・ムハンマド、尊称はシャムスッディーン。クルアーン読誦の音声論にとりわけ精通していた。ダマスカスのシャイフ・アルクッラー(カーリーたちの長)も務めたことが知られる。

(9) クルアーンを読誦するための音声の心得。学芸としてのクルアーン読誦法の基礎分野をなす。

ド＝ユースフ(1952～2015年)⁽¹⁰⁾にも師事し、ハディース学を中心にイスラーム諸学を学んだ。ハサンハン・カーリーは、彼からムハンマド・イブン・イスマイル・ブハーリー(810～70年)の『真正集』とムスリム・イブン・ハッジャージュ(817/21～875年)の『真正集』、イマーム・ナワウィー⁽¹¹⁾の『アルバイーン』(40のハディース撰集)の教導の免状を得ている。2012年から刊行されはじめた『ブハーリーの真正集』(全8巻、「黄金の系譜」叢書、タシュケント刊)の翻訳者兼編集者の1人であるほか、著作として、著名な文人アリーシェール・ナヴァーイー(1441～1501年)によって韻文化された「40のハディース(アルバイーン)」に対する注釈書である『ナヴァーイーより旋律見いださまほしければ』(フサインハン・カーリーと共著、2014年タシュケント刊)がある。そのほか、ハサン・イブン・ジャアファル・バルザンジー⁽¹²⁾の『輝ける預言者の生誕日における宝石の首飾り』と題された著作のウズベク語訳注『マウリド』[Barzanjiy 2015]も著している。

(10) 以下、ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフの略歴について、おもにマーサ・オルコットの研究に依拠しながら紹介する[Olcott 2012]。彼は、沈黙のズィクル(神の想起)をおこなうナクシュバンディー・ムジャッディディー教団のイシャーン(導師)の血統に連なる宗教的名家の出である。彼の父ムハンマド＝ユースフ・カーリーは、中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局の初代ムフティー(局長)、イシャーン・ババハンによって、1950年にミーリ・アラブ・マドラサにクルアーン学の講師として招聘され、またバハーウッディーン・ナクシュバンド廟の管理も任されていた。ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフ自身は、幼少期に父から教育を受け、さらに本稿中に述べられるとおりの学歴と職歴を重ねたのち、1989年3月、ムスリム宗務局の第4代ムフティーに選出され、同年中にソヴィエト社会主義人民共和国最高会議の議員にも選出された。海外のムスリム使節団のソ連来訪時には、ソ連共産党書記長ゴルバチョフの個人通訳も務めた。しかし、汎イスラーム主義を提唱した19世紀のアフガーニー(1838/39～97年)を支持するアンディジャン出身のアブドゥヴァリー・カーリーらのイスラーム主義諸集団が国内で勢力を伸ばし、この勢力をムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフが抑えられなくなったことを理由に、ウズベキスタン当局は彼を逮捕する準備をはじめた。結果的に、彼はムスリム宗務局の資金横領の嫌疑をかけられ、1993年4月にムフティー職から公式に解任された。しかし、彼の妻方の家族、すなわちなマンガンの宗教的名家であるサッティエフ家の助けによって逮捕を免れ、国外追放処分となった。その後、彼はシリアとリビアの知人の勧めでリビアに移住し、そこを拠点としながらアラブ世界を駆け巡ることになる。彼は、ちょうどこの時期に出会ったと推測されるシリアのハナフィー派法学者ムハンマド・サイイド・ラマダーン・ブーティー(1929～2013年)を精神的な師と仰ぐようになる。こうして彼は、イスラームを政治的な運動や党派に分割すること自体がイスラームの知と団結の力を解体させ、ムスリム諸国の現実的な統合と復興を妨げているとする立場をとるようになる。そののち、ウズベキスタンの法務省で高位に就いていた義理の姉の手助けによって、彼は政府の反テロ闘争を支援するという名目のもと、初代大統領イスラーム・カーリーモフから国内復帰の許可を得て、1999年にウズベキスタンに帰国した。それから2015年に死去するまで、彼は在野のイスラーム学者として活躍した。なお、生没年の表記についてこれ以降、ヒジュラ暦から起算して西暦の2年にまたがる場合、あるいは複数の可能性のうち判断のつかない場合には「/」で記す。

(11) ダマスカスのナワー出身のハディース学者ならびにシャーフィイー派法学者(1233～77年)。

(12) マディーナ出身のクルアーン学者、シャーフィイー派法学者ならびにスーフィー(1714～64年)。フサイン・イブン・アリー(ハサン)の血統に連なる預言者ムハンマドの子孫の1人である。彼のニスバ(由来名)は、イラク北部の町シャフラズールに属する村の1つであったバルザンジャに由来している[Barzanjiy 2015: 45–47, 49]。

こうした経歴と業績をもつハサンハン・カーリーがなぜ「ウズベク語におけるクルアーンの解釈と翻訳について」と題した論攷を書いたのか、その動機について本人の弁を借りて簡単に説明しておこう。端的に言えば、「クルアーン(とハディース)の翻訳は許容されない」という立場をとる人々が昔も、そして今も中央アジアのムスリム社会に一定数存在するからである。彼らによる異議申し立ての中心となる主張は、クルアーンの真正性と奇跡性は他言語への翻訳によって破綻するという点にあるとされる。こうした異議申し立ては、彼の師の1人であるムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフにも向けられていたという。その彼が2015年に逝去したのち、同郷出身の師の遺志を継ぐ弟子の1人であり、またクルアーン学者でもあるハサンハン・カーリーは、クルアーンを翻訳することの宗教・歴史的な正当性を明示するために、本稿を著したと言えるだろう。その視線はトルコ人東洋学者アブデュルカーディル・エルドアンらの学術的研究にも向けられている。

ソヴィエト体制下の中央アジアでは、スターリンの大粛清を中心に無数のイスラーム学者の命が絶たれ、ムスリム社会内におけるクルアーンの知識は必然的に弱まっていった。しかし、ゴルバチョフのペレストロイカ後期にイスラームが公式に復活していき、みずからの民族文化たるイスラームに回帰しようとする人々の思いは大きなうねりとなって高まっていった。このことを背景に、ウズベキスタンでは1991年からムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフらイスラーム学者たちがクルアーンの翻訳・解釈書を上梓しはじめた。世俗主義を大原則とするウズベキスタン政府もまた、新たな国家建設の試みのなか、国内のムスリム社会の分裂を防ぎ、その統合を保持するため、国民の大多数を占めるムスリムから支持されるイスラーム学者によるクルアーンの翻訳・解釈書を必要としていたにちがいない。これら3者、すなわち宗教学者、民衆、政府をめぐる状況の基本的な構図は今も変わらない。

本稿は、まさにこうした時代の要請に応えるべく、ムスリム大衆に向けてクルアーンの翻訳と解釈が宗教的に正当な知的営為であることを説きつつ、その歴史的展開が概説される内容となったのである⁽¹³⁾。またハサンハン・カーリーの現在のウズベキスタンでの立ち位置にかんがみれば、本稿をとおして、政府公認のイスラーム学者のあいだで一定程度共有されているクルアーンの知をめぐる見解を知ることもしる

⁽¹³⁾ 本稿のウズベク語原文は、ウェブサイト“QURAN.UZ”にほぼそのまま掲載されており、参照可能である(URL: <http://quran.uz/tafsir/tafsirlar/tafsir-hilol/1891-ozbek-tilidagi-quron-tafsirlari-va-tarjimalari-haqida.html>, 閲覧日: 2019年1月25日)。ただし、編訳者が日本語への訳出にあたって依拠したテキストは、これに著者自身が若干の修正を加えたものであることをことわっておく。なお、著者から本稿の日本語訳の刊行について許可を得ていることもここでことわっておきたい。

う。さらにそこからは、現地のムスリム社会内部においてクルアーンをめぐる見解が
 一様ではない実態もうかがい知ることができよう。そもそも著者が、形式的にせよ、
 読者をウズベク・ムスリムに絞るかたちでこの問題を論じていること自体も興味深い。
 このことは祖国愛と宗教信仰の調和を示すとも言えるかもしれない。また、ウズベク・
 ムスリムがウズベク語の解釈書や翻訳書を通じてクルアーンの意味を知り、信仰実践
 の糧とすることは正当な行為である、との著者の説示が、極端な原理主義や過激思想
 の抑止・根絶という、社会平和実現のための喫緊の課題によって動機づけられている
 ことも読みとれるだろう。こうした論点は、これまでの日本の中央アジア研究であま
 り注目されてこなかったものである。それゆえ、本稿はこれまでの研究史の間隙を埋め、
 その蓄積に貢献するものであると考える。これが編訳者の翻訳意図である。

最後に、この「編訳者序文」も含め本稿では、中央アジア・イスラーム史上の人名や
 書名がたびたび言及されているが、それらについて注記するにあたっては、おもに『岩
 波イスラーム辞典』[大塚ほか 2002]、『中央ユーラシアを知る事典』[小松ほか 2005]、『イ
 スラーム事典』[Mansur 2017]等を参照したことをことわっておく⁽¹⁴⁾。なお、以下の本
 文において、著者ハサンハン・カーリーがたんに解釈書ないし翻訳書と言っているのは、
 クルアーンの解釈書と翻訳書である。

はじめに

御自身の最後の啓典を人類のために不滅の精神的な鉱石として啓示したわれらが主、至高
 なるアッラーに賞賛あれ！ この神からの賜物を無償で人類と分かち合った、愛しきわれら
 が預言者ムハンマド・ムスタファーに祝福あれ！⁽¹⁵⁾

至高なるアッラーは御自身の最後の完成された宗教であるイスラームを全人類のための宗

⁽¹⁴⁾ 人名や書名について、本稿で取り上げられるもののうち、注釈をつけていない箇所もあるが、それらについ
 ては読者に委ねたい。また書名の表記について、二重鉤括弧内には原則的に邦訳だけを入れた。ただし、書
 名としてカタカナ転写が広く知られているものや訳しきれないものに関してはカタカナで表記することにし
 た。なお、ウズベク語原文中にみられる明らかな誤植ないし誤記は、これをことわりなく訂正したうえで翻
 訳した箇所もある。

⁽¹⁵⁾ スンナ派における伝統的な形式に則って、神と預言者ムハンマドを讃美する文言からはじまる。シーア派の
 場合、こうした文言に4代目カリフのアリーの名も入るのが一般的である。

教としてもたらし、その最高位の源である聖なるクルアーンをもすべての民族にとって共通の行動規範として定めたまうた。以前の啓典がとある種族と民族にもたらされた一方、聖なるクルアーンの呼びかけは全人類に向けられた。それゆえ、すべての民族と部族にとってクルアーンの意味を学び、それを実践することが必要となった。しかし、クルアーンはアラビア語でのみ啓示されたのであった。この言語で話すことのできない諸民族がクルアーンを理解するためには、みずからアラビア語を学ぶか、クルアーンのアーヤ〔神の徴たるスーラすなわち章句を構成する各節〕⁽¹⁶⁾を自分たちの言語に翻訳する必要が生じた。老いも若きも、男も女も、労働者も上役も、皆がおなじようにアラビア語を学び、それを通じてクルアーンの意味を習得することは困難であり、むしろ不可能であるだろうことは、証拠立てる必要のない真実である。

とりわけアラブ人ではない諸民族にダアワ〔教宣〕し、また彼らのうちの新参のムスリムに宗教を教えるには、クルアーンの意味を翻訳する以外に手段はない。だからこそ、聖なるクルアーンは、地上にはじめて啓示された頃から、他言語に翻訳されるようになった。直接的には、クルアーンはわれらの預言者ムハンマド——彼に祝福と平安あれ——の御教導と御推奨によって、ダアワのなかでその一部のアーヤがアラビア語から他の言語に翻訳されるに至った。かの御方は、人々にイスラームの教えを伝えるなかで、その必要性が生じた場合、クルアーンの一部のアーヤを他の言語に翻訳させ、またその許しを乞う者たちに許可もお与えになった。

偉大なるわれらが同胞ムハンマド・イブン・イスマーイール・ブハーリー——彼に神の慈悲あれ——は、『真正集』の末尾付近のある章のなかで、「至高なるアッラーの『もしお前たちの言葉が真実であるのなら、律法をもってきて朗読してごらん』（イムラーン家章第93節）というお言葉にしたがって、律法とそれ以外のアッラーの啓典をアラビア語と他の言語で解釈することが許容されることについて」という表題を立てたうえで、以下のハディース〔預言者ムハンマドの言行録〕を引用する⁽¹⁷⁾。

イブン・アッバース——彼に神の御満悦あれ——がアブー・スフヤーン・イブン・ハルブから伝えるところによれば、ヒラクル⁽¹⁸⁾が通訳を呼び、預言者——彼に祝福と平安あれ——の手紙をもってこさせた。彼はそれを読んだ。「慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において。アッラーの僕にして使徒たるムハンマドよりヒラクル閣下へ。「聖典の民⁽¹⁹⁾

⁽¹⁶⁾ 本稿では、原文での文脈に応じて、「アーヤ」ではなく「節」と訳し分けた箇所もある。

⁽¹⁷⁾ クルアーンは原則的に井筒簡訳を参照した。ただし、編訳者の判断によって、部分的に原文に近いかたちでクルアーンを翻訳している箇所があることもことわっておきたい。

⁽¹⁸⁾ 東ローマ皇帝のヘラクレイオス（在位 610～41年）を指している。

⁽¹⁹⁾ ユダヤ教徒とキリスト教徒を指している。

よ！ 私たちとあなた方とのあいだに何の差別もないお言葉のところで……」（イムラーン家章第64節）。

この伝承から明かなように、アッラーの使徒——彼に祝福と平安あれ——が異教徒をイスラームへ招喚しながら差し向けた手紙にはクルアーンのアーヤもあり、それを届けた使節、または手紙を受け取った側の通訳も翻訳したのであり、アッラーの使徒——彼に祝福と平安あれ——はこれを否定せず、むしろ承認なされた。イマーム〔導師〕・ブハーリーは上記の章でまた、アッラーの使徒——彼に祝福と平安あれ——がユダヤ教徒とのあいだで仲裁人であった頃、彼のために律法の一部の章句が翻訳されたことも表題の言葉のなかに証拠として引用しているのである。

イマーム・サラフスィー⁽²⁰⁾は、『マブスート』と題された多巻からなる有名な自著の「礼拝の書」章（〔アラビア語刊本〕第1巻37頁）において、以下の旨を記している。「伝承によれば、ペルシア人たちはサルマーン・ファーリスィー⁽²¹⁾——彼に神の御満悦あれ——に手紙を書き、自分たちのために開扉章をペルシア語で書いてくれるよう依頼した……」。タージュッシャリーア⁽²²⁾が著した、『ヒダーヤ』に対する注釈書『ニハーヤ』（〔アラビア語刊本〕第1巻86頁）は、このことについてより詳しい情報を与える。

〔ペルシア人は〕サルマーン・ファーリスィー——彼に神の御満悦あれ——に開扉章をペルシア語で書いてもらうよう頼み、手紙を書いた。そのとき、彼は「慈悲深く慈愛あまねき神の御名において」〔というアラビア語の文言〕に対して「バ・ナーミ……」⁽²³⁾と〔ペルシア語で〕書き、預言者——彼に祝福と平安あれ——にそれを見せたのち、彼らに送った。

つまり、偉大な教友〔サルマーン・ファーリスィー〕はアラビア語を知らない自身の同族に聖なるクルアーンの意味を翻訳してやり、このことをアッラーの使徒——彼に祝福と平安あれ——は承認なされたようである。

⁽²⁰⁾ ホラーサーン地方で活躍したハナフィー派法学者（?～1090/97年）。

⁽²¹⁾ イランのイスファハーン近郊出身の活動家・学者（?～655/56年）。ムハンマドの教友の1人であった。タサウウフ（スーフィズム）やシーア派運動の創始者の1人とみなされている。

⁽²²⁾ 「タージュッシャリーア」（「聖法の王冠」の意）はブハラのマフブービー家のハナフィー派法学者、シャムスッディーン・マフムード（1238年没）の尊称。12世紀から14世紀前半にかけてのブハラはブルハーン家、マフブービー家という名家の相次ぐ実効支配下にあったが、この時期同市では両家の成員らによってハナフィー派法学書の編纂事業が旺盛に展開され、そこで創出された法学書（主として『ヒダーヤ』の注釈や提要の類）は中央アジア域外のハナフィー派圏にも広く普及した〔McChesney 1998: 37–47〕。

⁽²³⁾ アラビア語の「慈悲深く慈愛あまねき神の御名において」という唱句（バスマラ）のペルシア語における対訳、「ba-nām-i khudāy-i bakhshanda-i mihrbān」（構成語句にはいくつかのヴァリエーションがありうる）を指している。

われわれの故郷がイスラームの光によって照らされた最初期からすでに、われらの民族にクルアーンの内容は翻訳されていた。イスラームの征服者たちがわれらの地にはペルシアのくに通って入ってきたため、彼らのなかにはペルシア人やペルシア語を知っている者が多かった。われわれの先祖は昔からペルシア人と隣人として暮らし、この地域が長きにわたりペルシア国家の統治のもとにあったことから、この地の民族はペルシア語に通じるようになった。これらの要因ゆえに、クタイバ・イブン・ムスリム⁽²⁴⁾——彼に神の慈悲あれ——に率いられてきた征服者たちは、われらの郷土において最初にムスリムになった住民のためにと、クルアーンのスーラをペルシア語に訳してやった。アラビア文字を習得するまでは、その内容の翻訳を読誦することさえも許可された。このことは、クーファのファキーフ〔法学者〕たちのファトワー〔法学者がイスラーム法に則して出す見解〕にもとづいていた。

しばらくののち、聖なるクルアーンのテュルク語への翻訳も開始された。テュルク語学者にして言語学博士の故カザクバイ・マフムードフが強調するところによれば、クルアーンのテュルク諸語による解釈はヒジュラ暦3～4世紀頃、あるいは西暦で言えば10世紀頃にはじまった。クルアーンは時代を通じて、多様な著述家によりさまざまな水準でテュルク諸語、とりわけ古テュルク語⁽²⁵⁾で解釈されてきた。それらの多くはおもに〔ウズベキスタン〕国外の図書館で保管されている。いくつかの資料で強調されるところによれば、今日世界の諸々の写本所蔵機関では100に近いテュルク語による解釈書と翻訳書の写本が存在する。

前世紀のはじめ頃に生き、著述活動をおこなったわれらがタフスィール〔クルアーン解釈学〕学者たちのうち、ムハンマド・ザリーフ・カーシュガリーは、みずからの解釈書のなかで、テュルク諸語で書かれた解釈書を28ほど数えあげている。その解釈書のうちの最古の諸写本に関して、トルコ人学者アブデュルカーディル・エルドアンも数多くの学術的考究をおこなった。アラビア文字で書かれた最古のテュルク語の解釈書としてアブー・アリー・ジュッバーイー・フーズィスターニー（西暦916年没）の著作が言及されているが、この解釈書のいかなる写本もまだ見つかっていない。また初期のテュルク語の解釈書のうち、いくつかの断片も保管されているが、それらは取りあげるにはおよばない。われらの祖国においてアラビア語で記された解釈書はひじょうに多い。そのうえ、たがいに同系のテュルク諸語、すなわちトルコ語やタタール語、カザフ語、クルグズ語の解釈書と翻訳書もおびただしい。しかし、ここでわれわれは、テュルク・ウズベク語で今日に至るまで著されてきた解釈書と翻訳書のうち、われわれにとって周知のものについてのみ語ることにする。

(24) ウマイヤ朝の総督として中央アジア(マーワラーアンナフル)征服を指揮し、のちにホラーサーン総督となった人物(669～715年)。

(25) 著者ハサンハン・カーリーが古テュルク語と言っているのは、アラビア文字表記のテュルク語のことである。

〔通称〕『中央アジア・テュルク語解釈書』〔*O'rta Osiyo turkiy tafsiri*〕

現段階においてわれわれにとって周知の最古のテュルク語の解釈書は、勤儉力行の学者カザクバイ・マフムードフによって刊行の手はずを整えられた『中央アジア・テュルク語解釈書』である⁽²⁶⁾。その著者は不明である。いくつかの情報によれば、それはイマーム・ザマフシャリー⁽²⁷⁾の弟子の1人の筆によると推測されている。写本の冒頭は欠損し、翻訳と解釈は洞窟章からはじまり、クルアーンの後までつづいている。この貴重な解釈書は、クルアーンそれ自体を学ぶためだけでなく、テュルク語で話す諸民族の言語史を学ぶうえでも重要な意義をもつ。この解釈書について同研究者が導入部で記している情報のうち、われわれにとって今必要となるいくつかの箇所から引用して示す⁽²⁸⁾。

ロシア〔科学アカデミー〕東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支部で保管されている第197番『テュルク語解釈書』⁽²⁹⁾をゼキ・ヴェリディ・トガン〔ヴァリドフ〕が1914年にカルシで発見し、ブハラ・アミールの図書館にもっていき、寄贈した⁽³⁰⁾。この解釈書は言語的特徴の観点から、10～14世紀頃に書かれた諸文献と近い関係にある。『テュルク語解釈書』は分量の観点から、相当に大きめの文献の1つとみなされる。この著作は294頁〔すなわち147葉〕から構成され、判型は中程度のサイズをもつ。同書では79章分の解釈がなされている。その最初の部分では、全頁に10行ずつ〔クルアーンの〕スーラが書かれている。引用されたスーラの上部に小ぶりのナスターリーク体でテュルク語による注解がなされている。スーラの一部ではテュルク語による注解とともにペルシア語による注釈もなされている。

この著作では、最初の100頁に書かれているスーラのすべてのアラビア語の単語の上

(26) これは『テュルク語解釈書 (12～13世紀)』(2000年タシュケント刊)[Mahmudov 2000]を指すと考えられる。

(27) ホラズム出身のタフスィール学者ならびにアラビア語文法学者(1075～1144年)。クルアーンの解釈書『啓示の真理を開示するもの』において言語学的方法によるクルアーン解釈の道をひらくなど、すぐれた業績を数多く残した。

(28) ここでの引用元は、基本的にマフムードフ編前掲書の導入部であるが、原文が要約されたかたちとなっている。

(29) このテュルク語写本は、発見当初からロシア・ソ連内外の東洋学者のあいだで注目を集め、やがてロシア語で『中央アジア〔出自〕の解釈書』(*Sredneaziatskii tafsir (tefsir)*)と通称されるようになった。ウズベク語による『中央アジア・テュルク語解釈書』という通称もおそらくこれによる。この写本については早くから何人かのテュルク学者が言語学的研究に取り組んだが、その語彙的・音声的・文法的特徴に注目したボロフコフの詳細な研究[Borovkov 1958, 1963]は、本稿では言及されていないものの特記に値する。

(30) ここには事実誤認が見られる。トガンは1914年にみずから購入したテュルク語解釈書を「ブハラ・アミールの図書館にもっていき、寄贈した」のではなく、公刊された出張報告にも記されるように、サンクト・ペテルブルグに将来した[Validov 1916: 249]。これは現在もロシア科学アカデミー東洋写本研究(改組後の現名称)に“C 197”の所蔵番号のもとで保管されている[Dmitrieva 2002: 173]。

部にテュルク語の翻訳がなされており、これらの箇所ではアラビア語に特徴的な文体に準拠したものになっている。おなじく、つづく200頁からなる部分においてスーラは大きめの紙幅をもって解釈がなされ、各頁には35～40行から構成される、テュルク語に特徴的な散文の翻訳文が位置づけられ、注釈は小さく書かれている。解釈書のテキストにおける散文による翻訳では、テュルク語通有の文体が存在すると同時に、独自性もみとめられる。同解釈書のテキストにおいてはカラ・ハン朝期の諸文献の言語的伝統が優勢であるものの、オグズやキプチャクといった部族の諸語の特徴も存在する。これによって、この解釈書は1つのグループとしてのテュルク系部族集団の諸語の特徴を反映し、また歴史的にウズベク語の発展のありようを示す重要な文献史料の1つとみなされる。この解釈書がウズベク語と有機的な関連性をもつことは、テュルク語本来の諸単語の音声的・文法的・語彙的特徴をとおして表れている。

テュルク語で著された最初期の〔紙媒体の〕文献の1つは、『テュルク語解釈書』であるとみなされる。この解釈書には、オルホン・エニセイ碑文と古代ウイグル碑文、そして11～12世紀の諸文献に特徴的なテュルク語本来の語彙群がみとめられる。おなじく、この著作は宗教哲学と関連していたため、アラビア語とペルシア・タジク語の単語も使用された。同解釈書における言語学的な標識は、一方でオルホン・エニセイ碑文と古代ウイグル碑文を想起させるが、他方では11～14世紀に固有の言語的特徴を表している。トルコの学者F・キョプリュリユザーデ〔ファト・キョプリュリユ〕も『テュルク語解釈書』が10～11世紀に著され、ティムール朝時代に書き写されたと強調する。われわれは、解釈書の音声的・文法的・語彙的特徴にしたがって、この著作が12世紀に著されたものであり、また書き写されるときに若干の修正がなされたとみている。同著作の本文の特徴と言語学的諸事実は、第1に13～15世紀の文字記録に適合し、第2に11～14世紀の諸文献の言語との類似性をもつ。第3に、同著作の本文の特徴と言語学的諸事実は古ウズベク語文献と有機的に関連する。第4に、この解釈書は、現在のウズベク語とテュルク諸語の通時的かつ共時的な特徴を明らかにするうえで役立つ。

この研究者は、同著作をととても深く、包括的に研究した。まず音声的転換表記、すなわち転写を準備した。その後、それを生き生きとしたウズベク語に翻訳した。われわれは、その転写をカザクバイ・マフムードフ・ダームツラー⁽³¹⁾から受け取り、電子版を準備した。いくつかの資料で強調されるところによれば、古テュルク語の解釈書のうちのもう1つは、ムハンマド・イブン・ハーッジ・ダウラトシャー・シーラーズィーによって西暦1333年に書

⁽³¹⁾「ダームツラー」とは先生のことを指す敬称である。宗教指導者や学者、教育機関における比較的ベテランの教師などに対して、2人称および3人称で用いられる。

き写されたクルアーンの解釈書であり、現在トルコのテュルク・イスラーム博物館に保管されている。

〔通称〕『カーシュガリーの解釈書』〔*Tafsiri Koshg'ariy*〕

著者について

前世紀に生き、著述活動をおこなったこの地の学者の1人であり、また「ハージー・カーリー」の異名で名声を博した著述家たる学者ムハンマド・ザリーフ・カーシュガリーは、タシュケント出身のウズベク人である。彼は1872年にタシュケント市で誕生し、ブハラで教育を受けた。学問を修めたのち、カシュガルに移住し、そこで聖なるクルアーンの解釈に着手し、その仕事を完成させた。彼の著作はこのほかにもあると言われる。彼は1959年にグルジャ〔イリまたは伊寧〕で他界した。

著作について

この解釈書は、20世紀前半のウズベク語文章語で著されている。そこでは、まずアーヤの本文が、次にその意味の翻訳が示され、最後に解釈がなされる。この解釈書では、アーヤを〔別の〕アーヤによって注釈する方法が貫かれている。それと同時に、スーラどうしの関連性も明らかにされている。注釈者がアーヤを注釈するさいにハディースを引用するとき、そのハディースについても詳細な議論がなされる。アーヤの解釈においてさまざまな学説がある場合、それを1つずつ提示したうえで、自分が採用する学説について述べ、その正しさを立証しようとする。

著作の刊本について

この解釈書がヒジュラ暦1344年ズー・アルカアダ月21日（西暦1926年6月2日）に書き終えられたことは、著作の最後に記されている。このザリーフ・カーシュガリーの著作のうち、30番目のジュズウ⁽³²⁾の解釈は1987年にカタールで印刷された。解釈書のこのわずかな部分が大きな判型で735頁を占めることから、この著作の全体がどれほど大きなものであったかが推測できる。この〔カタール〕版の序文で発行者ハサン・アブドゥルハミードは、この解釈書の30番目のジュズウに相当する箇所がカシュガルで1356／1937年に刊行され、また残りの箇所がグルジャ市において写本のかたちで保管されていることを述べている。

(32) クルアーンを30に分けたうちの1部分のことを指す。

〔通称〕『アルトゥンハン・トラの解釈書』〔*Oltinxon to'ra tafsiri*〕

著者について

この解釈書の著者は、中央アジア周辺では「アルトゥンハン・トラ」、パキスタンでは「トーラ・サーヒブ」の名で有名であった偉大な同胞サイイド・マフムード・イブン・サイイド・ナズィール・タラーズィーである。この人物は1895年、カザフスタン南部のウズベキスタンとの境の旧タラス（現在のジャムブル）市で誕生した。タフスィール学者、ハディース学者、文人、詩人としての顔をもつアルトゥンハン・トラは、まったくき学者にして献身的な愛国者であった。幼少期からすでに、類まれな才気と磨きぬかれた能力をもっていた。クルアーンの読誦にも長けていた。ハーフィズとサアディーの著作から多くの事柄を暗記していた。この人物は、タシュケントのコカルダシュ・マドラサ、そののちにはブハラのマドラサで学び、アラビア語とペルシア語を十分に身につけた。祖国解放のために学問的・実践的な諸活動をおこない、祖国を賛美して一連の詩を書いた。

サイイド・マフムード・タラーズィーは、聖なるクルアーンをウズベク語に訳した最初の翻訳者である。彼はこの難儀な仕事をインドにいた頃にはじめ、10年間をかけて終えた。アルトゥンハン・トラがその後40年以上つづけることになる学問とイスラーム、ならびに文学と教育にかかわる諸活動は、両聖都すなわち栄光あるマッカと光り輝くマディーナでおこなわれる。主要な著作はここで創作されるのである。彼は〔サウジアラビア〕政府の招待によって、ハラム・シャリーフ〔マディーナ〕でも数年間教鞭をとった。アルトゥンハン・トラには、20点近い著作が存在する。とりわけ『聖なるクルアーンの翻訳・解釈書』、『われらが預言者——彼に祝福と平安あれ——の行状について』、イマーム・ナワウィーの『善良な人々の果樹園』と題された4巻本の著作の訳注、『イスラームの教義』、イマーム・タハーウィー⁽³³⁾の著作である〔通称〕『タハーウィーの信仰箇条』に付した韻文・注釈、アブー・イーサー・ティルミズィーの著作『ムハンマドの美質』の訳注、『マフムードの六行詩』などが挙げられる。アルトゥンハン・トラ——彼に神の慈悲あれ——は、1991年6月26日に栄光あるマッカで逝去した。

著作について

この著作にわれわれは、便宜的に『アルトゥンハン・トラの解釈書』と名づけた。原題は『聖なるクルアーン：トルキスタン語への翻訳・注釈書』と銘打たれる⁽³⁴⁾。アルトゥンハン・ト

(33) エジプトのタハー出身のハナフィー派法学者(844/5・523～933年)。

(34) 編訳者の手元にある1975年刊カラーチャー版の標題紙によれば、同書のアラビア語原題は『聖なるクルアーン』であり、サイイド・マフムード・タラーズィー「の筆によりトルキスタン語で翻訳および注釈がなされた」旨が(副題というよりは)責任表示として添え書きされているものと理解することもできる〔al-Ṭarāzī al-Madani 1975〕。

ラ——彼に神の慈悲あれ——は同胞の勧めに触発され、宗教的な必要性が生じていたことへの配慮から、聖なるクルアーンの〔アラビア文字〕テュルク語への翻訳と解釈をおこなった。この著作は当時、ウズベク語読者の手元に置かれる、母語でなされた唯一の解釈書であった。著者のイニシアティブとこの地の宗教指導者たちの尽力によって、すでに旧ソ連期に、この解釈書はウズベキスタンにもちこまれ、比較的狭い範囲ではあれ解釈書読者層のあいだで頒布された⁽³⁵⁾。それは当時、この地のムスリムにとって大いなる知らせであった。とりわけ、知識のある信奉者たちにおいては大きな喜びと関心を引き起こした。当時の学徒の一部は、その著作が宗務局にもちこまれたことについて聞くやいなや首都に向けて歩を進め、その解釈書を手にとり、目に押しあて、ひじょうなる高揚感とともに帰っていったのである。

外国で刊行されたこの著作のすべての版は、アラビア文字、すなわち古テュルク語のために用いられたアルファベットで印刷された。そのさい、聖なるクルアーンの本文の各行の下にアーヤの意味の翻訳が付された。解釈と注釈は、頁の縁周りの場所を占めた。同著作は、このように約1世紀前のウズベク語で記されていた。この解釈書に特徴的な点は以下のとおりである。すなわち、それは大衆向けで庶民を対象としていることである。そこでは、アーヤはやや自由に翻訳され、必要に応じてアーヤには短い解釈が付されている。提示されている情報にはときに典拠が示されているが、読者を煩わせないように、多くの場合、典拠についての言及はされていない。同書は、格調あるウズベク語の文体において傑出している。

著作の刊本について

この解釈書は、1956年にボンベイ、1975年にカラーチー、1980年にジッダ、また1993年にカタールで印刷された。その後、2006年にはハージー・イスマトウツラー・アブドゥツラーにより、この解釈書のキリル文字の版が準備され、タシュケントで刊行された⁽³⁶⁾。

⁽³⁵⁾ 『アルトゥンハン・トラの解釈書』は、公式レベルではソ連中期に中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局を訪問したサウジアラビアの使節団によってもちこまれたと言われる。その頃から1979年頃まで、この解釈書がウズベキスタンで最も権威あるものと評されていた。

⁽³⁶⁾ 編訳者の手元にあるおなじ翻訳者による解釈書のキリル文字の版は2002年に出版となっている。このことから、原文にある「2006年」との出版年は誤植である可能性が高い。

『フルアーンの翻訳における弁別的説述』〔*Bayonulfurqon fi tarjimatilqur'on*〕⁽³⁷⁾

著者について

著者は、「ヒンドゥスターニー・ダームッラー」や「ハージー・ヒンドゥスターニー」、「マウラヴィー・ダームッラー」といった名で名声を博し、中央アジア周辺で学問と教養の光輝を広めることに比類ない貢献をなした大学者、偉大な師ムハンマドジャー・ダームッラー・マウラヴィー・ムッラー・ルスラム・オグリ・ホーカンディーである。この人物は1892年にコーカンド地方のホージャ・ムハンマド・ヴァリー廟の近くのチャール・バーク村で教養ある家庭に生まれた。両親は知を探究していたことから、わが子が幼少期から知を習得するように心血を注いだ。だからこそ、ムハンマドジャーは10歳の時にクルアーンのハーフィズになるに至った。当初はコーカンドとブハラのマドラサで、のちにはアフガニスタンのバルフとマザリー・シャリーフといった町で知の習得に励んだ。その後、師匠たちの勧めによってインドへ旅立ち、アジュメール市のウスマーニーヤ・マドラサでさらに8年間にわたり知を習得した。このことにちなんで、彼は「ヒンドゥスターニー」〔インド出身者の謂い〕という異名を得た。ムハンマドジャー・ヒンドゥスターニー・ダームッラー——彼に神の慈悲あれ——は、1989年に97歳のお歳で他界し、マウラーナー・ヤアクーブ・チャルヒー廟に埋葬された。

ハージー・ダームッラー——彼に神の慈悲あれ——は、何十、何百もの弟子たちを教育し、故郷への奉仕に備えさせ、故郷に知識と宗教信仰の光を広めると同時に、将来の子孫たちに大きな知的財産も残した。この人物は、タジキスタン科学アカデミー東洋学研究所写本部門で翻訳者として働いていた頃に、一連のアラビア語書籍をペルシア語とウズベク語に翻訳した。ザマフシャリーの著作『箴言撰集』と〔通称〕『ザマフシャリーのマカーマート』をアラビア語からペルシア語に、イマーム・バルザンジーの著作『マウリド』をウズベク語に、ブーシーリー⁽³⁸⁾の『ブルダの頌詩』をペルシア語に、アラブの詩人ファラズダクがイマーム・ザイヌルアービディーン⁽³⁹⁾に捧げた頌詩をウズベク語に翻訳した。その後、イマーム・ブハー

(37) 書名冒頭の“*Bayonulfurqon*”というアラビア語式の語句は、ウズベク語原文で与えられている“*farqlovchi bayon*”という訳にしたがって「弁別的説述」と訳した。ただし“*furqon (furqān)*”の語は元来アラビア語で「証拠」を意味し、定冠詞をともなった“*al-furqān*”はクルアーンそれ自体を指すことから、件の語句は「証拠（たる聖典）の説述」と訳すこともできる。書名全体は形態的にみると、前置詞“*fi (fī)*”を挟んで、“*-furqon (-furqān)*”と“*-qur'on (-qur'ān)*”の両句末が押韻するかたちをとっている。

(38) エジプトのブーシーール村出身の詩人（1211～94年）。本名はムハンマド・イブン・サイード、尊称はシャラフッディーン。頌詩（カスィード）を得意とした。代表作『ブルダの頌詩』の「ブルダ」とは、預言者ムハンマドの外套を指す。

(39) マディーナ出身の12イマーム派第4代イマーム（658～712/13年）。預言者ムハンマドの曾孫である。

リーの『真正集』、ブルハヌッディーン・マルギーナーニー⁽⁴⁰⁾の著作『ヒダーヤ』、アブー・ハニーファ——彼に神の慈悲あれ——の『大フィクフ』、アブドゥッラフマーン・ジャーミー⁽⁴¹⁾の〔通称〕『ムッラーの注釈』、ムハンマド・ハイラーバーディー⁽⁴²⁾の著作『論理の階梯』などといった諸著作に注釈をおこなった。〔通称〕『シャーシー⁽⁴³⁾のウスール』や〔ムッラー・ジーワン⁽⁴⁴⁾の〕『光輝のなかの光輝』、〔タフターザーニー⁽⁴⁵⁾の〕『修辞学小注釈』といった諸著作をウズベク語とペルシア語に翻訳した。また、アブドゥルカーディル・ビーディル⁽⁴⁶⁾の抒情詩に注釈をおこなった。ダームッラーの代表作が聖なるクルアーンの解釈書とされることに疑いの余地はない。

著作について

著作の題目は『バヤーン・アルフルカーン・フィー・タルジマト・アルクルアーン』、すなわち『クルアーンの翻訳における弁別的説述』である。これは、著者が亡くなる10年ほど前〔1979年頃〕に著された⁽⁴⁷⁾。弟子たちが言い伝えるところによれば、著者——彼に神の慈悲あれ——は、この解釈書の執筆について、とりわけ以下のようにおっしゃった。「アラビア語とペルシア語による解釈書はとても多く記されているが、ウズベク語による解釈書はほとんどない。それゆえ、この大いなる仕事を全力で成し遂げる決心をした。多くの人にとって理解しやすいよう、この解釈書をアンディジャン方言で記すことにする。至らぬ点があれば、敬愛する読者諸賢からの批正を望んでやまない」。

(40) リシュタン出身のハナフィー派法学者(1152～97年)。

(41) ホラーサーン地方ヘラート近郊の町ジャーム出身のスーフィーならびに詩人(1414～92年)。クルアーン学やハディース学、法学にも造詣が深かった。スーフィーとしてはナクシュバンディー教団のサアドゥッディーン・カーシュガリーに師事し、また後年にはヘラートで同教団のピール(導師)として活躍したことで知られる。

(42) インドのハイラーバード出身のハナフィー・マートゥリーディー派学者(1828/29年没)。ファズリ・イマームの名で有名。その主著『論理の階梯』は、マドラサで論理学の教科書として使用された。

(43) タシュケント出身のシャーフィー派法学者、カッファール・シャーシー(904～76年)を指す。シャーシーはイスラーム法の法源(ウスール)学の分野ですぐれた業績を残した。

(44) インドのラクナウ出身のハナフィー派法学者(1717/18年没)。本名はアフマドで、シャイフ・アフマドの名でも知られる。タフスィール学とウスール学ですぐれた業績を残した。その著作『光輝のなかの光輝』はウスール学の注釈書である。

(45) ホラーサーン地方ナサー近郊のタフターザーン出身の修辞学者(1322～89/90年)。論理学、神学、タフスィール学などの分野でもすぐれた業績を残した。アミール・ティムールによってサマルカンドの宮廷に招かれ、そこで一生涯にわたって暮らした。

(46) インド東北部のアズィーマーバード(パトナ)出身のスーフィーならびに詩人(1644～1721年)。父祖はケシュ(シャフリサブズ)出身である。

(47) この解釈書は、1979年頃以降のウズベキスタンの解釈書読者層のあいだで密かに流布され、『アルトゥンハン・トラの解釈書』をしのぐ最も権威あるものと評されるようになった。

この解釈書は口語的、すなわち口述による解釈書であったがゆえに、独自の構成と文体、特別な精神性をもっている。だからであろうか、この著作では、多くのアーヤの翻訳が逐語的になっておらず、解釈が順不同になされている。アーヤの一部の解釈は、あるべき翻訳より前にくる。また、いくつかのアーヤは〔通例とは〕やや異なったかたちで翻訳されている。当時の慣例にしたがって、翻訳において補足された言葉が明示されていない。さらに、そこで引用されている情報には多くの場合に典拠が示されておらず、それはむしろ伝承のかたちで語られている。〔しかし、〕この著作は、今日においてなおその価値を失っていない。

著作の稿本と刊本について

ハージー・ヒンドゥスターニー・ダームツラー——彼に神の慈悲あれ——は、晩年に聖なるクルアーンに解釈をおこなうべく決心し、この仕事をおよそ1年で成し遂げられた。彼はこの著作を書き取らせ（すなわち口述し）、それを弟子たちが〔アラビア文字〕テュルク語アルファベットで著した。とりわけ、この著作を書き起こすさい、マルギラン人の故アサドゥッラーハン・ダームツラーとコーカンド人のイブラーヒームジャーノ・ダームツラーが筆記をおこなった。その後、1983～84年にアンディジャン人の篤信家であり、またハージー・ヒンドゥスターニー・ダームツラーの信奉者の1人でもある義子の故アーキフハン・ハージー・ダダのイニシアティブのもと、アブドゥッラッザークというナマンガンの書家によって、この解釈書は元々のアルファベットにもとづき6巻に分けて書き写され、配布された。また彼は、この著作の一部を書き写し、販売もした。こうして、この解釈書は当時からすでに一部の人々の手元に行き渡っていた。アブドゥッラッザークの書写にさいしては、内容的に相互にきわめて関連したいくつかのアーヤの本文が記され、その下にアーヤの翻訳と解釈がほどこされるかたちをとった。

この著作は、ウズベキスタン科学アカデミー〔言語・文学研究所〕の研究員であり勤勉な学者サイフィッディーン・ラフィーッディーン・ノフによって、2006年にいくつかの増補と注釈とともにキリル文字での刊行準備がなされ、マワラーアンナフル出版社から刊行された。

『聖なるクルアーン：ウズベク語注解付き翻訳書』〔*Qur'oni karim. O'zbekcha izohli tarjima*〕

著者について

シャイフ・アラウッディーン・マンスールは、有名なウズベク人ウラマー〔イスラーム諸学を修めた知識人〕の1人である。彼は、1952年にクルグズスタン共和国オシュ州カラスー市で生まれた。彼は当代の著名な学者たちから教育を受け、知識を完成の域に到達させた。この学者は聖なるクルアーンの意味のウズベク語訳注を準備するという大いなる務めを果た

し、榮譽を得た。また彼の翻訳書は、中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局が開催したコンクールで最優秀と評価された。その後、彼は2000年にカラス市で聖なるクルアーン学習センターを組織し、聖なるクルアーンの意味をロシア語（アリーシェール・アフマドと共訳）とクルグズ語に翻訳した。後年には、聖なるクルアーンのできるだけ包括的な解釈書を準備すべく取り組んでいる。この学者はまた、『イマーム・アアザム⁽⁴⁸⁾は偉大なるわれらのイマームなり』と題する著作もものした。

著作について

この著作は、初版では『聖なるクルアーン：ウズベク語注解付き翻訳書』と名づけられた。このことについて、ラフマトゥッラー・カーリー・アービドフ⁽⁴⁹⁾は以下のように記している。「この著作の欠陥は、著者が絶対であるはずの『聖なるクルアーン』という題目を翻訳書に付してしまっているという過ちである。なぜなら、聖なるクルアーンはアラブの言語とアルファベットで書かれたからである」（『中央アジアの学者たちの解釈学分野における功績』タシュケント・イスラーム大学出版局、2009年）。

この翻訳書は、聖なるクルアーンの意味がウズベク語で書かれた最初のものといみなされている。このことが著者にとって大きな榮譽と成果であることに疑いはない。そこでは、クルアーンのアラビア語本文は記されていない。スーラの名称とアーヤの数を記すにとどまっている。〔項目として立てられた〕各スーラの冒頭でそのスーラについて概説がなされ、ただ必要に応じてのみアーヤが注釈されている。この翻訳書は初の試みであったので、初版において一部の欠陥はあったが、それは後続の版で解決されていった。

著作の刊本について

70年間におよび抑圧体制が崩壊し、宗教への道がひらかれはじめ、また独立によって活みなぎるそよ風が吹きはじめた頃、〔発行部数の規模の大きさの点で〕民衆にはじめて供されたクルアーンの意味の翻訳が、アラーウッディーン・マンスール・ダームツラーによって準備された聖なるクルアーンのウズベク語注解付き翻訳書であった。それは1990年、月刊誌『東方の星』の第3号から購読者の関心のもとに委ねられた。これは初の試みであった

⁽⁴⁸⁾ 「イマーム・アアザム」（「至大なる導師」の意）はハナフィー法学派の祖、アブー・ハニーファ（699頃～767年）の尊称。統語関係からもわかるように、これはアラビア語／ペルシア語からウズベク語に借用された表現である。

⁽⁴⁹⁾ ナマンガン出身のクルアーン学者（1951年～現在）。14歳でクルアーンすべてのスーラを暗唱し、1973～78年にはブハラ市のミーリ・アラブ・マドラサでイスラーム諸学を学んだ。独立後、タシュケント・イスラーム大学で准教授として働いたのち、タシュケント市内の政府公認モスクでイマーム（礼拝の先導者）職を務めるに至った。現在は病氣療養のため一線から退いている。

ことから、まず聖なるクルアーンとアラビア語、宗教史に通じている専門家と著述家から構成される特別な編集委員会の管理下で刊行された。同誌の発行部数は17万部であった。翻訳書は多くの補訂を経て完成され、1992～93年頃にチオルパン出版社およびガフル・グラーム出版社から一度ならず再版された。著者の主張によれば、この翻訳書の印刷数（発行部数）の総計は200万部に達した。この著作は、1995年にウズベク語からトルクメン語に翻訳され、トルクメニスタンでは1万部が印刷された。2001年には、ビシュケク市でラテン文字表記のカザフ語版が刊行された。

翻訳者は、この翻訳書にもとづいて『偉大なるクルアーンの解釈書』と題するウズベク語の解釈書にも着手した。その第1巻は開扉章と牝牛章の解釈に当てられており、これは2013年にビシュケクで刊行された。現在では、この解釈書の第7巻までが刊行されており、それらの巻では聖なるクルアーンのおよそ半分以上がウズベク語に翻訳され、また解釈されている。

『新月の解釈書』〔*Tafsiri hilol*〕

著者について

シャイフ・ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフ——彼に神の慈悲あれ——は、1952年4月15日にウズベキスタン共和国アンディジャン州に生まれた。中等学校を卒業後、ブハラ市のミーリ・アラブ・マドラサに入学する。のちに、彼はタシュケントのイマーム・ブハーリー名称イスラーム高等学院で学業を継続させる。高等学院を卒業すると、『ソヴィエト東方のムスリム』誌で働く。その後、リビア・アラブ合衆国トリポリ市のイスラーム・ダアワ大学⁽⁵⁰⁾に入学し、同学を1980年に優秀な成績で終え、帰郷した。その後、中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局外事課で働き、またちょうどその時に〔イスラーム〕高等学院で講義を担当しはじめる。それから、同学院で副学院長となり、のちには学院長職に就いた。1989年に開催された宗務局の総会において、中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局のムフティー職に任命される。彼は独立後のウズベキスタン共和国の初代ムフティーになった。

シャイフ・ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフ殿下は、後年には学問・教育や宗教文化の向上のために比類なき貢献を果たした。彼は複数の国際機関のメンバーであった。

⁽⁵⁰⁾ アラビア語の原語は「ジャマーイーヤ・ダアワ・イスラミーヤ」（イスラーム宣教機関）である。この機関はカッターフィーの思想を広めることを目的として設立されたと言われる。これらの点について、日本エネルギー経済研究所中東研究センター研究員であるリビア研究者・小林周氏にご教示いただいた。

- ▶ 栄光あるマッカのイスラーム世界連盟の創設会議のメンバー。
- ▶ 世界イスラーム諸民族指導機構事務総局のメンバー。
- ▶ 世界ダアワ連盟のメンバー。
- ▶ 世界ウラマー会議のメンバー。
- ▶ イスラームバーード市における世界イスラーム連盟のメンバー。
- ▶ 世界ウラマー・思想家フォーラム執行委員会のメンバー。
- ▶ 世界モスク最高評議会のメンバー。
- ▶ ヨルダンにおけるアール・バイト機構附属イスラーム思想学会のメンバー。

シャイフ猊下は、エジプト・アラブ共和国やリビア合衆国、ロシア連邦のような国々において、名誉称号や勲章をもって表彰されている。

シャイフ・ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフ猊下は、何十ものひじょうに貴重な著作を著している。それらは、『信仰』、『中庸：人生の道』、『宗教は教導なり』、『イスラームにおける人権』、『スンナ派の教義』、『靈魂の躰け』（3巻）、『キファーヤ：ウィカーヤ提要への注釈』（3巻）、『礼節の宝庫』（〔ブハーリーの〕著作『アルアダブ・アルムフラド』の訳注・4巻）⁽⁵¹⁾、ハディースの注釈にあてた『ハディースと人生』（39巻）等である。彼の代表作が聖なるクルアーンの解釈にあてた『新月の解釈書』であることに疑いの余地はない。

著作について

この著作は、抑圧体制が終焉し、われらの民衆がみずからの宗教に回帰しはじめた頃、ほかに先駆けて著わされた解釈書であったので、闇夜を照らす新月にちなんで『新月の解釈書』と名づけられた。『新月の解釈書』は、ウズベク語を用いる人々が最も愛読した解釈書の1つである。それどころか、今日の読書家たちは「解釈書」と言えば、この書のことだと理解するようになりさえした。それは至極当然のことであり、同書はそうなるべくしてなったのである。

この著作におけるアーヤの翻訳では伝統的な文体も使われ、それゆえクルアーンに固有の壮麗さが光り輝いている。各スーラの釈義に入る前に、その名称、マッカ啓示またはマディーナ啓示の別、およびアーヤの数が述べられ、そのうえで当該スーラの主題について略解が示される。それぞれのアーヤに番号をつけ、まずアラビア文字テキスト、次に聖なるアーヤの意味の翻訳が示され、さらにアーヤの解釈へと移る。翻訳ではアーヤの意味の普遍性が保持されている。アーヤの意味の翻訳は太字で書かれている。意味の理解に資するが原文にはな

⁽⁵¹⁾ 『礼節の宝庫』は、イマーム・ブハーリーの編纂になる礼儀に特化したハディース集である。

い言葉は、通常の文字で書かれ、括弧で括られている。異なるアーヤどうしの内容的な相互関連性も明らかにされている。一部のアーヤの啓示の理由について伝承がある場合には、それらが引用されている。必要な場合には、歴史的な出来事と物語も記されている。一部の人々と部族についての概要も紹介されている。

この解釈書の最も重要な点と価値は、それが真正で信頼に足る情報にのみ依拠し、かつ引用されたハディースとほかの文献の出典を記していることにある。アーヤの内容を今日の状況に関連づけて説明していることには、わけても大きな意義がある。同書の「『新月の解釈書』の読者へ」と題される序文や、おなじくその後続の版の序文においては、聖なるクルアーンの歴史と解釈学、およびタフスィール学者たちについて、ひじょうに貴重な情報が提示されている。

総括すれば、この著作には独特の高邁な精神、誠実さと愛の光が輝いている。それが神聖なる土地において気高き心に生まれでた⁽⁵²⁾ことは、慧眼の読者の誰もがただちにこれを察するのである。それは、テュルク語とウズベク語でなされた解釈書の花冠である。この著作では、伝統性と現代的なまなざしが一体化している。アーヤは流れるような滑らかさをもって、じつに幅広く説明されているがゆえ、これに類するものを見つけることはひじょうに困難である。このわれらのタフスィール学者がアーヤのなかに見いだす意味は、他所ではけっして見られないものなのである。

著作の刊本について

『新月の解釈書』の初版は、1991年に聖なるクルアーンの30番目のジュズウの解釈書から刊行されはじめた。その後、29、28、27番目のジュズウの解釈書が順に読者たちの手元に届くことになった。それから著者は、26番目のジュズウの解釈書をはじめて外国で上梓した。のちに、牝牛章、イムラーン家章と女章の解釈書が別々に単行本として刊行された。このようにして、聖なるクルアーンの現代ウズベク語によるはじめての完全な解釈書が出現したのである。著者が帰郷したのちの2006年に⁽⁵³⁾、『新月の解釈書』は全6巻本として刊行された。2008年にはこの解釈書に増補がなされた第2版が、また2013年には第3版が刊行された。それ以降も、解釈書はほぼ毎年再版され、読者たちによって前払いで購入されている。この解釈書とは別に、アーヤの意味の翻訳のみが取りだされ、単行本として刊行されている。

(52) この書がムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフの聖地マッカ滞在中に執筆されたことを指している。

(53) ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフの国外追放の経緯については、「編訳者序文」の注10で述べた。くわしくはそちらを参照されたい。

『聖なるクルアーン：翻訳と学問的・歴史的注釈』
 [Qur'oni karim: Tarjima va ilmiy-tarixiy izohlar]

翻訳者

①第1～3章の翻訳者

哲学博士・東洋学者であるムタッリブ・ウスマーン〔ウスマーノフ〕・アフメドヴィチ。序文と学問的・歴史的な注釈も彼による。ムタッリブ・ウスマーンは、1924年12月10日にアンディジャン州イズバスカン郡パイトゥク村で生まれた。彼は、1947～52年に国立中央アジア大学〔現在のウズベキスタン国民大学（以下同）〕東洋学部において〔ソ連〕国外の東洋諸国の歴史に関して教育を受ける。1957～61年には、モスクワの社会科学系の大学院で学業に励む。彼は一連の学問的・実践的諸課題の遂行において功があった。とりわけ1984年から1987年まで、ウズベキスタン科学アカデミー哲学・法学研究所において無神論部門長であった。ムタッリブ・ウスマーンは、1987年からウズベキスタン科学アカデミーのアブー・ライハーン・ビールニー名称東洋学研究所に移籍し、そこでクルアーン翻訳班長やイスラーム学部門長、また主幹研究員として勤務する。ムタッリブ・ウスマーンは、数々の国際学術会議に参加し、講演をおこなった。彼の編纂になる『イスラーム便覧』は何回も刊行された。宗教やイスラーム史、また哲学に関する多くの論文と小冊子が発表されている。彼は1994年12月にウズベキスタン共和国栄誉賞の表彰を受け、同年の12月18日に他界した。

②第4～9章の翻訳者

言語学準博士のアブドゥサーディク・イリソフ。1928年2月20日にタシュケントで生まれた。1946～51年、国立中央アジア大学東洋学部の〔ソ連〕国外東洋諸国史部門で学んだ。1952～62年には『ゲンチャ』誌で責任秘書や編集長として勤務した。1960年からはウズベキスタン共和国科学アカデミーのアブー・ライハーン・ビールニー名称東洋学研究所において、当初は下級研究員、のちに上級研究員として職務を遂行した。イブン・スィーナーの『サラマーンとイブサール』の物語を主題として準博士号の学位を取得した。国際会議において数々の主題で講演をおこなった。彼は、研究活動をおこっていた期間に50点以上の書物と小冊子を著した。300点以上の一般向けの学術的論考が刊行された。

③第10～16章の翻訳者

言語学博士のハージー・イスマトゥッラー・アブドゥッラーエフ教授。1927年にナマンガ市で生まれた。東洋学者・史学者・文学者。国立中央アジア大学で教育を受けた。サンクト・ペテルブルグ大学〔旧レニングラード大学〕で大学院生として学んだ。1993年からは国立ナマンガン大学で東洋諸語講座長。写本と石版本史料にもとづいて、20点以上の書物を刊行した。

④第17章の翻訳者

言語学準博士のウバイドゥッラー・ウヴァトフ教授。1940年にカシュカダルヤ州グザル郡で生まれた。1958～64年、国立タシュケント大学〔国立中央アジア大学の後身、現在のウズベキスタン国民大学〕で学んだ。国立タシュケント大学アラビア語教員、ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所主幹研究員、イマーム・ブハーリー国際センター長といった職位で勤務した。アラブ諸国において通訳者を務めた。多数の学術論文の著者。2008～13年には、イマーム・ブハーリー国際センター長の任にあった。

著作について

著作の題目は、『聖なるクルアーンの意味の翻訳と学問的・歴史的注釈』と名づけたほうがわれわれの考えではより十全で正確なものとなる。この翻訳書は、ムタッリブ・ウスマーンが指導する東洋学者たちによって編纂されたものであるが、完全ではない。同書では聖なるクルアーンの半分、すなわち開扉章からはじまり、夜の旅章までの翻訳と注釈がなされた。責任編集者であるムタッリブ・ウスマーンは、翻訳に入る前に、文字と文献史料、イスラームとクルアーンの歴史、そしてアッラーの使徒——彼に祝福と平安あれ——の行状について簡潔かつ貴重な情報を提供する。著者はこの序文の冒頭で、主題に公平な立場からアプローチするつもりであること、西洋やロシアの東洋学者たちの論著のみならず原典史料やムスリムの歴史書にも依拠すること、また一部の東洋学者によって現今までなされてきた多くの研究が一面的にしてもっぱら無神論の精神の影響下にあることを強調する。したがって、著者が与える情報はムスリムの学者たちの言葉にほぼ調和する。しかるべき箇所において、一部の西洋の東洋学者の根拠のない偏った考えは、確固たる証拠によって批判に晒される。

この刊本では、頁の真ん中にマディーナのムスハフ〔書物の形態をとるクルアーン〕にもとづいた聖なるクルアーンのアラビア語本文が記され、各頁ではアーヤの意味の翻訳が本文の周囲に太字で示されている。監訳者であるムタッリブ・ウスマーン自身が強調しているように、翻訳は純学問的な基準に沿うものである。したがって、同書においてアーヤはほぼ逐語的に翻訳され、また一部の補足説明も本文中に挿入されるべきことがわかるように配慮されている。だからこそ、翻訳には括弧が1つも使われていない。補足的な注釈もなされている。補足的な注釈は参照欄に示されている。一部の箇所では、ある文言の訳語の選択理由を明示する努力もなされている。一部の東洋学者が「スーラ」や「アーヤ」といった言葉をも翻訳しようとするのは間違いであり、根拠を欠くことが説述される。注釈においては、ウズベク語によるほかの解釈書や注解とは異なるかたちで、歴史上の人物や出来事について現代歴史学の観点からもアプローチし、歴史史料の読解から得られる情報も引用されている。翻訳作業の完成度は相当なものであるとはいえ、初の試みであったことから、そこには議論すべき点

もある。たとえば、戦利品章第27節の意味の翻訳において、「使徒」(Rasul)という言葉が「大使」(elchi)と訳されていることは、読者が意味を誤解する原因となっている。

著作の刊本について

この著作の一般向けの刊本はない。その特別の刊本は2004年12月、監訳者兼責任編者であった故ムタッリブ・ウスマーン生誕80周年祭を前に、科学出版所から発行された。同書は、ウズベキスタン共和国科学アカデミー・アブー・ライハーン・ビールーニー名称東洋学研究所における研究会議の、2004年9月22日に開催された第8回定例会議の決定により、同研究所を出版者として刊行された。

『聖なるクルアーンの意味の翻訳と解釈』 〔*Qur'oni karim ma'nolarining tarjima va tafsiri*〕

翻訳者について

シャイフ・アブドゥルアズィーズ・マンスーロフは、有名なウズベク人ウラマーの1人である。1944年にフェルガナ州ミンダン村で生まれた。同時代の幾人かの著名なウラマーや学識者たちの手ほどきにより教養を身につけた。1975～79年にはイマーム・ブハーリー名称タシュケント・イスラーム学院で、また1980～81年にはスーダンのウンム・ドゥルマーン大学で教育を受けた。その後、ウズベキスタン・ムスリム宗務局のモスク・ファトワー部門長、マワラーアンナフル出版所長、閣僚会議附属宗教問題委員会の一部門長、ウズベキスタン共和国の大統領諮問役、タシュケント・イスラーム大学の副学部長といった役職で勤務した。彼には、聖なるクルアーンの意味のウズベク語訳以外に、『徳業に関するハディース』、『ムスリムたることの初歩的な教訓』、『ハッジの儀礼規則』、『1001のファトワー』、『イスラームは麻薬に反対する』といった、いくつかの著作がある。同様に、『1001のハディース』、〔シャブラーウィー⁽⁵⁴⁾の〕『説述の標示』、〔ザマフシャリーの〕『金の首飾り』といった著作をアラビア語からウズベク語に翻訳した。2006年8月からウズベキスタン・ムスリム宗務局長補佐の職にある。

著作について

この著作は『聖なるクルアーンの意味の翻訳と解釈』と題されている。そこでは、マディーナ版ムスハフに依拠しながら、見開き頁の中央寄りに聖なるクルアーンの本文が配置され、その周りにアーヤの意味の翻訳が示されている。この翻訳の特徴の1つは、意味をより理解

⁽⁵⁴⁾ カイロ出身のシャーフィイー派法学者(1679～1757年)。本名はアブドゥッラー・イブン・ムハンマド。その著作『説述の標示』は格言や逸話を集めたもの。

しやすくするために、解釈内容の提示にあたって本文にはない言葉を多く使用していること、ならびにこれらの語句が括弧に入れられていることである。一部のアーヤの内容を説明するために、脚注もほどこされている。巻末にはクルアーンと読誦学の知識に関する一連の重要な情報が補足されている。

著作の刊本について

この著作は1巻本であり、2001年と2004年、2007年、2009年の4度にわたって出版された。このように版を重ねていくなかで、いくつかの修正と補足がほどこされた。古いほうの版ではクルアーンの本文と〔解釈文の位置がうまく〕対応しないかたちで頁組みがなされた一方、新しいほうの版ではうまく対応するかたちで印刷がなされている。

『叢知の解釈書』〔*Tafsiri irfon*〕

著者について

ウスマーン・アリーモフは、著名な宗教家であり、ムフティーである。1950年にサマルカンド州イシュティハン郡で生まれた。1983～87年にはイマーム・ブハーリー名称タシュケント・イスラーム学院で教育を受けた。長年にわたって、サマルカンド州のイマーム・ブハーリー集会モスクにおいてイマーム・ハティーブとして勤務した。2000年以降には、ウズベキスタン・ムスリム宗務局サマルカンド州代表の身分で活動した。2006年8月からはウズベキスタン・ムスリム宗務局長、すなわちムフティーである。彼には『ハディース学者たちのスルターン』、『イマーム・アルブハーリーの祝福』、『ハズラト・イマーム⁽⁵⁵⁾全集』、『子供の躾け』などの著作がある。

著作について

この解釈書では、スーラの名称についての説明とそこで焦点が当てられている主題についての概要が示されている。アーヤのアラビア語本文の下にウズベク語訳が太字で付され、そのあとで解釈に移る。アーヤは、多くの箇所では別のアーヤの内容と照らし合わせながら解釈されている。引用された情報については原典が提示されており、信頼に足る諸著作が出典となっている。スーラの美質について伝えられてきた情報がある場合、それはスーラのあとに

(55) 「ハズラト・イマーム (Hazrat Imom)」 (『導師猊下』の意) はタシュケント出身の法学者、カフファール・シャールシー (前出) の尊称。これは現代ウズベク語の口語では、「ハスティマーム (Hastimom)」というくずれた縮減形で言及されることも少なくない。タシュケントの旧市街には彼の名を冠した建築複合体が残っている。その敷地と遺構はウズベキスタン独立後、大規模な復旧・整備事業の対象とされた。

補足されている。

著作の刊本について

『彙知の解釈書』は、2012年から出版されはじめた。はじめに、第30ジュズウと第29ジュズウの解釈書が出版された。その後、聖なるクルアーンの冒頭、すなわち開扉章から解釈がなされはじめた。この著作の2015年における最近の巻では、第11～13ジュズウ、すなわちフード章とユースフ章の解釈がなされている。

結論に代えて

本論を締めくくるにあたり、次のことを強調しておいてよからう。ここまで言及されてきたウズベク語による翻訳書や解釈書のほかに、一部のスーラやジュズウに限定されたテュルク語あるいはウズベク語による翻訳書や解釈書、さらには他言語からテュルク語に訳された解釈書もある。とりわけヤアクーブ・チャルヒー⁽⁵⁶⁾がペルシア語で書きあげた〔通称〕『チャルヒーの解釈書』という著作には、2通りのテュルク語訳、すなわち〔翻訳者の名にちなんで〕ハマダーニー版とタシュカンディー版の翻訳書がある。同様に、〔スューティー⁽⁵⁷⁾の〕解釈書『イトカーン』もテュルク語に訳されている。東洋学者シャムスディーン・ババハノフ⁽⁵⁸⁾は、クルアーンの第30ジュズウを翻訳と注釈とともに1991年に出版している。結論づけて言えば、テュルク諸民族それぞれを代表する知識人たちは、聖なるクルアーンの意味をみずからが帰属する民族に伝達することにおいて模範的な実例を示すことに成功したのである。われわれは、以上では聖なるクルアーンのウズベク語の翻訳書と解釈書について論じたにすぎない。

広くテュルク諸語で著された翻訳書と解釈書について語る場合、その著作数が200点以上にのぼることは明らかである。このことについては一連の学術論文や研究書も著わされている。トルコ人学者アブデュルカーディル・エルドアンは、テュルク・イスラーム博物館で保管されている9点のテュルク語による解釈書と翻訳書に関して学術研究をおこない、そのうちの3点を最古のものとみなした。准教授のイブラーヒーム・ウスマーノフとグルナーザ・

(56) ガズナ出身の著名なスーフィー（1363～1447年）。ハナフィー派法学者ならびにタフスィール学者としても活動した。スーフィーとしてはバハーウッディーン・ナクシュバンド（1318～89年）の教えを受けた。その墓廟はタジキスタンの首都ドゥシャンベの南郊に位置する。

(57) カイロ出身のタフスィール学者、ハディース学者ならびにスーフィー（1445～1505年）。シャーフィイー派法学や歴史学などの分野でもすぐれた業績を残した。

(58) タシュケント出身で、イスラーム法学者としても有名（1937～2003年）。中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局の第3代ムフティー（在任1982～89年）を務めた。

サイードヴァの共著である『マーワラーアンナフルのテュルク語解釈書抄史（チャルヒーの解釈書の翻訳）』（2012年タシュケント刊）と題された著作⁽⁵⁹⁾の導入部では、テュルク語による〔クルアーンの〕解釈書についてかなり充実した情報が提供されている。同様に、イマーム・ブハーリー名称タシュケント・イスラーム高等学院の2013年の卒業生であるガーイボフ・マクスードジャンは、『聖なるクルアーンの意味のウズベク語による翻訳書の比較分析』と題された卒業論文において、このテーマで考察をおこない、数々の貴重な知見をもたらしている。

偉大な父祖たちがテュルク諸語のほか、アラビア語やペルシア語で著した解釈書も多数あり、それは世界的に見ても価値を有している。これらすべては、あなたとわれわれ、すなわち今日のウズベク・ムスリムにとって名誉であると同時に、大きな責任を負わせるものでもある。われわれは、聖なるクルアーンのウズベク語による翻訳書と解釈書について知見を得るとき、われらがシャイフ・ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフ——彼に神の慈悲あれ——の御高著『新月の解釈書』が、これらの書物を百花にたとえるならばその花冠、また美しき首飾りにたとえるならばその珠玉たることを目のあたりにする。われらの国民が解釈書と言えば、まっさきにこの著作を連想するようになったのも故なしとはせず、同書へのかかる注目は至極当然のものである。とりわけ、それがわれわれの生きる現代においてもすこぶる時宜にかなう、十全に書き上げられていることは瞠目に値する。

強調されてしかるべきは、聖なるクルアーンを他言語に翻訳し、解釈することに対する見方が時代によって変化してもきたことである。当初は全般的な許可が与えられたのではあったが、のちにこうした許可の必要性がそれほどなくなったことと一連の宗教上の目的ゆえに、クルアーンの意味を他言語に翻訳することに対して多くの学者が自分の意見を積極的に述べることはなかった。しかし、それから数世紀を経ると、ムスリムのウンマ〔信仰共同体〕がアラビア語から遠ざかってしまったことなどさまざまな理由から、宗教的な知識を学ぼうとする気概やそのための機会がまれになっていったことを見てとった学者たちは、聖なるクルアーンを他言語に翻訳し、解釈することに格段の関心を向けた。彼らはまた、これが宗教上の要件にして義務行為であることを強調して、特別なファトワーを発した。とりわけ他宗教の信者や無宗教者たちによるクルアーンの意味の翻訳を出版する活動が加速すると、ウラマーたちはクルアーンの本来の姿を保持し、かつその意味を人々に純粋なかたちで伝えるために、この営為を自分たち、ムスリムのウラマーが掌握すべきことを強調した。今日、聖なるクルアーンの意味のウズベク語による翻訳と解釈は、いくつかの点で重要局面を迎えている。

1) ムスリムたちはみずからの信仰の源泉に通じる必要がある。これは宗教的・社会的な

⁽⁵⁹⁾ 同書は本文中の前段で述べられた『チャルヒーの解釈書』のハマダーニー版テュルク語訳（その写本はウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所に稀覯本として収蔵）を取りあげ、そのテキストのキリル文字翻刻を提示するとともに、これに史料学的見地から詳細な解説と注釈、および索引を付した佳編である [Usmonov va Saidova 2012]。

要件である。聖なるクルアーンは、至高なるアッラーが人類のために送ったメッセージであり、神の便りである。それを読み、理解することはすべてのムスリムの負うべき絶対的義務である。その意味を直接、すなわち神僕〔たる人間〕たちの言葉が混じり込んでいない状態で読むこともまた、独自の利益を有する。難解な箇所については、ウズベク語の解釈書がひじょうに役立つのである。法学やその他の学問をとおして聖なるクルアーンの規定を学ぶことはそれとして1つのやり方であるが、元々呼びかけとして発せられた神の言葉そのものを知ることが格別な光輝と喜悅、そして知識たることは明らかである。というのは、原典はやはり原典であり、その価値はけっして減じないからである。

時折、「クルアーンはアッラーの言葉である。それを誰もが理解できるわけではない。われわれはムジュタヒド〔自身の判断にしたがってイスラーム法上の見解を示す資格・権能のある法学者〕を介してのみクルアーンを理解できる」という趣旨の見解にも遭遇することがある。この言説もある意味で妥当ではあるのだが、一般原則ではない。なぜなら、クルアーンの大部分は確定しており、つまりは意味が明白なアーヤから構成されているからである。概して、クルアーンは多くの人が理解できないような不可解で抽象的なものではない。至高なるアッラーはいくつかのアーヤでクルアーンを、「それは平明にして明白な書物である」と述べたまう。月章では数度にわたり、「たしかにわれらはクルアーンを想起する者たちのために易しいものとした」とおっしゃる。クルアーンは万人、すなわち学者と無知な者に呼びかけ、英知を授ける。1人1人の人間はその呼びかけを独自に受けとめる。一部のアーヤを理解したり、そこから法規定を引いたりするさい、学者たちの言葉を傾聴することは別の問題であり、それは〔クルアーンの翻訳書や解釈書の〕読み手の水準によってさまざまな経過をたどる。

2) 聖なるクルアーンの名を聞いたならば、ムスリムたる者ただちにみずからを正し、心底から敬意を示すのは当然である。したがって、ムスリムに影響をおよぼそうとする者たちは、かならずこの方面からやってくる。今日の過激化し、道を誤った集団や急進派の主要な武器の1つもまた、聖なるクルアーンのアーヤをみずからの見解にしたがって解釈することにあることは公然の事実である。これを未然に防ぎ、また処置するための唯一の効果的な道は、スンナ派信仰にしたがって本来の姿どおりのクルアーンの解釈を提供することである。これは古くから経験済みの正当な方法である。たとえば、イマーム・マートウリーディー⁽⁶⁰⁾とイマーム・ナサフィー⁽⁶¹⁾らはみずからの解釈書をまさにこの目的に沿わせた。

同様に、ハナフィー派に対するさまざまな譴責に答え、かつ特定の法学派への不帰属を予防するためにも、ハナフィー派〔の立場〕に則ってなされた、法規定たるアーヤの解釈がひじょ

⁽⁶⁰⁾ サマルカンド生まれの神学者（873以前～944年頃）。スンナ派2大神学派の1つであるマートウリーディー派の創始者である。

⁽⁶¹⁾ ナサフ（カルシ）生まれのタフスィール学者、ハナフィー派法学者ならびに神学者（?～1310年）。

うに重要である⁽⁶²⁾。通常、宗教的な主題においては、最初に与えられた情報が人の心に特別な価値を有し、意識のなかで確固として定着してしまう⁽⁶³⁾。その情報が正しければまさしく目的にかなうが、正しくなければそれを修正することはきわめて困難である。とりわけ、みずからその考え方を正当であると固く信じて、何らかの活動をおこなったあとでは、その不当性を克服することは至難の業であり、人の死より深刻なものとみなされさえしかねない。したがって、はじめに与えられる情報が混じり気のないものたることを保証することがめざされねばならない。

3) クルアーンを一律の方法で、学問的かつ穏健な立場から翻訳し、解釈することは、社会平和とムスリムの結束、またその諸目的の統一に寄与するだろう。一部の人々は、聖なるクルアーンと高貴なるハディースの翻訳書がさまざまな集団にとって武器になる、と考える。本来はと言えば、翻訳書は集団間の諍いとは関係がない。なぜなら、こうした翻訳書がなかった場所と時代においても、そのような党派はあったし、今もあるからである。さらに、これまで出現してきたムウタズィラ派やハワーリジュ派、シーア派、また他の何十もの集団や今日の党派は、いかなる〔クルアーンとハディースの〕翻訳書も使わずして、むしろ原テキストから自分の見解にしたがって意味を抽出したすえに、道を誤ったのである。それゆえ、翻訳と解釈が一律の方法で提供されることは、集団間の諍いではなく、それとは逆に団結や見解の調和を原因づけるものと断言できる。

クルアーンとハディースが翻訳されると、人々はみずから勝手に法規定を引きだすという疑念は、恐慌以外の何ものでもない。なぜなら、一般読者がアーヤから法規定を引きだすことなどけっしてできないからである。また彼らは、アーヤとハディースをかりうじて理解するのがせいぜいであって、そこから法規定を引きだすなどありうべくもない。さらに、今日ではアーヤとハディースの翻訳や注釈にさいしては、このことをめぐる諸法学派の見解、とりわけわれらの祖国において法運用を担ってきたハナフィー派の結論が提示されている。そもそも、このような相対立する箇所は数えるほどであり、それらもしかるべきところで注記

⁽⁶²⁾ このようにハナフィー派をとくに重視する姿勢は、ウズベキスタンひいては中央アジアで同派が果たしてきた歴史的役割にも立脚すると言えるだろう。この点にかかわる研究として、たとえば、9～15世紀頃の中央アジアにおけるハナフィー法学派の発展の概要は、ムーミノフの研究書〔Muminov 2015〕からこれをうかがい知ることができる。

⁽⁶³⁾ こうした記述の背景には、著者のハサンハン・カーリーがイスラーム諸学において師と仰ぐムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフの思想の影響を端的に見てとることができる。ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフとは、彼が生前に精神的な師として公言してやまなかったシリアのハナフィー派法学者ラマダーン・ブーティーから大きな思想的影響を受けている。彼の監修のもと、2013年にラマダーン・ブーティーのウズベク語による翻訳書『法学派に帰属しないことはイスラーム法を脅かす最も危険なビデオである』〔Ramazon Butiy 2013〕が刊行されたことは、その1つの証左である。この書籍は2018年にも再版された。このことはまた、サラフィー主義に批判的で体制順応的なラマダーン・ブーティーの思想がウズベキスタン政府によっても肯定的に受け入れられていることを物語るものであるだろう。

されている。このことはそれ自体としてハナフィー派の強化にも役立っている。そのため、上記の危惧が入り込む余地はまったくない。それと同時に、反対したがる人間は、粗を見つけては反対しつづける。しかし、そのような1人や2人のろくでもない徒輩のために、すべての人にクルアーンとハディースを禁ずることなどできない。幸福な時代においてすら、そのような者たちは、皆無ではなかった。しかし、彼らのために他の人々に学問を禁じるようなことを誰もおこなわなかった。

至高なるアッラーよ、御自身の言葉である聖なるクルアーンにわれら国民から生まれでた愛すべき者たちによってなされた務めを御自身の宮廷で受け入れ、彼らのうちの逝去した者たちに慈悲をたれ、現世に生き残る者たちに平安を与えたまえ。われわれ若き世代がかの偉人たちの歩んだ道から外れることなく、彼らの豊かな遺産を正しく、有効に活用していけるよう定めたまえ。

付記：本稿は、平成30年度科学研究費補助金・若手研究18K12604の助成を受けておこなった研究会での成果の一部である。また訳注の一部は、平成30年度科学研究費補助金・基盤研究(C)16K03073による研究成果を含む。

参考文献

日本語

井筒俊彦訳 1957『コーラン(上)』(岩波文庫)、東京：岩波書店。

大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編 2002『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店。

小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編 2005『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社。

ウズベク語

Barzanjiy, Sayyid Ja'far ibn Hasan (Hasanxon Yahyo Abdulmajid [tarjima va sharh muallifi]). 2015. *Mavlid*, Toshkent: «HILOL-NASHR» nashriyoti. [『マウリド』]

Mahmudov, Qozoqboy (tuzuvchi). 2000. *Turkiy tafsir (XII-XIII asr)*, Toshkent: Toshkent davlat sharqshunoslik instituti. [『テュルク語解釈書(12～13世紀)』]

Mansur, Abdulaziz (tahriri ostida). 2017. *Islom. Entsiklopediya*, Toshkent: «O'zbekiston milliy entsiklopediyasi» Davlat ilmiy nashriyoti. [『イスラーム百科事典』]

Ramazon Butiy, Muhammad Said (Muhammad Sodiq Muhammad Yusuf umumiy tahriri ostida).

2013. *Mazhabsizlik Islom shariatiga tahdid soluvchi eng xatarli bid'atdir*, Toshkent: «HILOL-NASHR» nashriyoti. [『法学派に帰属しないことはイスラーム法を脅かす最も危険なビドアである』]

Usmonov, Ibrohimjon va Gulnoza Saidova (so'zboshi, tabdil, izoh va mavzu ko'rsatkichlari mualliflari). 2012. *Movarovunnahr turkiy tafsirlari tarixidan (Tarjima-i tafsir-i Charxiy)*, Toshkent: «Movarovunnahr» nashriyoti. [『マーワラーアンナフルのテュルク語解釈書抄史(チャルヒーの解釈書の翻訳)』]

アラビア語・テュルク語

al-Ṭarāzī al-Madanī, al-Sayyid Maḥmūd b. al-Sayyid Naḍīr (mutarjim wa muḥašṣī). 1975. *Qur 'ān karīm*, mutarjam wa muḥašṣā bi-l-luḡat al-turkistāniyya, al-ṭab'at al-rābi'a, Karācī [: n. p.] (tawzī': Maktaba dār al-'īmān (al-Madīnat al-munawwara)), 1395 H. Q. [『聖なるクルアーン』]

英語

McChesney, R. D. 1998. "Central Asia's Place in the Middle East: Some Historical Considerations," D. Menashri, ed., *Central Asia Meets the Middle East*, London: Frank Cass, pp. 25-51.

Olcott, Martha Brill. 2012. *In the Whirlwind of Jihad*, Washington DC, Moscow, Beijing, Beirut and Brussels: Carnegie Endowment. [Kindle版]

ロシア語

Borovkov, A. K. 1958. "Ocherki istorii uzbekskogo iazyka, III (Leksika sredneaziatskogo tafsira XII-XIII vv.)," *Uchenye zapiski Instituta vostokovedeniia*, t. XVI, str. 138–219. [『ウズベク語史概説3(12～13世紀中央アジアの解釈書の語彙)』『東洋学研究所紀要』]

———. 1963. *Leksika sredneaziatskogo tefsira XII-XIII vv.*, Moskva: Izdatel'stvo vostochnoi literatury. [『12～13世紀中央アジアの解釈書の語彙』]

Dmitrieva, L. V. 2002. *Katalog tiurkskikh rukopisei Instituta vostokovedeniia Rossiiskoi akademii nauk*, Moskva: Izdatel'skaia firma «Vostochnaia literatura» RAN. [『ロシア科学アカデミー東洋学研究所テュルク語写本カタログ』]

Muminov, A. K. 2015. *Khanafitskii mazhab v istorii Tsentral'noi Azii*, Almaty: Qazaq entsiklopediyasi. [『中央アジア史におけるハナフィー法学派』]

Validov, A. 1916. "O sobraniikh rukopisei v Bukharskom khanstve," *Zapiski Vostochnogo otdeleniia Imperatorskogo Russkogo arkeologicheskogo obshchestva*, t. XXIII, vyp. III-IV, str. 245–262. [『ブハラ・ハン国における写本コレクションについて』『帝立ロシア考古学協会東洋部門紀要』]

(ウズベキスタン・ムスリム宗務局*)

(東京外国語大学世界言語社会教育センター**)

(中部大学人文学部***)

イチャン・カラ水利抄史

フダーイベルガノフ・カーミルジャーヌ*

解説・編訳注：木村 暁**

編訳者解説

ここに訳出⁽¹⁾するのは、カーミルジャーヌ・フダーイベルガノフ著「イチャン・カラ水利抄史」⁽²⁾の全文である。この論稿（初稿と補稿とからなる⁽³⁾；以下、あわせて論稿と呼ぶ）の原文は、キリル文字表記のウズベク語で記されている。まずは著者フダーイベルガノフ氏の略歴と、この論稿が執筆された経緯について述べておこう。

フダーイベルガノフ氏は1951年、ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国ホラズム州ヒヴァ市に生まれた。氏は72年に、現在の職場であるイチャン・カラ博物館での勤務をはじめが、そのかわり73年にウルゲンチ国立教育大学に入学して歴史学部の通信教育を受け、78年に同学を卒業した。91年のウズベキスタン共和国独立を経て、99

(1) 以下、凡例を箇条書きする。①日本語による解説・編訳注にあたり、現代ウズベク語の表記を示す場合には、ウズベキスタン共和国における現行のラテン文字正書法にしたがって（キリル文字からは適宜翻字しつつ）これをおこなう。②ウズベク語に無数に含まれるアラビア語／ペルシア語起源の語彙やテュルク語（もしくは古ウズベク語）本来の語彙については、それらが長らくアラビア文字で書きならわされてきた歴史的伝統にもかんがみ、構成音素の区別や原語の同定が必要とみとめられる場合にかぎり、訳者独自の方式でそのラテン文字による翻字（大文字）ないし転写（イタリック体）を示す。③ロシア語の表記は、LC（米国議会図書館）方式によるキリル文字からラテン文字への翻字法にしたがってこれを示す。④訳者が翻訳にあたって補った文や語句は〔 〕内に示す。⑤論稿のウズベク語原文には小見出し（章節の題名）はいっさいないが、論旨をわかりやすくする便宜上、訳者がこれを補った。小見出しには〔 〕は付していない。⑥注釈は、原著者によるものは〈原注〉として示す（ただし原注は1つのみ）。それ以外の注釈はすべて訳者によるものである（論稿のウズベク語原文には9つの脚注が付されているが、1つを除いてすべて利用史料の出典を表示するものであり、本訳稿においてそれらは〔 〕内に略記したうえで本文中に組み込んである）。⑦原著者の利用文献のうち書誌情報が明示されているのは、参考文献中の史料（計8点）がそのすべてである。参考文献中の研究文献は、編訳作業にあたって訳者が参照したものである。⑧稿末の補遺における図版は訳者がこれを付した（写真はすべて2018年8月に訳者が撮影したもの）。なお、初稿には著者によって3点の図版が付されていたが、画質が良好でないなどいくつか問題がみとめられたため、著者の了承を得たうえで本稿への収録は見合わせたことをことわっておく。

(2) Komiljon Xudoyberganov, “Ichan-qal’aning suvdan foydalanishi tarixidan.”

(3) 2018年7月10日に初稿が、また、それから2ヶ月あまりを経た同年9月19日に、初稿本文末尾付近の2箇所に挿入されるべき追加の文章（5＋3センテンス）を収めた補稿が著者から訳者の手元に届けられた。

年からは学位取得を期して同国科学アカデミー歴史学研究所（在タシュケント）にも籍を置きながら研究に従事する。しかし、遠隔と交通不便のため、しばらくしてのち同科学アカデミーのカラカルバクスタン支部（在ヌクス）に転籍し、2004年に同地の歴史学・考古学・民族誌学研究所において歴史学準博士（tarix fanlari nomzodi）の学位を取得した⁽⁴⁾。この間もヒヴァに本拠を置きつつイチャン・カラ博物館で研究員として勤務をつづけ、ホラズム地方やヒヴァ・ハン国の歴史に関するいくつかの単著をおもにウズベク語で公刊してきた[Xudoyberganov 1996; 2008; 2012; 2018]。

そうしたなか、博物館の研究部門のトップにあたる研究秘書（ilmiy kotib）を年来務めてきた氏は、ある事情による館長職の空席にともない17年夏季から館長代行に任じられた。しかし、行政職特有の激務から研究遂行が困難になったこともあり、申し入れた辞意が容れられて同職を解かれ、18年8月に新設ポジションである筆頭専門家（bosh mutaxassis）として指導的立場のまま研究職に復帰し、その後研究秘書に再任されて現在にいたっている。氏は、その業績（論著）からすると、一言でいえば歴史研究者あるいは郷土史家であり、とくにヒヴァ・ハン国史を専門とし、史料的にはアラビア文字で記された文書、稿本、碑文⁽⁵⁾の取り扱いを得意とする。また、氏は写真家であるとともに、無線電信技師や猟師の免許も有する。そして繰り返すまでもないが、職業的にみれば、40年以上の勤務経験をもつ大ベテランの博物館員でもある。氏はイチャン・カラ在住である。

フダーイベルガノフ氏は、堀川徹氏（現京都外国語大学特別研究員；同学元教授）のイニシアチブによって立ち上げられた中央アジア古文書研究プロジェクトの共同研究者として、長年にわたって重要な役割をはたしてきた。2003年11月21日～12月5日には科研費研究課題「中央アジアにおけるムスリム・コミュニティの成立と変容に関する歴史学的研究」（研究代表者：堀川徹）の招聘事業の一環で滞日し、京都大学にて開催の研究会で「ヒヴァ市イチャン・カラ博物館古文書収集プロジェクトにおける諸問題」と題する研究報告⁽⁶⁾を、また、東京の東洋文庫特別講演会では「ウズベキスタン共和国

(4) 学位論文の題目は以下のとおり：「パフラヴァーン・マフムード記念遺構のヒヴァ・ハン史研究における役割（16～20世紀初頭）」（参考：[Khudaiberganov 2004]）。これは13～14世紀に生きた詩人・力士・職人で、死後にはヒヴァの守護聖者ともされたパフラヴァーン・マフムードの墓廟に残る碑銘に関する研究である。この聖者に関しては以下の共著も公刊されている：[Rahimov va Xudoyberganov 1999; Abu Bakr xo'ja o'g'li va Xudoyberganov 2009]。

(5) 氏は、近刊の碑銘史料集（パフラヴァーン・マフムード廟をはじめ、イチャン・カラ内の主要な建築遺構に残されたアラビア文字碑銘の写真と翻刻・翻訳テキストを豊富に収載）の編纂に碑文の読解・解説者としてたずさわっている[Bobojonov va Rahimov 2015]。

(6) この報告については、ロシア語からの通訳を務めた磯貝健一氏の作成になる日本語報告要旨がある[磯貝

ヒヴァ市イチャン・カラ博物館の古文書フォンドについて」と題する講演をそれぞれロシア語でおこなった。堀川氏が長年指揮してきた古文書研究プロジェクトは、現在では磯貝健一氏（京都大学教授）にリーダー役が引き継がれており、フダーイベルガノフ氏は引き続きそのウズベキスタン側における主要な研究協力者として、ホラズム地方における民間所蔵文書（イスラーム法廷文書や君主の勅令など）の収集とイチャン・カラ博物館におけるその整理作業に精力的に取り組んでいる。

さて、まさに上記の堀川氏とフダーイベルガノフ氏の多年にわたる共同研究に支えられるかたちで、2016年度から南博史氏（京都外国語大学教授）による博物館学に立脚した新プロジェクトが始動した。これは翌17年度からは南氏を研究代表者とする科研費研究課題「ウズベキスタン世界遺産ヒヴァの持続可能な発展・開発のための実践的博物館活動の研究」（挑戦的研究（萌芽）：2017～2018年度）のもとで実施され、フダーイベルガノフ氏が現地側の研究協力者を務め、堀川氏と訳者も研究分担者としてこれにたずさわってきた。同プロジェクトの目的は研究課題名のなかに端的に示されているが、具体的な作業としては、イチャン・カラ博物館の建築遺構や展示物の保存状況の観察調査、および温湿度計の定点設置・計測を通じた継続的な環境条件分析などをおこなっている。目視によるモニタリングのなかでは、イチャン・カラの城壁や建築遺構、住宅の壁面の一部に地下方向からの水湿分浸潤（と場所によってはそれに随伴する乾燥後の塩結晶表出）の形跡が観察された。これは現地調査（2018年3月および同年8月）に同行した研究協力者の松井敏也氏（筑波大学教授；専門は文化財保存科学・博物館学）も指摘するとおり、イチャン・カラの地下排水システムにおける何らかの不具合を示唆する可能性がある。

一方、フダーイベルガノフ氏によれば、イチャン・カラでは近年とみに地下水位の低下（上で述べたこととは一見相矛盾するようではあるが）が着実に進行するとともに、慢性的な水不足とこれに連動しての住民による地下水の汲み上げが問題化しつつあるという。イチャン・カラにおけるこれら排水と取水をめぐる事案は、目にふれにくい地下水の態様にかかわるだけにその実相はあきらかではない。しかしこれは、文化遺産としての歴史的建造物のみならず住民の生活や健康にもいずれ深刻な影響をおよぼしかねず、実態究明が急がれる喫緊の問題である。ならば未来を見通す意味でも、関係史資料の読解分析や考古学的調査、それと同時にきめこまかな現状観察と聞き取りを通じ

2004]。これはウェブ上にも掲載されている：<http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurasia/newsletter/05.pdf>、閲覧日：2019年1月31日。なお、この研究報告の内容は、のちに増補改訂されたうえで論文として公表された [Khudaiberganov 2006]。

た、過去と現在における水利システムの通時的・多角的把握の試みが不可欠の作業となるだろう。観光学的見地からすれば、同地で今まさに期待を寄せられている観光業の発展が水利用のさらなる増大をうながしうることも注視せねばなるまい。また、環境・資源論的にみれば、これはけっしてローカルな水問題にとどまらない。地下水位の低下傾向がアラル海の死滅と連関する現象であろうこともまた、容易に想像がつくからである。

南氏をリーダーとするわれわれ調査隊はこうした問題意識からフダーイベルガノフ氏と密な意見交換を重ね、18年3月の調査の折に南氏からフダーイベルガノフ氏に水問題に関する論稿の執筆依頼がなされた。それに応じてまず書かれたのが初稿である。さらに、同年8月の調査時に著者と日本側メンバーとの協議の結果、若干の加筆の必要性が確認され、これを受けて補稿が書き足された。このように論稿「イチャン・カラ水利抄史」は、京都外国語大学とイチャン・カラ博物館の長年にわたる研究協力の基盤のうえに、地域の直面する水問題という歴史的・現代的課題への学際的な研究関心が共有されたことを契機として、しかるべき書き手によって執筆されることになったといえる。

それでは次いで、歴史都市および博物館としてのイチャン・カラについて、いくらか補足しておきたい。論稿ではヒヴァが3000年の歴史をもつことが繰り返し述べられるが、考古学資料にしたがった通説によれば、その都市としての起こりは前5世紀のことであり[Abdurasulov va Karimov 2005: 412]、1997年に同市の2500周年が記念されたこともこの説におおむね沿っている。初期に築かれた城郭が現在のイチャン・カラへと発展したと考えられている。

イチャン・カラの「イチャン(*ichan/ičän*)」とは、テュルク語のホラズム方言で用いられてきた語であり、現代ウズベク語の“*ichkari*”とおなじく「内部」や「内側」を意味する[Abdullayev 1961: 48]。もう一方の「カラ」の語は、現代ウズベク語では“*qal'a*”とつづられる。この語は元来アラビア語の“*qal'a*”からの借用語であるが、アラビア語のそれが日本語で通例「カルア」と表記されるように、本来ならば「イチャン・カルア」という表記が原語の発音(第2母音“*a*”は現代ウズベク語でも子音“*l*”とは分離して発音される)にも近く、より適切といえる。しかし、アラビア語の声門閉鎖子音アインの音を捨象したロシア語表記“*Ichan-Kala*”が普及した影響のもとで「イチャン・カラ」が日本語表記としてすでに慣用化していることから、ここでは「イチャン・カラ」の表記で統一する。“*qal'a/qal'a*”の語は「城塞」を意味するから、イチャン・カラは「内城」と訳すことが可能である。しかし、なぜ「内」城なのだろうか。

コングラト朝(1804～1920年)時代のヒヴァ・ハン国ではイチャン・カラ内で活発な

建設事業がおこなわれたが、並行してその城壁外でも居住域が徐々に拡大し、土地の開発・整備が進んでいた。こうした状況下で君主アッラークリ・ハン(位1825～42年)は1842年、イチャン・カラはいうにおよばず、周辺の居住域をもすっぽりと囲い込む大規模な城壁⁽⁷⁾を建造した。こうして新規に築かれた外側の城壁の内部もまた「城塞(qal'a/qal'a)」と呼ばれることになるが、混同を避ける必要から、旧来の城塞が「イチャン・カラ」すなわち「内城」の名を、これに対して新たな城塞(イチャン・カラ部分を除く)が「ディシャン・カラ」すなわち「外城」の名を獲得した[Bregel 2003: 84–85; Xudoyberganov 2012: 14]。論稿のなかでヒヴァが「二重の城壁に取り囲まれた都市」と述べられる所以である。なお、「ディシャン(deshan~dishan/dishan)」はホラズム方言におけるイチャンの対概念であり、「外部」や「外側」を意味する語である[Abdullayev 1961: 37–38]。

さて、博物館としてのイチャン・カラに目を向けよう。比較的最近のことであるが、2018年12月19日付の「物質文化遺産諸施設の保護分野における活動を抜本的に拡充する諸施策について」のウズベキスタン共和国大統領決定⁽⁸⁾の第9項により、同博物館の正式名称は、従来の「ヒヴァ・イチャン・カラ国立保護区博物館」(Xiva «Ichan qal'a» davlat muzey-qo'riqxonasi)⁽⁹⁾から「ヒヴァ」を削除したうえで、「イチャン・カラ国立保護区博物館」(«Ichan qal'a» davlat muzey-qo'riqxonasi)と改称されることになった。ここには名称の簡素化により、世界遺産としての認知度向上や実務(とくに文書業務)の効率化をはかる狙いがあるとみられる。ちなみに、おなじ大統領決定の第10項では、「その歴史文化的価値にかんがみてユネスコの世界遺産に登録された〔ウズベキスタン〕共和国内の諸区域は、特別に保護されるべき歴史文化区域とみなされる。また、そこで計画された建設・整備事業プロジェクトは、該局〔＝ウズベキスタン共和国文化省文化遺産局〕

(7) この新城壁は東西に約2.5km、南北に約1.5kmにわたって延びていたが、これが取り囲む空間は方形ではなかった。外郭はかなりの部分において運河を外濠としつつ、ところどころ湾曲をともなうややいびつな形をしていた。これに対して、イチャン・カラはおおよそ東西400m、南北650mの長方形(総面積約26ヘクタール)に近い形状である。

(8) <http://uza.uz/uz/documents/moddiy-madaniy-meros-obektlarini-mu-ofaza-ilish-so-asidagi-f-19-12-2018>, 閲覧日: 2019年1月31日。

(9) これが従来の正式名称ではあるが、ソ連時代の1969年いらい、ヒヴァ・イチャン・カラ歴史建築保護区博物館(Xiva «Ichan qal'a» tarixiy-me'morlik [/me'moriy] muzey-qo'riqxonasi)という名称も使用されてきた[Xudoyberganov 2005: 415]。ただし、「歴史建築」の語はしばしば省かれた。また、「国立」(davlat)の語も付されたり付されなかったりする。なお、ウズベク語の“muzey-qo'riqxona”はロシア語の“muzei-zapovednik”を直訳したものである。同語は『研究社露和辞典』によれば、「特別保護区博物館、野外文化財博物館(敷地内にある建築物あるいは歴史的記念物が展示されている博物館)」の意である[東郷ほか1988: 1041]。本稿では、これにあてる訳語は「保護区博物館」で統一している。

ならびにユネスコの世界遺産センターとの合意をかならず経たうえて実施されるものとする」と規定されている。この条項は、ユネスコと緊密に連携しながら世界遺産をルールにのっとって保護・管理していこうとする現ミルズィヤーエフ政権の公式的立場を、あらためて確認し強調するものといえる⁽¹⁰⁾。この大統領決定が今後どのように運用されていくのかは、上記南プロジェクトの目標（世界遺産イチャン・カラの住民参加のもとでの持続的発展）に照らすならば、なおのこと注目に値するといえよう。

フダーイベルガノフ氏はつい先頃再来日し、国際交流基金と東京外国語大学の共催になる国際シンポジウム（2019年1月13日；於東京外国語大学）と公開セミナー（同年1月15日；於都立中央図書館）でウズベク語による研究報告⁽¹¹⁾をおこなった⁽¹²⁾。このうち国際シンポジウムの報告は「大空の下なる⁽¹³⁾ 博物館都市ヒヴァ」と題され、そのなかで氏は、イチャン・カラにおける地下水位低下と建造物保全の問題も指摘した。この報告に対してはディスカッサントとして南氏がコメントをおこない、「総合政策科学研究によるウズベキスタン世界遺産ヒヴァと住民の『水』問題解決への挑戦」という新たな研究課題に取り組むことの意義が、フダーイベルガノフ氏の指摘に呼応しつつ力説された。以下の論稿は、そうした取り組みを実地に前進させていこうとするとき、けだし一つの道しるべとなるにちがいない⁽¹⁴⁾。

⁽¹⁰⁾ ウズベキスタン国外メディアの一部報道では、2018年11月下旬におこなわれたミルズィヤーエフ大統領のヒヴァ訪問の直後、イチャン・カラ内の住民を移住させたうえで住宅跡地に観光施設を建設する計画があるかのような憶測が大統領の発言の引用をともなって広まり、内外で物議を醸していると報じられたが、そうした計画の存在は当局者によってただちに否定された。当該大統領決定は、その騒動からひと月とおかずにも公布された。

⁽¹¹⁾ いずれの報告においても訳者が逐次通訳を務めた。なお、公開セミナーにおける「ヒヴァ」と題される報告は、フダーイベルガノフ氏自身が制作・監修した約20分の映画を上映しつつ映像を解説するかたちでおこなわれた。この映画には、中央アジア現地人初の映画カメラマンであるフダーイベルガン・デーヴァーノフ（Xudoybergan Devonov; 1878～1940年）の撮影になる白黒映画の1シーン（運河における大規模な浚渫の模様）も収められていたが、それはヒヴァの水利史を考えるうえでも興味深く、たいへん印象的であった。

⁽¹²⁾ http://www.tufs.ac.jp/event/2018/181128_1.html, 閲覧日：2019年1月31日。

⁽¹³⁾ この「大空の下なる」という修飾句は、ウズベク語の“ochiq osmon ostidagi”という言い回しを原義に近いかたちで訳出したものである。これはもともとロシア語の“pod otkrytym nebom”（「開けた空の下（の／に）」の意）という定型句の直訳に由来しており、ウズベク語としては一種の造語的表現といえる。日本語には「野外」とも訳しうる。

⁽¹⁴⁾ この論稿はイチャン・カラを対象をしぼったものであるが、ホラズム地方の歴史的な水利問題に関する既刊の研究書（たとえば[Guliamov 1957; 塩谷 2014]）とあわせ読むことで、主題への理解をさらに深めることができるだろう。

はじめに——博物館都市ヒヴァ

ヒヴァは中央アジア最古の城塞の一つであり、世界文明に多大の貢献をなした都市である。今日にいたるまで保存されてきたその建築遺構は、この都市に暮らした住民の生活、文化、芸術がいかほどに発展したのかを示す証左となっている。3000年前に建設されたこの都市が沙漠と荒野のただなかで遂げることになる開花繁栄が、この地の人々の学知と創造性、そして郷土愛に原因していたことは疑いをいれない。

ヒヴァ市がかかえる130以上の歴史的建築遺構⁽¹⁵⁾のうち54件はイチャン・カラ、すなわち旧市街に位置している。この古城塞は1969年、「大空の下なる」歴史建築保護区博物館の呼称で知られるようになった。1990年には中央アジアではじめてユネスコの世界文化遺産に登録された。1997年には、この古都の2500周年記念行事が世界規模で催された。

1. ヒヴァの歴史的発展の概略

ヒヴァ市の建設について、フダーイベルディ・コシムハンマドオグルの著作⁽¹⁶⁾には興味深い情報がみえる。「ラムルは、サーム・イブン・ヌーフによって父親⁽¹⁷⁾の方舟に似せて建設された。現在それはヒーヴァク⁽¹⁸⁾の名で有名である。旧称はラムル、すなわち砂がちの場所(砂地)だったらしい⁽¹⁹⁾。サームはある日、狩りを終えると、とある高台の上で横になり、夢をみる。その夢で彼は、自身のまわりに300の燭火が燃えているのを目にする。目

(15) ヒヴァの都市のなりたちとその主要な歴史的建築遺構については、歴史・考古学者ヤフヤー・グラモフ(Yahyo G'ulomov; 1908～77年)の先駆的研究[Guliamov 1941]がある。本訳稿の作成過程において、編訳者は同書の貴重なコピーを日本中央アジア学会編集委員会から提供いただいた。記して謝意を表する。なお、フダーイベルガノフ氏は自著『ヒヴァ：世界最古の城塞』の執筆にあたり、グラモフの同書を参考文献として利用している[Xudoyberganov 2012: 339–340]。

(16) この歴史書については、たとえば以下を参照：[O'rinboyev va Abduhalimov 2006: 220–223]。

(17) この父親とはヌーフ(Nūh)すなわちノアのこと。サーム・イブン・ヌーフ(Sām b. Nūh)はアラビア語による人名であり、「ヌーフの息子サーム」を意味する。

(18) アラビア文字文献において、ヒヴァは“ḤYVQ (Ḥīvaq)”ないし“ḤYVH (Ḥīva)”のかたちで現れる。

(19) 「ラムル」の語はウズベク語原文では“Ramul”と書かれている。これは語源的には、アラビア語で「砂」を意味する“raml”の語の末尾を構成する連続する2子音“m”と“l”のあいだに母音“u”が介入した形、つまりテュルク語の発音規則(とくに語末における子音の連続を嫌った母音の介入)に影響されたその転訛形として理解できる。おなじウズベク語原文中にみえる“chagazorlik”の語は現代ウズベク語の辞書には見いだせないが、チャガタイ語ないしテュルク語の単語“ČAKA/ČAKH/ČKH (čākā)”には「砂(pesok)」の意味がある[Budagov 1869: 461; Radlov 1905: 1947]。これがウズベク語ホラズム方言における“čāyā”(「砂(qum)」を意味し、“čāgā”という異形もある)の語に対応することは疑いない[Abdullayev 1961: 96]。すなわちこの“čāgā”に「～の多い場所」を意味するペルシア語起源の接辞“-zār”が接続し、かつそれが接辞“-lik/-liq”をとまって抽象名詞化した“čāgāzārliq”が、ホラズム方言において「砂がちの場所」をほぼ意味するようになったものところでは解釈した。本文後段でも“qum”と“chaga”とが同義に扱われていることから、この解釈に大過はなからう。

が覚めてみてみると、燭火は跡形もなく、まわりは砂地である。彼はみた夢に気をよくし、この場所に印をつけておき、再訪時にここに城塞の壁を建設させる。城塞の西辺に井戸を一つ掘らせ、水を湧き出させる。ヒーヴァクをこれに関係づける者たちもいる。要するに、言われるところによれば、ヒーヴァクは何度も荒廃し、都度あらためて復旧されたとのことである」[*Dili G'aroyib*: f. 56]。

ヒヴァの建築遺構は、基本的に4つの歴史的時期に属するものと推定される。都市の城壁と、拝火神殿のあった場所に建設されたものと推測される10世紀の史跡たる集会モスクとが第1期に属するとするならば、第2期すなわちチングス・カンによる征服以降の時期にあたる13～15世紀の史跡としては、ウチュ・アウリヤーの墓⁽²⁰⁾やサイド・アラウッディーンの墓⁽²¹⁾が残存している。ヒヴァの建築物の発展にとっての第3期は、16～18世紀に相当する。この時代には国の経済・政治の中心の南遷⁽²²⁾、およびヒヴァ市の急速な成長が観察される。第4期は18世紀の第4四半期からはじまる。この時代にハン国は深刻な衰退を脱していた。ムハンマド・アミン・イナク⁽²³⁾が都市の新規建設の先鞭をつけると、彼の子孫はこの事業を間断なく継続した。とくに1825年に即位したアッラク・リ・ハンは国の繁栄と整備、わけでも都市建設の分野で多くの事業を実施した。ムハンマド・ラヒーム・ハン2世(位1864～1910年)とその息子イスファンディヤール・ハン(位1910～18年)の時代に、ホラズムの建築は古来の伝統を継続し、多くの建造物が建てられた。大宰相イスラーム・ホージャによって建造の開始されたマドラサとミナレットが完成にいたった。新ヒーヴァクと呼ばれるようになった都市北部の新街区に郵便電信局と50床の病院、さらにはヌールラー・バイ庭園⁽²⁴⁾におけるハンの欧風の特別謁見場が建設されたことは、まちの着実な拡充の様

⁽²⁰⁾ “*Üç Avliyā*”は「3人の聖者」の意。墓廟はイチャン・カラ内の東部に所在し、ここはバーキー(*Bāqī*)、マクスード(*Maqsūd*)、ラティーフ(*Latīf*)という名の3人の聖者の被葬地とされている。廟の創建は著者の指摘する時期よりも遅い1549年だとする説があり、1821年に改修されたこともわかっている[Anonim 2005: 85; Bregel 2003: 85]。

⁽²¹⁾ イチャン・カラに現存する最古の建築遺構の1つ。伝承によれば、アラウッディーンはホージャガーン教団のスーフィーであるアミール・クラール(1371年没)の師とされ、墓(この創建も後者に帰されるが、その真実性は疑わしい)は14世紀前半に建てられたと考えられる[Bobojonov va Rahimov 2015: 282–283]。アミール・クラールはナクシュバンディヤの名祖であるバハーウッディーン・ナクシュバンド(1318～89年)の師として知られる人物。

⁽²²⁾ 16世紀半ばまでホラズムの中心都市は古ウルゲンチ(現トルクメニスタン領)であったが、1570年代にアム川の流路の急転により同市が衰退したのにもない、政治的中心は南のヒヴァに移った[バルトリド 2011: 244]。このことからすれば、ホラズムにおけるウズベク国家については、ヒヴァへの首府南遷までをウルゲンチ・ハン国、それ以降をヒヴァ・ハン国と呼ぶのが適当ということもできよう。こうした政治・社会変動のなかで1645年にハン国の南部に建設された新ウルゲンチ(現ウズベキスタン領のウルゲンチ、ホラズム州の州都)は、とりわけ商業上、大きな意義を保持するようになった。

⁽²³⁾ 18世紀後半に活躍したコングラト(*Qo'ng'irat/Qong'irat*)部族の領袖。権力集中に努めるとともにヒヴァの復興に尽力し、コングラト朝の成立の基盤をつくった。

⁽²⁴⁾ これは19世紀前半から20世紀初頭にかけて開発されたヒヴァ王家の離宮庭園で、イチャン・カラ城外(北側)に

子を物語っている。

ヒヴァ市イチャン・カラの諸遺構が数世紀にわたって建設されたことを勘案すれば、この都市は単独の建築家がこれを創建したわけではないし、基幹となる原計画が先にあったわけでもない。しかしそれは、あらかじめ書き示された原計画にもとづいて完遂されたいかなる建設事業にもひけをとらない。この点で、ヒヴァの熟練した職人たち、発注者たる官吏たち、および場を選定して許可を与える支配者たちが共通の基本的目的に沿って構想をめぐらせたことは、おのずと明らかである。それゆえにも、都市の多数の箇所に複合建築群や集合体施設が出現したのである。

2. イチャン・カラにおける給水と排水

都市建設や建築様式、住民の慣習については数多くの論文が書かれ、専著が刊行されてきた。しかし、都市住民の給水、ならびに、天水や廃水の市域外への排出がいかになされていたのかについては情報が僅少である。以下では、これについて考えることにしたい。

(1) 給水および貯水

ヒヴァは、二重の城壁に取り囲まれた都市である。内側の市域は古来のものであり、3000年の歴史を有する。都市のかたわらをアム川の分流であるパールヴァーン・ヤフ⁽²⁵⁾運河(古称ヘイカーニークまたはヘイヴァニーク⁽²⁶⁾)が流れる。その水は、農地の灌漑や日常的用途のために利用される。

イチャン・カラの住民は、都市内の井戸から飲用水を得ていた。井戸の深さはおよそ7～9メートルほどで、イチャン・カラの外側ではこうした井戸の深さは3～4メートルほどであった。その理由は、オアシスが平坦なトゥラン低地に展開する一方、イチャン・カラ自体は小高い台地上に位置することにある。春から秋にかけては都市周辺を流れるヤフ(パール

城壁からほど近くの一大区画)に位置する。2017年5月19日にウズベキスタン共和国閣僚会議によって採択された「ホラズム州におけるヌールッラー・バイ歴史建築複合体の再建と修復に関する」決定にもとづき、現在この庭園では建築遺構の修築・整備と博物館化が大々的に進められ、これを観光名所とすることがめざされている。この建築複合体については著者に近著がある[Xudoyberganov 2018]。

(25) パフラヴァーン・ヤフまたはパフラヴァーン(／パールヴァーン)・アルナとも呼ばれる。ここでのパフラヴァーン(パールヴァーン)はパフラヴァーン・マフムードを指す。このことは伝承によって運河の起源が彼のなした奇跡(アム川からヒヴァのほうへ杖を引きずって歩くと、その跡に運河が出現)に結びつけられていることを物語る[Snesarev 1983: 172]。ヤフ(yof/yāf)はペルシア語の「アーブ(āb)」(水の意)を借用した語の転訛形。ホラズムのアラビア文字テュルク語文章語では“YAF”とつづられるのが通例といえるが、口語では多くの場合、ヤブ(yop/yap)と発音されてきた。アルナ(arna/ārnā)はテュルク語ホラズム方言で比較的大きな運河を指す語。

(26) アラビア文字文献において、ヘイカーニークは“HYKANYK (Heykānik)”，ヘイヴァニークは“HYVNYK (Heyvanik)”のかたちで現れる。

ヴァーン・ヤフとスイルチャリ・ヤフ)から流水〔oqar suv〕、すなわち飲用の河水を「水売り〔suvčī〕」と呼ばれる人々が特製の容器に汲み入れ、それをロバに載せて運び込んで売った。市内のいずれのマドラサ、モスク、墓廟にも、おなじくまた住民の暮らすいずれの居宅にも井戸があった。春がきて河水が増水すると、井戸の水位も上昇する。井戸は基本的に2種類あり、それぞれ「クドゥク〔quduq〕」⁽²⁷⁾(方言ではクイ〔quyī〕ないしタシュ・クイ〔taš quyī〕⁽²⁸⁾)および「チャシュマ〔čāšma〕」⁽²⁹⁾と呼ばれた。クドゥクは坑の周囲を、古くは木材やサクサウル⁽³⁰⁾、のちには焼成煉瓦で組み固められた。チャシュマは地面から2～3メートルの深さまで掘り下げられたもので、その水は塩気がなく、水量は少ない。そこに一晩かけて貯まった水は朝のうちに残さず汲み上げられた。

内城の2つの箇所、すなわちハンの居城たるアルクの内部と東門付近のクトゥルグ・ムラード・イナク・マドラサの内部とには、「地底池」⁽³¹⁾すなわち貯水槽があった。貯水槽の上部は円蓋〔gumbaz/gunbaz(<gunbad)〕⁽³²⁾で覆われ、地下部分は地下水が貯まる池である。

⁽²⁷⁾ クドゥク〔quduq/quduq〕はテュルク語起源の言葉で、とくに取水のために掘られた人工の井戸を指す。著者の一連の説明にしたがえば、クドゥクは後述のチャシュマに比して相対的に堅固な構造をもつ、おそらくはより深掘りの井戸を指すと考えてよいだろう。

⁽²⁸⁾ クイ〔quyī/quyī〕はテュルク語で「下」や「下部」を意味する。井戸は地下に掘り下げたものであることから、「下(坑)」の意で用いられたと考えられる。また、タシュ〔tosh/taš〕はテュルク語で「石」を意味することから、タシュ・クイ〔tosh quyī/taš quyī〕はおそらく、「石(の張りめぐらされた)下(坑)」というニュアンスをもつものと推測される。

⁽²⁹⁾ チャシュマ〔chashma/čāšma〕はペルシア語起源の言葉で、「泉」や「源泉」を意味する。本来は(自然の)湧水またはその出所を指すが、このケースのように人工の井戸の意味で用いられることもある。

⁽³⁰⁾ 中央アジアの沙漠ないし半沙漠地帯に生える灌木で、乾燥と塩分に強い。ウズベキスタンのクズルクム沙漠では黒サクサウル(高さ4～9メートル)と白サクサウル(高さ2.5～6メートル)がところどころで茂みを形成する〔Xonazarov 2004: 439–440〕。

⁽³¹⁾ ウズベク語原文の“tagi zamin”は、もとはペルシア語の表現“tag-i zamīn”を借用した用語と考えられる。“tag”は「底」を、“zamīn”は「地面、土地」を意味する。エザーフエ結合(-i)によって後者が前者を修飾しており、“tagi zamin”は直訳すると「地底」を意味するが、文脈からここでは「地底池」と訳しておいた。ちなみに現代ウズベク語には、おなじペルシア語表現に由来しつつもエザーフエが無標化した“tag-zamin”という語も存在するが、これは「本質」を意味する。なお、本文の後段で引用されているバルタエフの手稿『ヒヴァの建築規則』では、この語は一貫してアラビア文字で“TYKY ZMYN (tag-i zamīn)”と記されており〔Boltayev 2013〕、ここからは“tag”の母音“a”の“e”への転訛(本来の第1子音字“T”(ター)と第2子音字“K”(カーフ)のあいだへの“Y”(ヤー)の文字の介入)、ならびに、語末における“Y”の文字の付加によるエザーフエの母音“i”の表記上の明示という現象が観察される。母音の転訛に関しては、現代ウズベク語の口語においても、“tag”を“teg”と発音する傾向は広くみられる。また、アラビア文字におけるエザーフエの母音の明示に関しては、テュルク語文章語におけるこの現象は、時代がくだるにつれて(とくに近代以降)広がる傾向を示すといえる。

⁽³²⁾ 地底池が円蓋で覆われる理由について、著者は訳者との対話のなかで以下の点を挙げた。①地面より下方に位置する地底池に蓋をすることで、土、砂、埃の降下を予防し、貯水を清浄に保つことができる。②かりに木で蓋をする場合、木造の水平式屋根は耐久性の点で劣る。③これに対して焼成煉瓦は耐久性にすぐれるが、煉瓦で屋根を築く場合、力学的観点からドーム式の屋根をもうける建築工法を採用するのが合理的であり、この工法で築かれた円蓋は高い耐久性をそなえることができる。地底池上部の円蓋については、本文後段におけるバルタエフからの引用、および稿末補遺の写真も参照されたい。

都市周辺の池のそばには、貯水槽に似たかたちで建造された円蓋の下に位置する氷納庫があり、その中では冬季に凍結した池から切り出されたかなり大きな氷塊が、夏季に使用するために干し草にくるまれたうえで土中に埋められ、保存された。

つまり、イチャン・カラの住民は城塞内の井戸と、周辺の運河から容器で運び込まれた水とを利用することができた。特筆しておくべきは、井戸水の増減はアム川の水量のそれに依存するということである。

イチャン・カラに暮らした郷土史家バーバージャー・サファロフ(サファルザーダ)の記すところによれば、都市民の水利用を保障する目的で、都市の三方に3つの池が掘られた。これらの池とは、パールヴァーン池、バークチャ池、そしてアタ池のことである。これらの池は、そばにある門の名にちなんでそれぞれそう呼ばれた[Yo‘ldoshev 1960 (II): 340]。1922年にムハンマドカリム・ネエマトゥッラーオグルによって作図された地図⁽³³⁾には、市内にある池の多さからすればごくわずかとはいえ、そのうち最大級の10ばかりの池と4つの貯水槽とが表示されている[Ne‘matullayev xaritasi]。

城壁を建造するために土が掘り下げられた場所には、濠すなわち運河が出現した。そこには都市のかたわらを通る大きなヘイカーニーク(ヘイヴァニーク)運河から水が引き込まれた。この運河には市内の地下水路を流れ出る水も合流した。濠はそれ自体が、外敵から防衛するための一種の防御施設としての機能もはたした。

とくに強調しなければならないのは、ホラズム・オアシスの地層の構成が通常の土と砂からなっていたことである。それゆえにも、ある場所を深く掘り下げれば、水が湧き出で、井戸ができる。8～9メートルの深さの地下水路も存在するはずである。というのも、いくつかが散在する深井戸から自噴する水の多さはこれを裏づけている。

ハン国時代にマドラサの中庭には井戸があり、そのための手桶や水汲み用の容器をしつらえるために専任の人員がつけられた。たとえば、サイイド・ムハンマド・ハン・マドラサの井戸についてはモスクの沐浴場の管理人が[Vaqfnoma 1351]、ムハンマド・ラヒーム・ハン・マドラサの井戸についてはワクフ管財人自身が[Vaqfnoma 1356]、それぞれ管理責任を負った。ガダーイリ・エーシャー・ホージャ・モスクには、ムッラー・ナウルーズという人物が金銭と新規に掘削した井戸とを寄進した[Vaqfnoma 1329]。流水と呼ばれる塩気のない河水ならびに井戸水はたいそう重宝され、水を清浄に保つために特別の配慮がなされた。

(2) 排水

それでは、市内にもたらされた飲用水と天水がどのように市外へと排水されるのかについて

⁽³³⁾ その細部はやや不鮮明で判読しづらいものの、同地図の全体を俯瞰した写真が著者の旧稿に収録されている[Khudaiberganov 2006: 128]。

で考察することにしよう。

ハンの宮城たるアルクやタシュハウリ宮殿、その他の特別な建造物には、現今における時代の要請にも応えるような下水管が地下に埋設されており、その導管の材質は陶製である。この導管をつたって雨水は市外、まちの南方へと排水された。マドラサの各居室には、沐浴をおこなったのちの使用済みの廃水を排出するための「トッシ」[*tošši*]⁽³⁴⁾が存在する。「トッシ」とは、地下の下水管へと接続された、あるいは、地下に掘り下げた竪坑の上部に据えつけられた(円形ないし四角形の)大理石であり、この大理石の真ん中には少なくとも2つの穴がある。トッシは建物の中庭中央にも設置され、それは雨水を地下もしくは市外に排水するのに役立っていた。

ヒヴァは伝説にいわれるように、砂すなわちチャガ[*chaga/čägä*]の上に建設されている。つまり、その3～5メートルほど下方には砂層が横たわっている。その砂層は上方の地表から降りてくる水を下方に通過させ、地下に下降する水は地中へと浸み込んでいく。これを効率的に活かすべを知っていた住民は、しかるべき場所に竪坑を掘り、そこに廃水を流しやったのである。

(3) 地底池の2つの機能——アブドゥッラー・バルタエフの記述から

雨水は市内から市外へと、城門および特別に改造された貯水槽を通して流れくんだり、地下から浸み出ていった。アブドゥッラー・バルタエフは、このような地下貯水池の建設について以下のように書き残している⁽³⁵⁾。

⁽³⁴⁾ ウズベク語原文では“to‘shshi”。本文の説明にもあるとおり、これは排水のために穿たれた小さな孔穴(植物学の用語を援用するならば「水孔」とも呼びうる)をもつ、建材としての大理石のことを意味する。ここでは試みに、「排水孔付き敷石」と訳しておく。ブダゴフ(1812～78年)はヴァンペリー(1832～1913年)のチャガタイ語研究に依拠しつつ、単語“TVŠŠV”(頭母音“o”)に「宗教的沐浴のための排水用の石または水槽」の意味を与えている[Budagov 1869: 396]。ラドロフ(1837～1918年)も単語“TVŠŠV”に「沐浴のための石造の水槽」という似通った意味を与えるが、前舌母音を含む転写(“tüssü”)を提示している点でブダゴフと異なる[Radlov 1905: 1593]。いずれにしても、両語は排水孔付き敷石たるトッシに対応する言葉のはずであり、トッシの本来的な語義は宗教的沐浴および沐浴場にそなわる石と深く関係していたことが推測される。他方、ホラズム方言を専門的に研究したアブドゥッラーエフ(1914～85年)は、ウルゲンチ、ヒヴァ、ハーンカーの諸方言で使われる“tošši”の語にペルシア語起源の語“obrez/ābrēz”[「水の注ぐ所、水のこぼれ落ちる所、余水排出口、排水孔」などの意]の意味を与えている[Abdullayev 1961: 88]。排水孔付き敷石をトッシと呼ぶのは、あるいはホラズム建築学に特徴的な用語法かもしれないが、これと類似した形状と機能をそなえた石材を建造物に使用するのはなにもホラズムに限ったことではなく、かなり広域にわたる技法であることは間違いない。排水孔付き敷石の実例については稿末補遺の写真を参照されたい。

⁽³⁵⁾ 〈原注〉アブドゥッラー・バルタエフ(1890～1966年)は、イチャン・カラの染工の家に生まれた。1924年から66年にかけてヒヴァの博物館員。画工、スターリン賞受賞者。1937年、バルタエフの画図をもとにアタ・パールヴァーノフ[Ota Polvonov: 1867～1972年、ヒヴァ出身の木工細工師]が製作した円柱がバリにおける工芸品の万国博覧会で上位に入賞した。[アブドゥッラー・バルタエフの生涯と諸分野にわたる活動および業績については、その息子で歴史学者のカーミル・アブドゥッラーエフの著した伝記が参考になる[Abdullayev 1995]。]

「イチャン・カラの故宮⁽³⁶⁾」の建物の南東にあるムハンマド・リザー・コシュベギ街区には、1つの地底池すなわち貯水槽があり、この地底池は飲用水を汲みとるためではなく、それとは反対に降雨や降雪による水を貯め、ゆっくりと地下に排水するために、アッラクリ・ハンの時代(1825～42年)にムハンマド・リザー・コシュベギ、アタ・ムラード・コシュベギ、ハサン・ムラード・コシュベギらによって建設された。地底池は10～15年ごとに浚渫され、そこから出たミネラル分豊富な泥土は、やってきた農民がこれを荷車に載せ、自分の農地に流し込むために運び去った」[Boltayev daftari 45: 74–75]。

A. バルタエフは、ホラズムとヒヴァの歴史に関する88冊の手書きのノートを残した。それらはアブドゥッラー翁⁽³⁷⁾の家において、彼の孫たちの手元に残されている。A. バルタエフの記すところによれば、飲用水が汲みとられる地底池と雨水が流れ込む地底池との違いとは、雨水の流れ込む地底池には階段がないことにあった。「ただし両者の建設は同一の方法によっており、側壁は厚手の焼成煉瓦⁽³⁸⁾を、おなじく円蓋も焼成煉瓦を堅固に組み固めて造りあげられる。このような水を汲みとるための地底池の面積は100平方メートルである。円蓋の直径は10メートルでなければならない」[Boltayev daftari 88: 49]。イチャン・カラの「地底池は1925～26年に至るまで、人々がこれを取水に利用してきた。この地底池は1926年に、円蓋が自然と崩落し、使用できなくなってしまった」[Boltayev daftari 88: 50]。1963年以降のことであるが、今や内城には水道が引かれている。全都市住民がこの水道から水を飲み、必要を満たしている。それゆえ多くの井戸は、水が汲み上げられないまま廃れてしまった。

A. バルタエフの手書きのノートに書き記された情報は第一に、われわれの歴史の未開のページを研究する助けとなるし、それは第二に、消失した遺構の場所の特定やその歴史の研究、および復旧事業の助けともなる。同様に、ノートの記載から昔の職人たちの作業法を研究し、その成果にもとづくことで、改修事業の実施や遺構の延命および原状復帰のための足がかりが得られるだろう。

つまり、端的に言えば、都市住民はアム川から引かれてきたパールヴァーン・ヤフ運河の水と、浸み出す地下水から得られる井戸水とを飲用水として利用した。雨水や使用済みの廃水は、市内から市外へ地下および地上の水路を通じて排水された。

(36) ウズベク語原文では“Ko’hna Ark”(「コフナ・アルク」)。いずれもペルシア語起源の単語であるが、形容詞が名詞に先行するテュルク語・ウズベク語式の語順をとっている。「古い宮城」を意味することから、ここでは「故宮」と訳しておいた。たんに「アルク(Ark)」(宮城)と呼ばれることも多い。

(37) ウズベク語原文では“Abdulla ota”。“ota”は一般名詞としては第一義的に「父」を意味するが、高齢の男性に対する敬称(名前の直後に付される)としても用いられる。もちろんここではバルタエフのことを指している。

(38) ウズベク語原文では“karbich”。これは「煉瓦」を意味するロシア語の単語“kirpich”がウズベク語におけるその借用にともなって転訛した語形。

おわりに——現代の水問題

1951年生まれのアフマド・ムッラー・トゥルディアーフノフの述懐するところでは、1974年の早春のこと、ヤフの増水がはじまるのに先立ち、イチャン・カラの東側〔ディシャン・カラ部分〕に暮らすサルダール・デーヴァーナ（この〔デーヴァーナ（devona/dēvāna）⁽³⁹⁾の〕語は尊称。彼自身はムッラーであった）が夜分まで自宅の庭に2～3メートルの深さの湧き井戸を掘っていた⁽⁴⁰⁾。その日の深夜、スィルチャリ・ヤフに増水が到来し、ちょうどサルダール・デーヴァーナの掘った穴をつたってまちの地下水道管へと行き渡り、多くの家々、庭々、道々に溢水した。住民が方々に出て突きとめたところによれば、地下水道はサイイド・マーヒ・ルーイ・ジャハーン建築複合体とガンドゥムカーン門の南、およびコイ門の西から延びはじめる水道管が一つになり、サイイド・シャーリーカール・バイ・モスクの前を通してパールヴァーン門の南の排水路につながるものだった。地下水道管はおおよそ1～1.5メートルの高さを確保するために三角形の坑形をしており、焼成煉瓦で造設されたものだという。この地下の下水管はハン国時代に埋設され、ソ連時代には忘れ去られていたのである。

今日では、城塞の周囲にめぐらされた水路だった濠は埋め立てられている。市内の下水道設備は完備していない。通りはアスファルトで舗装されるか、もしくは敷石の舗道が敷設され、地面の「目」はふさがれた。アラル海の干上がりの結果、地下水は下降し、井戸の水は涸れた。地下水の下降は建築遺構にとって有益なのか、それとも有害なのか、この問いへの答えを模索する時がきたのである。現在、旧市街すなわちイチャン・カラには250世帯の住民が暮らし、その60～70パーセントが10～12メートルの深さの掘抜き井戸から取水し、これを利用している⁽⁴¹⁾。この水は飲用には適さないが、生活用水としては使い甲斐があり、じつにその使用量は大量にのぼる。当然ながらこれは、年を重ねるにつれてまちの地盤の漸次的な沈下と建築遺構の損傷とをまねくおそれがある。

歴史的遺構である建造物を未来の世代に伝えていくために、地下と地上の水が史跡に及ぼす影響を深く考究し、古来の方式を活用することでそれら史跡をいかに延命させるのか、この問題の解決策が今こそ待望されるのは論をまたない。

⁽³⁹⁾ もとはペルシア語で「気の狂った、狂人」の意。否定的な意味ばかりで用いられるわけではなく、「陶醉者」の意味でスーフィーを指すこともしばしばあるし、「粋狂」または「風狂」のような意味で詩人や文人を呼んだり、「鬼才」のような意味で学者を呼んだりする場合にも用いられる。

⁽⁴⁰⁾ 当該センテンスからはじまる連続する5センテンスは補稿に収められている。

⁽⁴¹⁾ 当該センテンスからはじまる連続する3センテンスは補稿に収められている。

付記：本稿（ウズベク語論稿および日本語解説・訳注）は、平成30年度科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）「ウズベキスタン世界遺産ヒヴァの持続可能な発展・開発のための実践的博物館活動の研究」（南博史（代表）；17K18514）による研究成果の一部である。また、このうちとくに日本語解説・訳注は、平成30年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「中央アジア・イスラーム王権の正統性と宗派問題に関する歴史学的研究」（木村暁（代表）；16K03073）による研究成果の一部でもある。

参考文献

●史料

- Boltayev daftari 45: Abdulla Boltayev, *Tarix. Xiva esdaliklari*, Qo'lyozma, 1964-y., 45-daftar.
- Boltayev daftari 88: Abdulla Boltayev, *Xiva arxitektura qoidalari*, Qo'lyozma, 1965-y., 88-daftar.
- Dili G'aroyib*: Xudoyberdi Qo'shmuhammad o'g'li, *Dili G'aroyib*, Qo'lyozma 1831-y., O'zbekiston Respublikasi Fanlar akademiyasi Sharqshunoslik instituti, Inv. № 1335.
- Ne'matullayev xaritasi: Xiva «Ichon-Qal'a» davlat muzey-qo'riqxonasi fondi, Ne'matullayev xaritasi, KP № 2369.
- Vaqfnoma 1329: Xiva «Ichon-Qal'a» davlat muzey-qo'riqxonasi fondi, Vaqfnoma, KP № 1329.
- Vaqfnoma 1351: Xiva «Ichon-Qal'a» davlat muzey-qo'riqxonasi fondi, Vaqfnoma, KP № 1351.
- Vaqfnoma 1356: Xiva «Ichon-Qal'a» davlat muzey-qo'riqxonasi fondi, Vaqfnoma, KP № 1356.
- Yo'ldoshev 1960 (II): *XIX asr Xiva davlat hujjatlari*, II-t., M. Y. Yo'ldoshev tahriri ostida, Toshkent: O'zbekiston SSR Fanlar akademiyasi nashriyoti.

●研究文献

ウズベク語

- Abdullayev, Fattoh. 1961. *O'zbek tilining Xorazm shevalari*, Toshkent: O'zbekiston SSR Fanlar akademiyasi nashriyoti.
- Abdullayev, Komil. 1995. *Naqshlarga bitilgan umr (Abdulla Boltayevning hayoti va ijodiy faoliyati)*, Toshkent: G'afur G'ulom nomidagi Adabiyot va san'at nashriyoti.
- Abdurasulov, Abdulla va Ibrohim Karimov. 2005. "Xiva," *O'zbekiston milliy entsiklopediyasi*, 9-j., Toshkent: «O'zbekiston milliy entsiklopediyasi» davlat ilmiy nashriyoti, 412–414-b.
- Abu Bakr xo'ja o'g'li, Rahmatulloh xo'ja va Komiljon Xudoyberganov. 2009. *Hazrati Polvon ota. Afsona va haqiqat*, Toshkent: XT «Hamidov N. H.» matbaa korxonasi.
- [Anonim]. 2005. "Uch avliyo majmuasi," *O'zbekiston milliy entsiklopediyasi*, 9-j., Toshkent: «O'zbekiston

milliy entsiklopediyasi» davlat ilmiy nashriyoti, 152-b.

Bobojonov, B. va K. Rahimov (ilmiy muharrirlar). 2015. *O'zbekiston obidalaridagi bitiklar: Xiva*, Toshkent: «Uzbekistan Today» axborot agentligi.

Boltayev, Abdulla. 2013. *Xiva arxitektura qoidalari (Xiva arxitektura qurilishlari tarixiga oid)*, Tarjimon talqinlari: M. Abdulhakim, Muharrir: X. Yakubova, Nashrga tayyorlovchilar: B. Davletov, K. Xudoyberganov, Urganch: «Xorazm» nashriyoti.

Rahimov, Ikrom va Komiljon Xudoyberganov. 1999. *Hazrati Polvon Pir*, Xiva: «Xorazm» nashriyoti.

Xonazarov, Abdushukur. 2004. “Saksovil,” *O'zbekiston milliy entsiklopediyasi*, 7-j., Toshkent: «O'zbekiston milliy entsiklopediyasi» davlat ilmiy nashriyoti, 439–440-b.

Xudoyberganov, Komiljon. 2018. *Nurullaboy majmuasi*, Urganch: «Quvanchbek-Mashhura» MChJ nashriyoti.

———. 2012. *Xiva. Dunyodagi eng ko'ha qal'a*, Toshkent: «REN-Poligraf» MChJ.

———. 2008. *Xiva xonlari tarixidan*, Urganch: «Xorazm» nashriyoti.

———. 2005. “Xiva «Ichon qal'a» muzey-qo'riqxonasi,” *O'zbekiston milliy entsiklopediyasi*, 9-j., Toshkent: «O'zbekiston milliy entsiklopediyasi» davlat ilmiy nashriyoti, 415-b.

———. 1996. *Xiva xonlari shajarasi*, Urganch: «Xorazm» nashriyoti.

O'rinboyev, A. va B. Abdulhalimov (mas'ul muharrirlar). 2006. *Tarixiy manbashunoslik. O'quv qo'llanma*, Toshkent: O'zbekiston Respublikasi Fanlar akademiyasi «Fan» nashriyoti.

ロシア語

Budagov, L. 1869. *Sravnitel'nyi slovar' turetsko-tatarskikh narechii, so vklucheniem upotrebitel'neishikh slov arabskikh i persidskikh i s perevodom na russkii iazyk*, t. I, Sanktpeterburg: Tipografiia Imperatorskoi akademii nauk.

Guliamov, Yakh'ya. 1957. *Istoriia orosheniia Khorezma s drevneishikh vremen do nashikh dnei*, Tashkent: Izdatel'stvo Akademii nauk Uzbekskoi SSR.

———. 1941. *Pamiatniki goroda Khivy*, Tashkent: Izdatel'stvo UzFAN.

Khudaiberganov, Kamilzhan. 2006. “Istoricheskaia topografiia goroda Khivy nachala XX veka,” *Istoricheskie issledovaniia o formirovanii i izmenenii musul'manskikh obshchin v Srednei Azii*, Redaktor: T. Khorikava, Kioto: Kiotskii universitet po izucheniiu zarubezhnykh stran, str. 117–128. [堀川徹 (研究代表者)『中央アジアにおけるムスリム・コミュニティの成立と変容に関する歴史学的研究』(平成14年度～平成17年度科学研究費補助金 (基盤研究 (A)(1))研究成果報告書) 所収]

-
- _____. 2004. *Rol' memoriala Pakhlavana Makhmuda v izuchenii istorii khivinskikh khanov (XVI–nachala XX vv.)*, Avtoreferat dissertatsii na soiskanie uchenoi stepeni kandidata istoricheskikh nauk, Nukus: Institut istorii, arkheologii i etnografii Karakalpakskogo otdeleniia Akademii nauk Respubliki Uzbekistan.
- Radlov, V. V. 1905. *Opyt slovaria tiurkskikh narechii*, t. III, ch. 2, Sanktpeterburg: Imperatorskaia akademiia nauk.
- Snesarev, G. P. 1983. *Khorezmskie legendy kak istochnik po istorii religioznykh kul'tov Srednei Azii*, Moskva: Izdatel'stvo «Nauka».

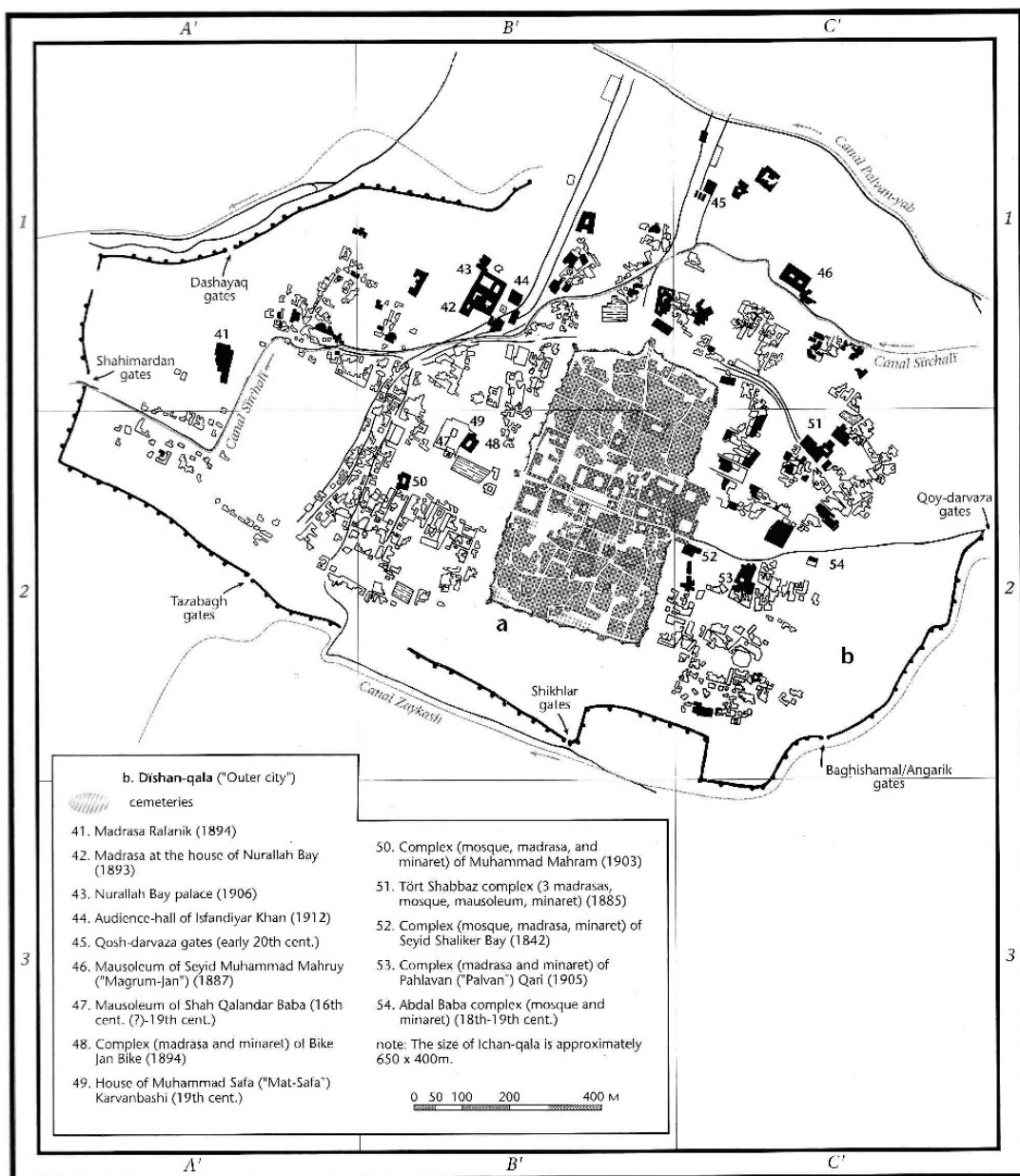
英語

- Bregel, Yuri. 2003. *An Historical Atlas of Central Asia*, Leiden and Boston: Brill.

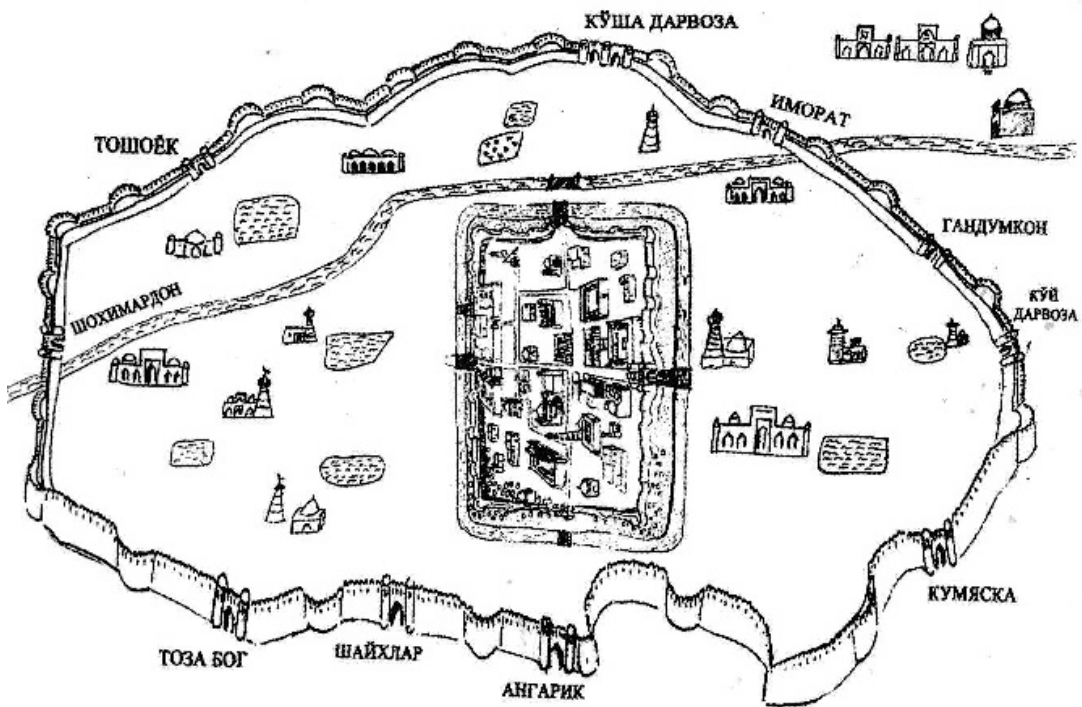
日本語

- 磯貝健一 2004「第9回研究会報告——②：報告者カミルジャーノフ・フダイベルガーノフ「ヒヴァ市イチャン・カラ博物館古文書収集プロジェクトにおける諸問題」」『ユーラシア古語文献の文献学的研究 NEWSLETTER』No. 5、2–4頁。
- 塩谷哲史 2014『中央アジア灌漑史序説：ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡』風響社。
- 東郷正延(ほか編) 1988『研究社露和辞典』(携帯版)、研究社。
- バルトリド、V. V. 2011(小松久男監訳)『トルキスタン文化史1』平凡社。

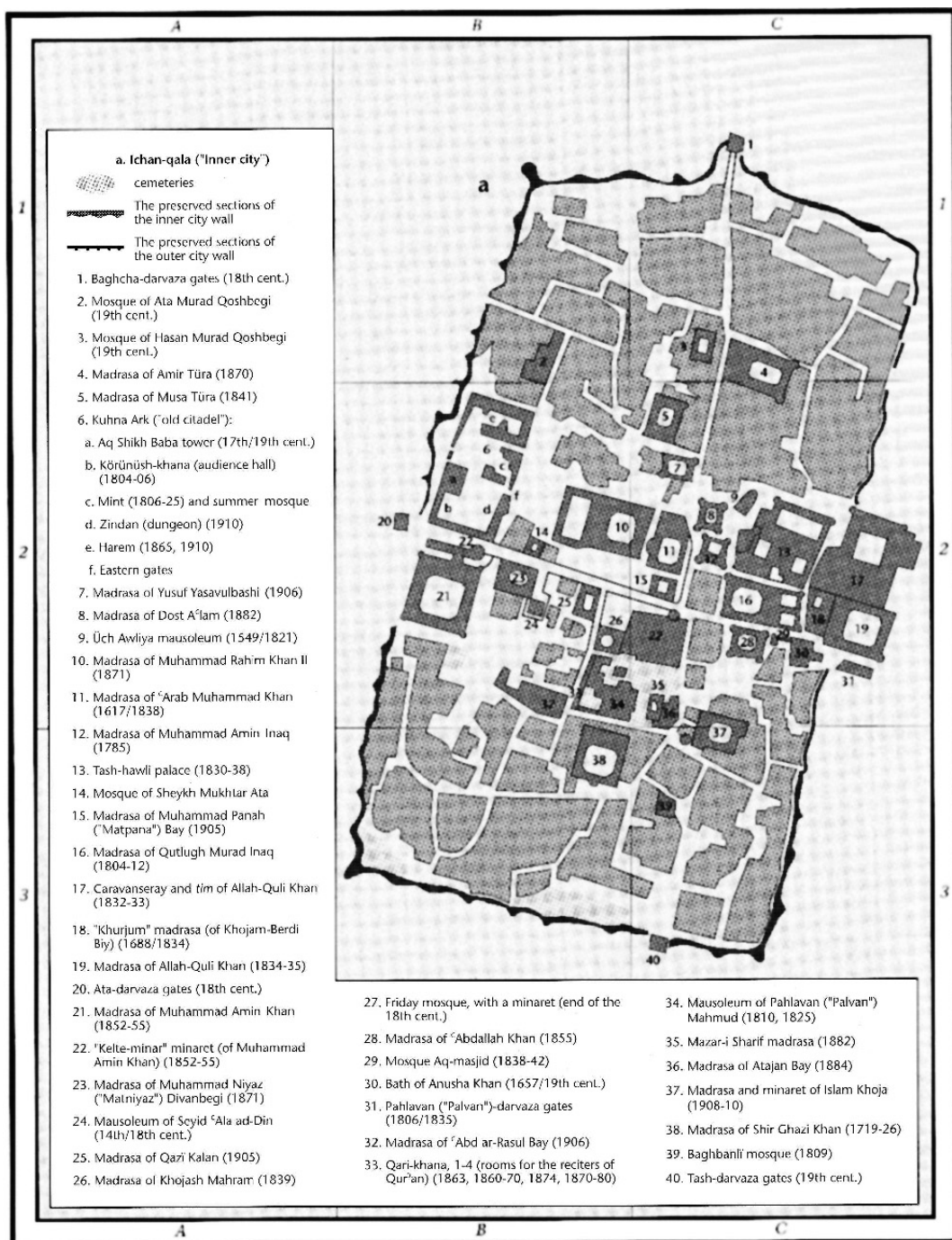
補遺



地図 1 19～20世紀初頭のイチャン・カラとディシャン・カラ
[Bregel 2003: 85]



地図 2 19～20 世紀初頭のディシャン・カラとその城門
[Xudoyberganov 2012: muqova (表紙)]



地図3 ヒヴァ・ハン国期イチャン・カラの主要な建造物
[Bregel 2003: 85]



写真1 トルト・シャフバース・バーバー建築複合体構内における地底池の外観



写真2 クトゥルグ・ムラード・イナク・マドラサ中庭における地底池の外観



写真3 本来の設置場所（イチャン・カラ内）から取り外された排水孔付き敷石（トッシ）



写真4 パフラヴァーン・マフムード廟入口の排水孔付き敷石（トッシ）



写真5 シェール・ガーズィー・ハン・マドラサ玄関前の排水孔付き敷石（トッシ）



写真6 タシュハウリ宮殿中庭の排水孔付き敷石（トッシ）



写真7 サマルカンドのグーリ・アミール廟前庭の排水孔付き敷石



写真8 サマルカンドのシャーヒ・ズィンダ廟参道の排水孔付き敷石
(手前左寄りにみえる窪み部分)

(ウズベキスタン共和国イチャン・カラ国立保護区博物館*)

(東京外国語大学世界言語社会教育センター**)

真田安先生のご逝去を悼む

新免 康

真田安先生が本年3月にご逝去された。まことに痛惜の念にたえない。先生は日本中央アジア学会の現役の理事であられ、本学会は大きな痛手を受けたと言わざるを得ない。とくに、親しく先生の聲咳に接してきた学会会員たちにとってあまりに突然のことであり、ショックが深かったと思う。

周知のように、真田先生は埼玉県の県立高等学校の教諭として教鞭をとられながら精力的に研究を展開され、多くの研究成果を出されてきた。本学会元理事の設楽國廣先生・梅村坦先生のご配慮のもと、ご家族の方のご厚意により、ご経歴とご研究業績に関するデータをお寄せいただいた。これをもとに、先生の「経歴と業績」を下記に掲載させていただく（ご業績については、新免の方で項目等についていくらか調整を施すとともに、若干の補充を行った）。

先生のご研究は、カシュガルを中心とするタリム盆地西部のオアシス地域（いわゆるカシュガリア）に焦点を当て、中央アジア・オアシス社会のあり方について解明するものであり、その問題意識は一貫していたと言える。ご研究成果は、大きくは二つの視角からなされていると考えられる。一つは、バザールを軸とするオアシス社会の経済的メカニズムを、19世紀の歴史的状況と現代の状況の両面から明らかにするものであり、もう一つは清朝統治下におけるオアシス社会の権力構造にアプローチするものである。前者のご研究成果において注目されるのは、19世紀における歴史的状況だけでなく、それと関連づけられる形で、新疆現地での実地調査によって得られた知見に基づく部分も相応の比重を占めていることである。とくに1996年の夏に実施された実地調査は、カシュガル・オアシスのバザールや農村部の内部に入り込み、先生の具体的なご関心にしがって聞き取りや観察を行ったものであり、先生のご研究にとって大きな意味をもっていたと思う。

1996年7月、新疆のバザールとマザールの調査旅行を企てた真田先生、王建新さん（現：蘭州大学）、そして私は、3人でチームを組み、いっしょに新疆に向かった。ウルムチからトルファンに移動して盆地各地のマザールなどを廻った後、ウルムチから飛行機でカシュガルまで飛び、カシュガルの都市バザール、周辺部のアトウシュやオパル、ベシケラムの農

村部・農村バザールなどで調査を重ねた。それからカシュガルで自動車を借り上げ、陸路を西から東にアクス、クチャ、コルラとたどり、各都市でモスクなどを見学しながらウルムチに戻るといふ、まさに天山南路の主要オアシスを周遊する行程であった。私は幸いにも、そのすべてにわたって先生とごいっしょすることができた。その中で先生は、さすがに最後の陸路移動の途中ではいくらか疲れを感じさせるご様子であったものの、あの新疆における真夏の暑さの中、全体を通して実に澁刺たるエネルギーに満ちておられた印象がある。同行させていただいた私も、とても充実した時間を過ごした。

現地調査において真田先生は、その文献史料に基づくご研究におけると同様、まさにその本領を発揮された。まず準備段階における調査地の設定など調査の基本計画の策定作業、インタビューの質問項目・内容や聞き取り・観察の段取りなどに関する検討作業を主導されるとともに、調査時においても、商人や農民の方々へのインタビューを始めとして、常に中心的な役割を担われた。また、その合間には、調査地で援助いただいていた現地協力者・情報提供者（大学教員などの知識人）に対し、疑問点の解消のために時間をかけて質問を重ねられていたことも記憶に残っている。先生が自らの学問的関心に基づき、目の前にある事象の内実を真摯に探究されるお姿は、いまでも私の胸に深く刻まれている。このとき、先生が長年取り組んでこられたテーマの中で歴史的な文字史料からは手の届かなかった問題を、現地調査の場で解き明かすために力を尽くされるプロセスに立ち会うことができたことは、私にとって本当に幸運かつ貴重な経験であったと言える。

さて、真田先生の日本中央アジア学会への関わりについてである。先生が本学会の成立と発展において決定的に重要なご貢献をされたことは言を俟たない。周知のように、本学会の母体になったのは、西伊豆の松崎町における研究合宿（いわゆる「まつざきワークショップ」）である。第1回のまつざきワークショップは、新疆研究に関わる12名により行われたものであり、もちろん真田先生はその中心メンバーとして参加された。第2回目以降、旧ソ連領中央アジア関連の研究者たちも出席するようになり、参加者数もどんどん増加する中、毎回欠かさずご参加になった。私の運転する車でごいっしょに松崎に向かったこともある。その後、まつざきワークショップを母体として日本中央アジア学会が設立された際には、理事に就任されるとともに、自ら進んでワークショップの実行委員長に手を挙げられ、私が学会会長の任を終えるまで年次大会の運営に多大なご尽力をいただいた。

研究合宿は通常の学会大会に比べ、事前準備も含め業務のプロセスが複雑であり、またその量も多い。毎年1月に、実行委員を務める若手研究者の方々と交えて、長時間にわたる事前打ち合わせを実施した。その際には毎度必ずご出席の労をとっていただき、有益なご助言等をいただいた。さらに、研究合宿の場所を西伊豆の松崎町から近場に移すことが事務局にとっての課題として浮上した際には、新たな会場探しにおいて甚大なお骨折りをたまわった。

三浦半島や江ノ島、東京本郷などに位置する、候補となる諸施設を、真田先生を中心に、若手研究者の方々といっしょに回って、それぞれの施設に対する評価を行い、最終的に江ノ島に決まったという経緯がある。

本学会は最初の松崎での研究合宿以来、現会長の宇山先生に会長職が移るまで、いちおう私が責任者を担う形になってはいたが、力不足が覆いがたく、迷ったり悩んだりする場面も多々あった。そういうとき真田先生のご存在と具体的なお力添えがどれほど心強く感じられたか、言葉では言い表せないほどである。ご多忙のなか、こちらのさまざまな勝手なお願いにいつも快く応えていただいたことに対する心苦しさとともに、本当に感謝の念は深い。そして何よりも、真田先生は、毎回の研究会の場でとくに若手の発表者に対し積極的に触発的な質問を繰り出され、会の活性化に意を用いられるとともに、交流の場においては、深更に及ぶまで会員たちと熱く語り合い、場を盛り上げられていた。先生と触れ合う中で、学問面において大いに啓発され、さらには人生を歩む上での含蓄深い示唆を与えられた若手の会員も少なくないと思う。先生の暖かいお人柄と洒脱な語り口が、交流の場全体に魅力的な波動を生じさせていたように感じる。

このように真田先生は、日本中央アジア学会にとって最大の功労者のうちの一人であり、さまざまな面においてまさに「恩人」とであると言って過言ではないであろう。いまだにダメージから立ち直れないでいるが、先生のご貢献に思いをいたし、本学会がさらに充実したものになるよう努力を重ねていきたいと思う。

真田安先生 御経歴と御業績

経歴

- 1949年1月2日 静岡県に生まれる
- 1973年3月 東洋大学文学部史学科東洋史専攻卒業
中学1級、高校2級教員免許取得(社会)
- 1973年4月 中央大学大学院文学研究科東洋史学専攻修士課程入学
- 1975年3月 中央大学大学院文学研究科東洋史学専攻修士課程修了(文学修士)
高校1級教員免許取得(社会)
- 1975年4月 中央大学大学院文学研究科東洋史学専攻博士課程後期課程入学
- 1978年3月 中央大学大学院文学研究科東洋史学専攻博士課程後期課程単位取得満期退学
- 1978年4月 埼玉県立上尾東高等学校教諭(～1983年3月)
- 1983年4月 埼玉県立大宮武蔵野高等学校教諭(～1997年3月)
- 1983年4月 東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究員(～2004年3月)
- 1987年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員(～1992年3月)
- 1991年4月 立正大学教養部非常勤講師(歴史学担当)(～1992年3月)
- 1993年4月 立正大学教養部非常勤講師(歴史学担当)(～1996年3月)
- 1996年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員(～1999年3月)
- 1997年4月 埼玉県立浦和商業高等学校教諭(～2009年3月)
- 1998年4月 立教大学観光学部兼任講師(外国史担当)(～2012年3月)
- 2000年4月 九州大学文学部・大学院文学研究科非常勤講師集中講義(イスラム文明学講義担当)
- 2003年9月 立教大学文学部兼任講師(東洋史特講担当)(～2006年3月)
- 2004年4月 東洋大学アジア文化研究所客員研究員(～2010年3月)
- 2009年4月 埼玉県立鷹の台高等学校(～2010年3月)
- 2010年4月 埼玉県立北本高等学校(～2011年3月)
- 2010年4月 駿河大学経済経営学部非常勤講師(～2018年3月)
- 2013年4月 埼玉県立大宮工業高等学校(～2015年3月)
- 2015年4月 埼玉県立中央高等学校(～2016年3月)
- 2019年3月22日 逝去

※学会等活動

- 白山史学会（東洋大学史学科）・会員（1973年9月～）
- 日本イスラム協会・会員（1975年6月～）
- 内陸アジア史学会・会員（1976年11月～）
- 白東史学会（中央大学東洋史学研究室）・会員（1977年3月～）
- 日本中東学会・会員（1993年5月～2009年3月）
- 日本中央アジア学会・理事（2004年4月～）
- 中国ムスリム研究会・会員（2002年5月～）

研究業績

1. 書籍

- 『新疆ウイグルのバザールとマザール』（新免康、王建新との共著）東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2002年

2. 論文、書籍分担執筆、など

- 「オアシス・バーザールの静態研究——19世紀後半カシュガリアの場合——」『中央大学大学院研究年報』（6）、1977年、207–220頁
- 「『西域同文志』巻十二・十三「天山南路回部人名二・三」について」『白山史学』（19）、1977年、20–34頁
- 「綿業からみたカシュガリア・オアシス社会の一断面——一八七〇年代について——」『中央大学アジア史研究』（2）、1978年、29–50頁
- 「創設期清伯克制からみたカシュガリア・オアシス社会」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社、1983年、437–458頁
- 「都市・農村・遊牧」佐藤次高編『講座イスラム3 イスラム・社会のシステム』筑摩書房、1986年、107–148頁
- 「東西都市像の分水嶺——中国共産党解放期の調査報告からみたカシュガリアの都市像——」『文部省科学研究費重点領域研究「比較の手法によるイスラームの都市性の総合研究」「イスラームの都市性・研究報告」』研究報告編（21）、1989年、1–10頁
- 「バーザール・ネットワークと参詣・巡礼路——カシュガル・オアシス地域試論——」『1988年報告 イスラム圏における異文化接触のメカニズム：市の比較研究』1、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1989年、21–40頁

- 「東トルキスタン紀行覚え書き——沙漠とオアシス、農村と灌漑組織——」清水宏祐編『イスラム都市における街区の実態と民衆組織に関する比較研究』東京外国語大学、1991年、141-157頁
- 「東西都市像の分水嶺——時空軸の中の中央アジア都市——」(シリーズ：イスラムの都市性-6-)『学術月報』45(6)、1992年、580-587頁
- 「東西都市像の分水嶺——時空軸の中の中央アジア都市——」板垣雄三・後藤明編『イスラムの都市性』日本学術振興会、281-301頁
- 「『ターリヒ・エミニエ』序章から読取れる東トルキスタン史の諸相の若干」菅原純、新免康編『GULBAGH』現代ウイグル語研究会、1992年、207-219頁
- 「イスラム研究の最新動向——世界史像への新視点の発見——」『社会科研究集録』(埼玉県高等学校社会科教育研究会)(29)、1993年
- 「現代中国の民族政策の底流——新疆ウイグル民族からの視点——」『社会科研究集録』(埼玉県高等学校社会科教育研究会)(33)、1997年
- 「バザール・混沌の奥にある社会システムを求めて」(特集 越境する新疆・ウイグル)『アジア遊学』(1)、1999年、54-70頁
- 「新疆ウイグルのバザール——商品経済で成り立つ中央アジアのオアシス社会——」『文明のクロスロード Museum Kyushu』(博物館等建設推進九州会議)18(4)(通巻(70))、2001年、53-60頁
- 「歴史概念としてのシルクロード批判——『世界史』にとって「シルクロード」はどこまで有効か——」埼玉県高等学校社会科教育研究会『社会科研究集録』(41)、2005年
- 「バザール——オアシスの市場」中国ムスリム研究会編『中国ムスリムを知るための60章』明石書店、2012年、142-146頁
- 「バザールと人々」帯谷知可、北川誠一、相馬秀廣編『朝倉世界地理講座 5 中央アジア』朝倉書店、2012年、156-169頁
- 「乾隆25年カシュガル反乱——中央アジア・オアシス社会の権力構造の究明にむけて——」『中央大学アジア史研究』(38)、2014年、148-112頁
- 「カシュガリアにおける清朝征服期・統治初期のオアシス権力抗争」高橋継男教授古稀記念 東洋大学東洋史論集編集委員会編『高橋継男教授古稀記念 東洋大学東洋史論集』東洋大学文学部史学科東洋史研究室発行／汲古書院発売、2016年、503-539頁
- 「新疆におけるバザール・マザール調査(1996年)をめぐる」(新免康との共著)中央大学政策文化総合研究所「日本とユーラシア社会——海洋と大陸の歴史・文化」プロジェクト編集・発行『研究報告書 日本とユーラシア社会：調査の現場から』、2017年、39-53頁

3. 高等学校教科書の分担執筆

- 『新世界史A』清水書院、1993年(担当：前近代の中国史、中央ユーラシア史、イスラム史)
- 『新世界史A 改訂版』清水書院、1998年(担当：中国を中心とした東アジア史の古代から現代までの通史、東西交渉史、中央ユーラシア史)
- 『高等学校世界史A』清水書院、2003年(担当：中央ユーラシア史、東西交流史、アジアの近代史)

4. 書評・新刊紹介等

- 「嶋崎昌『隋唐時代の東トゥルキスタン研究——高昌国史研究を中心として——』『歴史学研究』(472)、1979年、51-55頁
- 「内陸アジア：中央アジア」(一九八三年の歴史学界——回顧と展望——)『史学雑誌』93(5)、1984年、248-255頁
- 「清水論文へのコメント(清水宏祐「イラン史の中の都市像——10～11世紀のニーシャープール——」『史潮』新28号、1990年、40-43頁
- 「岡崎正孝編『中東世界——国際関係と民族問題——』(世界思想ゼミナール)世界思想社、一九九二・一刊、四六、二五九頁、一九五〇円」『史学雑誌』101(6)、1992年、124-126頁
- 「財団法人東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センター編・発行『日本における中東・イスラーム研究文献目録 一八六七—一九八八年』汲古書院発売(一九九二年三月刊、八〇二頁、六三〇〇円)」『歴史と地理』(447)(『世界史の研究』(153))、1992年、51頁
- 「片岡一忠著『清朝新疆統治研究』」『史学雑誌』102(11)、1993年、92-103頁
- 「私市正年「イスラム聖者 奇跡・予言・癒しの世界」講談社現代新書(一九九六年三月刊、二三〇頁、六五〇円)」『歴史と地理』(492)(『世界史の研究』(168))、1996年、52頁
- 「伊原弘・梅村坦著『宋と中央ユーラシア』(世界の歴史7)中央公論社、一九九七・六刊、四六、四七八頁、二五二四円」『史学雑誌』107(1)、1998年、124-125頁
- 「〈書評〉小松久男編『世界各国史4 中央ユーラシア史』」『歴史と地理』(549)(『世界史の研究』(189))、2001年、50-55頁
- 「小松久男著『激動の中のイスラーム：中央アジア近現代史』山川出版社、2014年4月刊、A5判、128頁、1,200円＋税」『内陸アジア史研究』(30)、2015年、94-96頁

5. 辞典・事典項目執筆

- 『日本大百科全書』小学館、1985～88年(担当項目：「カシュガル」、「ヤルカンド」)
- 板垣雄三、後藤明編『事典イスラームの都市性』亜紀書房、1992年(担当項目：「ウイグル」、「カシュガル」)

- 松原正毅編集代表、NIRA編集『世界民族問題事典』平凡社、1995年(担当項目:「カシュガル」)
- 西川正雄等編『世界史辞典』角川書店、2001年(担当項目:17世紀～20世紀初頭の中央アジア・新疆関係、合計37項目)
- 小松久男、梅村坦、宇山智彦、帯谷知可編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005年(担当項目:特別項目「オアシス」、「バザール」;一般項目「カシュガル」、「西域水道記」、「西域同文志」、「平定準噶爾方略」)

6. 学会口頭報告・講演

- 「カシュガリアの伯克の支配力について」第11回白山史学会大会(於:東洋大学)、1973年11月
- 「カシュガリア・オアシス考——ヤクブ・ベク治下(1865-77)のバーザールを中心として——」東洋大学アジア・アフリカ文化研究所月例研究会(於:東洋大学)、1975年10月
- 「綿業からみたカシュガリア・オアシス社会の一面——1870年代について——」中央大学白東史学会1977年度第4回月例研究会(於:中央大学)、1977年10月
- 「創設期伯克制から窺えるカシュガリア・オアシスの社会構造の一端」内陸アジア史学会1979年度大会(於:早稲田大学)、1979年11月
- 「清朝治下カシュガリアの一土着支配者像」第5回中央大学白東史学会大会(於:中央大学)、1979年12月
- 「イスラム社会における都市・農村・遊牧——19世紀カシュガルの商品流通からみた——」中央大学白東史学会1984年度大会(於:中央大学)、1984年11月
- 「オアシス地場産業と「シルクロード」交易の原像」東洋大学白山史学会1987年度第5回月例研究会(於:東洋大学)、1987年6月
- 「バーザール・ネットワークと巡礼・参詣路——カシュガル・オアシス地域試論——」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・共同プロジェクト「イスラム圏における異文化接触のメカニズム——市の比較研究——」1987年度第2回研究会(於:東京外国語大学)、1987年10月
- 「東西都市像の分水嶺:中国共産党解放期の調査報告からみたカシュガリアの都市像」文部省科学研究費重点領域研究「比較の手法によるイスラームの都市性の総合的研究」S班「イスラーム都市における民衆組織と民衆運動」第1回研究会(於:東京大学)、1988年9月
- 「乾隆カシュガル蜂起——伯克支配力とオアシス権力構造基底部——」東洋史研究会1989年度大会(於:京都大学)、1988年11月
- 「「イスラーム化以後の東トルキスタン都市」について」文部省科学研究費重点領域研究「比較の手法によるイスラームの都市性の総合的研究」S班「イスラーム都市における民衆組織と民衆運動」シンポジウム「東トルキスタン都市の歴史的展開」(於:道後温泉)、1990年1月

- 「東トルキスタン紀行覚え書き：沙漠とオアシス、都市と農村、バザール(商業)とマザール(信仰)」中央大学白東史学会 1990 年度大会 (於：中央大学)、1990 年 11 月
- 「新疆ウイグル社会のバザール(商業)とマザール(信仰)：文献史学とフィールド・ワークのつながり」東洋大学アジア・アフリカ文化研究所月例研究会 (於：東洋大学)、1991 年 10 月
- 「イスラーム研究の最新動向——世界史像への新視点の発見——」埼玉県高等学校社会科教育研究会歴史部会 1992 年度 2 学期研究会、1992 年 11 月
- 「バザール(商業)とマザール(信仰)のアラベスク——カシュガル地域社会から「イスラーム」世界を想う——」福岡国際文化交流協会主催平成 5 年度アジア学講座「イスラーム世界の諸相」(於：福岡市パピヨン)、1994 年 2 月
- 現代中国の民族政策の底流——新疆ウイグル民族からの視点——」埼玉県高等学校社会科教育研究会歴史部会 1995 年度 3 学期研究会、1996 年 2 月
- 「農村生活とバザール——商品経済によって成り立つ世界——」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、共同プロジェクト「イスラム圏における異文化接触のメカニズム：人間移動と情報に関する総合研究」(於：東京外国語大学)、1997 年 7 月
- カシュガル・オアシス社会史を廻る二題——オアシス農村組織とイスラム国際商人予備軍、そして接点——」九州史学会平成 9 年度大会 (於：九州大学)、1997 年 12 月
- 「回り舞台天山南路めくるめくマザール宗教調査の旅——ウイグル・イスラーム信仰と中国新疆イスラーム宗教政策の現状——」日本アルタイ学会(第 35 回野尻湖クリルタイ)(於：藤屋旅館)、1998 年 7 月
- 「ウイグル・イスラーム信仰と現代中国新疆イスラーム政策の歴史的系譜」中央大学白東史学会 1998 年度大会 (於：中央大学駿河台記念館)、1998 年 11 月
- 「歴史概念としてのシルクロード批判——『世界史』にとって「シルクロード」はどこまで有効か——」埼玉県高等学校社会科教育研究会歴史部会 2004 年度 2 学期研究集会、2004 年 11 月
- 「Rethinking Bazar and Mazar in Kashgar」中央大学人文科学研究所・研究会チーム「イスラーム地域における聖地巡礼・参詣」公開講演会 (於：中央大学駿河台記念館)、2010 年 12 月
- 「乾隆 25 年カシュガル反乱——中央アジア・オアシス社会の権力構造の究明にむけて——」中央大学白東史学会 2012 年度大会 (於：中央大学駿河台記念館)、2012 年 12 月

7. 海外調査

- 調査期間：1988 年 7 月 25 日～8 月 26 日、調査地：トルコ共和国およびモロッコ王国(文部省科学研究費補助金(国際学術研究)・研究課題「イスラム都市における街区の実態と民衆組織に関する比較研究」(研究代表者：清水宏祐、研究番号：01041034)による調査)
- 調査期間：1989 年 8 月 3 日～8 月 21 日、調査地：中華人民共和国新疆ウイグル自治区(文

部省科学研究費補助金(国際学術研究)・研究課題「イスラム都市における街区の実態と民衆組織に関する比較研究」(研究代表者:清水宏祐、研究番号:01041034)による調査)

- 調査期間:1996年7月24日～8月16日、調査地:中華人民共和国新疆ウイグル自治区(文部省科学研究費補助金(国際学術研究)・研究課題「イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究」(研究代表者:家島彦一、研究番号:06041034)による調査)

(中央大学文学部)

日本中央アジア学会 2018 年度大会プログラム

■概要

日程：2019年3月23日(土)～3月24日(日)

会場：KKR 江ノ島ニュー向洋

■プログラム

● 3月23日(土)

13:00 受付

13:30～17:30 個人発表①

司会：井上岳彦(大阪教育大学)

大倉忠人(キヤノン株式会社)

「クルグズにおける非畜産業従事者の家畜資産保有の経済的利点

—— ナルン州アクタラ地区並びにナルン市におけるプレ調査報告」

討論者：樋渡雅人(北海道大学)

塩野崎信也(龍谷大学)

「ロシア帝政期南東コーカサスの村落における家族の姿」

討論者：磯貝真澄(京都外国語大学)

ウメトバエワ・カリマン(東京藝術大学)

「アクン芸の音楽構造の分析

—— 新資料から見直すクルグズとカザフスタンの語り物 (Oral Narrative)」

討論者：坂井弘紀(和光大学)

ベクトゥルスノフ・ミルラン(北海道大学)

「革命期及びソ連初期におけるカザフ人とクルグズ人エリートの関係について」

討論者：秋山徹(早稲田大学)

17:30～18:30 日本中央アジア学会総会

● 3月24日(日)

9:00～12:20 個人発表②

司会：塩谷哲史(筑波大学)

秋山徹(早稲田大学)

「ソ連中央アジア創成期におけるクルグズ人旧首領一族の動向
——民間所蔵史料と公文書館史料による復元の試み」

討論者：植田暁(日本学術振興会特別研究員PD、北海道大学)

村上智見(北海道大学)

「サマルカンド市所在グリ・アミール廟出土の織物について」

討論者：堀川徹(京都外国語大学)

ディシュコフ・アルマス(筑波大学)

「『中央アジア+日本』対話——着想から実行へ」

討論者：櫻間瑛(一般財団法人所属)

14:00～16:00 公開パネルセッション

「中央ユーラシア近現代史研究の潮流と展望」

司会：島田志津夫(東京外国語大学)

小松久男(東京外国語大学)

「一つの文書から何を読み取るか——近現代史の史料について」

宇山智彦(北海道大学)

「中央ユーラシア史研究がロシア史・比較帝国論に対して持つ意義」

新免康（中央大学）

「内陸アジア史研究と中央ユーラシア史——近現代新疆研究の動向を中心に」

16:05～18:00 公開講演

司会：水谷尚子（明治大学）

方麗娟（馬偕醫護管理專科學校、台湾）

「回回醫學在中國元代醫書中之特色（中国元代医書に見る「回回医学」の特徴）」

通訳：熊倉潤（アジア経済研究所）

周耿生（馬偕醫護管理專科學校、台湾）

「塔吉克斯坦政治變遷——世俗與宗教間的觀察

（タジキスタン政治の変遷——世俗・宗教関係の考察）」

通訳：熊倉潤（アジア経済研究所）

* 発表者の所属はいずれも発表時のものです。

クルグズにおける非畜産業従事者の家畜資産保有の経済的利点 — ナルン州アクタラ地区並びにナルン市におけるプレ調査報告 —

大倉 忠人

本研究はクルグズにおいて家畜⁽¹⁾を資産として保有する非畜産業従事者⁽²⁾(通称：不在畜群所有者⁽³⁾)の経済的利点の解明を試みるものであり、本発表では2019年3月上旬に筆者がナルン州アクタラ地区並びにナルン市⁽⁴⁾において実施したプレ調査の結果を中心に報告した。

1991年のソヴィエト連邦崩壊後のポスト社会主義のなかでコルホーズ・ソフホーズが解体・解散され、市場経済化に伴う産業構造の転換などにより、畜産業従事者は社会経済の混乱により一時的に増加に転じたものの、近年は減少の一途を辿っている。また、都市部は元より、農村部においても家畜を直接保有する人は減少している。しかし、非畜産業従事者の中には自らの家畜を畜産業従事者に委託し、家畜を資産として保有し続けているケースが散見される。家畜を資産として保有するに至った経緯や動機はどこにあるのか。また、その動機の背景にある経済的利点を現地調査により解明すること目的としている。また、ポスト社会主義社会に生きるクルグズ民族のメンタリティの中にどのくらい市場経済化が浸透しているかを解明することに意義を見出したいと考えている。

本研究に類似した先行研究の一つとして、ロシアのサハ共和国における馬委託管理に関わる社会経済的諸相の提示と現代の生業のあり方をポスト社会主義の文脈から解明を試みた[高倉 2012]がある。本先行研究では、ポスト社会主義の社会下における雌馬の委託管理は、サハ社会で遊牧の伝統を維持するための適応の結果として、①貨幣獲得を目的とする貨幣経済と②家畜そのものを富とする経済という二重経済を生んだと結論付けている。

クルグズにおいて不在畜群所有者が家畜を資産として保有する動機の背景には経済的利点

(1) クルグズにおける主要な家畜は、羊、山羊、牛、馬である。

(2) 本論では、畜産を主たる生業としていない者を指す。屋敷地で少数の家畜を飼う者も含むが、副業的畜産農家や兼業畜産農家などは含めない。

(3) 放牧地で行われる家畜の世話・管理を他人に任せ、基本的に放牧地にはいない所有者。英語では、absentee herd ownersと呼ばれている[高倉 2012: 178]。

(4) クルグズ共和国のナルン州は南部の山岳地帯に位置する州であり、州内にはクルグズ民族が大半を占めるクルグズの中のクルグズが住む場所として現地において認知されている。

があり、具体的に以下の5つの動機があると筆者は推論する。

- (1) トイ(宴会)の際に自らが所有する家畜を取り寄せ、自ら裁いて振舞うことができること【自己消費】
- (2) 市場で家畜そのものや調理された肉を調達するより、安価で信頼性が高いこと【価格／安全性】
- (3) 他の資産よりも資産としての運用効率が高いこと【運用効率】
- (4) 貨幣経済一辺倒に対する不安からくる家畜の資産としての保有【リスクヘッジ】
- (5) クルグズ社会において遊牧遊牧の伝統を維持したいという思い【遊牧民族としてのアイデンティティー】

については、不在畜群所有者は上記(1)～(5)のどの動機を強く持っているのか、また実際に家畜を委託することに経済的な利点がどのくらいあるのか、コスト構造を解明するためのヒアリング調査を実施する必要がある。なお、上記(5)は経済的利点の要素を持ち合わせてはいない。

今回は村落部にあたるナルン州アクタラ地区と都市にあたるナルン市の2か所において計4世帯から簡易的なインタビュー調査を行なった。その結果、

- 都市部の委託者は経済的利点(損益)を鑑みながら、委託のありかたを見直している
- 都市部で収支を計算した世帯では、家畜の管理を委託せず、市場や親戚などから家畜を必要なだけ調達
- 村落部では損益よりも生業経済を維持することを理由に屋敷地や委託により家畜の保有を継続
- 村落部ではコストを精緻に計算せずに委託している

ということが判明し、今後の本調査実施に向けた視点や課題が明確になった。

今後は、先行研究調査の深耕に加えて、インタビュー調査の裏付けを行なうべく、関連統計データの収集と分析を進めたい。また、本格的な現地インタビュー調査を通して、より一層精緻なコスト構造分析から経済的利点を導出することにより、本研究の目的の達成に加えて、学術的意義をより一層明確にしていきたい。

参考文献

高倉浩樹 2012『極北の牧畜民サハ——進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』京都：昭和堂。

(キヤノン株式会社)

ロシア帝政期南東コーカサスの村落における家族の姿

塩野崎 信也

本発表では、「教区簿冊 (метрическая книга, *metrik dəftəri*)」と呼ばれる史料を用いて、ロシア帝政期南東コーカサスの農村における家族がどのようなものであったかを復元した。なお、南東コーカサスとはロシア領ザカフカースにおいてムスリムが大半を占めた地域のことで、大まかに言って、現在のアゼルバイジャン共和国に該当する領域を示す。

南東コーカサスでは、1813年にロシアに併合された後、段階的に統治制度が整備されていった。その中で1つの画期となったのが、1872年の「ザカフカース・シーア派ムスリム聖職者統治規程」とスンナ派の同様の規程(以下、両者を合わせて「1872年規程」)の公布である。1872年規程は、ザカフカースのムスリム聖職者(＝ウラマー)の管理・統制を目的とし、彼らを4階層からなるピラミッド状の組織に編成した。そのうち、最下層の聖職者である「ムッラー」は、「モスク教区共同体」(以下、「モスク教区」)ごとに1名設置された。モスク教区の規模は、80～90戸と定められており、村落部においては、1つの村がそのまま1つのモスク教区とされることが多かったようだ。

モスク教区の実際の規模と人口構成を知るために発表者が利用したのが、ティキャンルという村＝モスク教区に関する、「人別帳」とも呼ぶべき史料である。1881年に村のムッラーによって作成されたこの帳簿は、該当年におけるモスク教区的全住民の名前・続柄・生年を、世帯別に記録したもののようだ。それによると、ティキャンル村には、計91戸の世帯が存在し、569人が居住していた。モスク教区の規模は、1872年規程の定めるところにほぼ準じていると言えよう。世帯は基本的に、世帯主とその妻、世帯主の息子夫婦や未婚の娘らによって構成される。そこに世帯主の兄弟とその妻子、世帯主の未婚の姉妹、世帯主の母が加わることも多い。すなわち、世帯は基本的に男系親族で構成された、とまとめることができる。世帯構成者数の平均は6.3人で、拡大家族世帯や多核家族世帯の割合が高いという特徴が見られた。

このような共同体であるモスク教区におけるムッラーの業務の1つが、教区簿冊の作成と管理である。教区簿冊は、モスク教区の住民の出生・結婚・離婚・死亡を記録したもので、

それぞれに関する帳簿が別個に作成され、最終的にはある程度がファイルにまとめられた上で保管された。これらのファイルは、現在、アゼルバイジャン共和国国立歴史文書館にて相当数が所蔵されている。しかし、管見の限り、これらの教区簿冊を扱った研究は、現地研究者も含めて誰も行っていない。

さて、本発表の具体的な分析対象とされたのは、主にアシャグ・ゼイズイト(1877年)とジョルル(1881年)という2つの村＝モスク教区である。いずれもエリザヴェートポリ県ヌハ郡に属する。この両村を分析対象としたのは、該当年の教区簿冊のうち、離婚簿以外の3帳簿が全て揃っており、それらに記された情報が比較的细节であるためである。

まず、結婚簿の記録を分析したところ、ジョルル村の新郎新婦3組はいずれもやや高齢で初婚を迎えているが、アシャグ・ゼイズイト村の初婚者は男女ともに10代の者が多いという特徴が見られた。1872年規程が定める結婚可能年齢の下限である15歳の新郎、13歳の新婦ともに記録がある。法令に反する若年婚が行われていた可能性もあり、例えば、13歳で2度目の結婚をした新婦などが記録されている。また、夫の方が何歳か年上の夫婦が多い、同村もしくは近隣の村の出身者との結婚が大半である、などといった傾向が両村に共通して見られた。

次に出産に関してだが、アシャグ・ゼイズイト村では、10代前半を中心とした、若年齢での出産が目立った。一方、ジョルル村の記録では、逆に高齢出産が多く、妻の年齢が40歳、50歳、60歳という信じがたい事例も見られた。これらの情報の解釈は難しいが、何らかの不都合な事実、例えば新生児が「不義の子」であることを隠すために記録が捏造された、という可能性も指摘できる。

また、妊娠と出産は、女性にとって命がけの行為であったようだ。アシャグ・ゼイズイト村の死亡簿は、「難産」によって死亡した3人の若い女性を記録する。ジョルル村では、記録された死亡者6人のうち3人が乳幼児である。記録にあらわれない死産や流産も含め、乳幼児の死亡率は高かったと推測される。特にこの時代、天然痘が大きな脅威となっていたようで、多くの乳幼児がこの病気で死亡した記録が残されている。

本発表は、これまでほとんど活用されてこなかったロシア帝政期南東コーカサスの教区簿冊を用いた研究の可能性を示した。今後、都市部も含め、より多くの教区簿冊を収集・分析することで家族史研究や人口史研究を進めるとともに、ロシア帝政期における社会の変化に関しても明らかにしていきたい。

(龍谷大学文学部)

アクン技芸の音楽構造の分析

— 新資料から見直すクルグズとカザフスタンの語り物 (Oral Narrative) —

ウメトバエフ・カリマン

кыргыз казак бир тууган クルグズ人とカザフ人は兄弟
қазақта әу дейметін қазақ жоқ カザフ人に歌えないものはいない
 (クルグズとカザフの言い伝えより)

アクン(akhyn)とは、楽器を弾きながら即興で歌い話芸を行う芸能者を意味する。ソ連成立以前のアクンは、単に聴衆を楽しませるだけでなく、庶民の意見を代弁し、社会体制を風刺する存在でもあった。2人以上のアクンが即興の歌で競い合うことをアイトウシュ(aitysh)と呼び、アクンの力がもっとも現れる場である。かつては旧ソ連のさまざまな国に存在していたと言われているアクンは、現在クルグズとカザフスタンにしか残っていない。その技芸は今日でも口頭伝承であるため、一見その伝統が続いているように思われるが、その実態はソ連成立前後で大きく異なると考えられる。例えばアクンも使用する楽器や伝統音楽については、ソ連の一員となった両国に西洋文化が流入し、楽譜が導入され、音楽機関が誕生し、楽器の改良が行われたことなどにより、両国の音楽というものがそれまでのものとは大きく変化したことがわかっている。この、音楽におこったような変化がアクン技芸にもおこったと仮定し、その伝承方法・上演形態・レパートリーの変化、旋律の構造などについて分析するのが報告者の現在の研究である。

今回は報告者が2015年から2018年にかけてカザフスタンとクルグズで収集した資料を元に、アクン技芸の現状を明らかにし、音楽的側面から分析を試みたことを報告する。クルグズ共和国では、2001年にビシュケクで設立された若手のアクンを育成するための唯一の学校、「アイトウシュ」学校が調査の中心となった。カザフスタンでは、カザフスタン国立芸術大学⁽¹⁾ 伝統音楽芸術学科⁽²⁾の伝統歌学科⁽³⁾、カザフスタン国立芸術大学⁽⁴⁾に属するコルク・

⁽¹⁾ Казахский национальный университет искусств (ロ)、Қазақ ұлттық өнер университеті (カ)。

⁽²⁾ факультет традиционного музыкального искусства (ロ)、дәстүрлі музыкалық өнер факультеті (カ)。

⁽³⁾ кафедра традиционного пения (ロ)、дәстүрлі ән айту кафедрасы (カ)。

⁽⁴⁾ Казахский национальный университет искусств (ロ)、Қазақ ұлттық өнер университеті (カ)。

アタ科学研究所⁽⁵⁾、グミリョフ・ユーラシア国立大学⁽⁶⁾のカザフ文学学科で調査を行った。また、報告者は2016年の12月3日と4日の2日間に渡り、カザフスタンのアルマティで行われたアイトゥシュ「アルトゥン・ドンブラ」(Altyn dombyra)を見学することができ、その録画・録音がカザフのアクン技芸を音楽的側面から分析するための主な資料となった。アクン技芸の音楽的構造、語り物(oral narrative)としての分析を行うため、2002年の『日本の語り物——口頭性・構造・意義』で取り上げられている平家物語、能、浄瑠璃、浪花節、座頭琵琶、ゴゼ歌の音楽構造を見通すモデルや分析方法を参考にした。

この現地調査で、アクンが使用しているメロディーは数多くあることがわかった。メロディーのことは、クルグズ語ではオボン(обон)と呼ばれている。オボンは7～9の音節からなり、この構造はクルグズの民族叙事詩「マナス」からの影響を受けていることが明らかとなった。カザフスタンではメロディーのことは、マハム(махам)、あるいはサルン(сарын)と呼ばれており、詩の一行は11～13音節から成る。クルグズの場合とは異なり、エボスのジル(жыр)、歌のエン(ән)が構造の元となっているということもわかってきた。

今回の報告のまとめでは両国のアクン技芸の現状を比較し、どちらの国でも若いアクンの育成が行われているものの、その支援のあり方が異なっていることも示した。カザフスタンでは若手のアクンの数も多く、その実力を測るアイトゥシュが全土で開催されている。また、クルグズでは「アイトゥシュ」学校が1つしかないのに対し、カザフスタンでは高等教育までアクンが育成されている。カザフスタンではナザルバエフ前大統領が率いていた政権与党「ヌル・オタン」(Нұр Отан)党が援助に関わっており、国レベルでアクン技芸が保護されている。一方、クルグズでは、政府は文化政策に消極的で、法律では国家予算の3%は文化に使われるべきと定められているが、実際に使われている予算は1%未満ということも今回の調査で明らかになった。そして、アクン技芸を含む文化およびその事業を支えているのはクルグズ政府ではなく、さまざまな協会や基金である。また、アクン技芸を支える固定のスポンサーはおらず、カザフスタンと比較すると経済的支援が少ない。このような経済的支援に差が生じている現状が、両国のアクン技芸の復興における差につながっている。このことが彼らの音楽にどのように影響を与えるのか、今後も注視していきたい。

(東京藝術大学)

⁽⁵⁾ Научно-исследовательский институт им. Коркыт-ата (カ)、Қорқыт Ата атындағы ғылыми-зерттеу институты (カ)。

⁽⁶⁾ Евразийский национальный университет им. Л.Н. Гумилёва (カ)。

革命期及びソ連初期における カザフ人とクルグズ人エリートの関係について

ベクトゥルスノフ・ミルラン

本報告は1917年から1924年にかけての、カザフ人とクルグズ人の政治エリートの相互関係を分析したものである。よく知られているように、ソヴィエト中央アジアに民族共和国が出来たのは1924年になってからであり、それ以前のソヴィエト中央アジア領はトルキスタン自治ソヴィエト社会主義共和国、ブハラとホレズム両人民ソヴィエト共和国といった3つの国家形態から成っていた。各共和国の民族構成は多様であり、様々な民族の間の交流が進んでいた。そこで、本報告ではトルキスタン自治共和国に注目し、カザフ人とクルグズ人の政治エリートの交流や共同活動を検討し、彼らの相互関係が1924年に実施されるそれぞれの民族共和国の形成にどのように影響を与えたのかを分析する。

互いに親しい民族と言われるカザフ人とクルグズ人の民族エリートは1917年のロシア革命期に積極的に共同政治活動を行っていた。1917年中に作られた「カザフ人・クルグズ人委員会」や彼らが直面していた政治社会問題を議論するために開かれていた地域大会、共同出版活動などが知られている。1917年12月に開かれた全カザフ大会は「共通の起源、文化、歴史及び言語を持つカザフ人とクルグズ人の居住地域からアラシュ民族自治を設立する」という決議を採択し、両民族の政治的統一を強調した。しかし、ロシア全体で始まった内戦のため彼らのアラシュ自治は実現まで及ばなかった。

上記に触れた彼らの政治活動が従来の先行研究でも部分的に知られていたが、本報告で強調したいのはこれらの共同活動におけるクルグズ人エリートの立場である。この時期のカザフ人との協力関係をクルグズ人エリートがどのように見ていたのかはよく知られていなかった。本報告ではクルグズ人のトレクル・ジャヌザコフが1917年に書いた新聞記事を参照し、クルグズ人エリートにはカザフ人と共同活動を続けながら自らの独自性を主張した人たちがいたことを示した。

その独自性がはっきりと表れてきたのは1922年のことである。同年の3月にクルグズ人エリートがトルキスタン自治ソヴィエト社会主義共和国内で山岳カラ・クルグズ州を形成する問題を取り上げた。従来の先行研究と違って本報告では山岳カラ・クルグズ州の形成問題

にトルキスタン自治共和国の要職にいたカザフ人エリートが積極的にに関わり、支持していたことを明らかにした。特に、トルキスタン共産党の書記を務めていたナジル・トレクロフとトルキスタン共産党中央委員会の委員だったスルタンベク・ホジャノフたちの役割が大きかったことを示した。

しかし、今まで続いてきたカザフ人とクルグズ人エリートの共同活動は1924年に行われた中央アジア民族・共和国境界画定によって結末を迎えた。民族・共和国境界画定と言うのは、今までのソヴィエト中央アジア領を成していたトルキスタン、ブハラ、ホレズム共和国を解体させ、代わりに民族別の共和国を形成する過程であった。カザフ人とクルグズ人が共に暮らしてきた一つの共同体としてのトルキスタンが解体されることになると、クルグズ人エリートはカザフ人との距離を主張し、自らの独自性を強調するようになった。土地・利水改革の遺産を保護することや、畜産を発展させるために中央政権に訴えることなどにおいて同じ生活様式（遊牧・反遊牧）を持つカザフ人とクルグズ人の同盟はトルキスタンという枠組みが存在する限り意味を持っていた。しかし、トルキシタンの解体が現実になんと、トルキスタン共和国のカザフ人居住地域と共に既存のカザフ共和国⁽¹⁾に編入されてしまう可能性に警戒を持ったクルグズ人エリートは反発したのである。その結果、当初から計画になかったクルグズ人の自治問題が民族・共和国境界画定に追加され、最終的に1924年の秋にカラ・クルグズ自治州として形成されたのである。

このように、1917年から1924年の間に両民族の政治エリートの関係はアラシュ自治の例で見られるように一つの国家を形成する政治的同盟から互いに完全に独立した民族共和国を形成する形で展開していった。彼らの関係は同時代の不安定な政治・経済的状况に依存していたと言える。最終的に、彼らはそれぞれの自治を追求して、それぞれの道を歩んでいくことになるが、その理由は彼らの相互関係が急に悪化したことよりは、中央政権が実施した民族・共和国境界画定にあると考えられる。

(北海道大学大学院文学研究院)

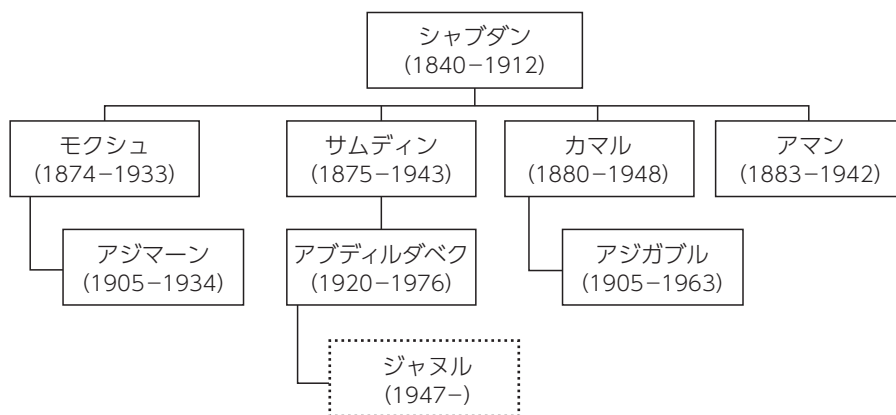
(1) 1920年にステップ地方で設立されたカザフ自治共和国のことである。当時はロシア語では Киргизская Республика として呼ばれており、1924年の中央アジア民族・共和国境界画定の時にトルキスタンとブハラ、ホレズム共和国らのカザフ人居住地域をも取り入れた。

ソ連中央アジア創成期におけるクルグズ人旧首領一族の動向 — 民間所蔵史料と公文書館史料による復元の試み —

秋山 徹

ソ連邦の解体から四半世紀が経過するなかで、中央アジア現代史の実証的解明が進められてきた。このなかで脚光を浴びるようになったのが中央アジア現地エリート、なかんずく民族知識人であり、これまで豊富な成果が蓄積されてきた。他方で、在地社会の伝統的な有力者層の動向については依然として未解明の部分が多い。中央アジア、なかでも遊牧民地域が近代化の途上にあったことを考慮すれば、現代国家の形成過程において彼らが果たした役割を無視することはできない。むしろ、集団化をはじめとする在地社会の社会主義的再編において、彼らが「封建上層」や「階級の敵」として厳しく糾弾され、最終的に実質的な権力を喪失していったことはたしかであるとしても、そのプロセスが、果たしてソ連政権の思惑通りに単線的に進展したのか、実証的解明の余地が残されている。こうした問題意識を念頭に、本報告は、ロシア帝政期の有力クルグズ人首領シャブダン(1840-1912)の子孫に着目し、ロシア革命期から1950年代後半に至る約40年間における彼らの軌跡を、公文書館史料(クルグズスタン、カザフスタン、ロシア)ならびに子孫に伝存する私蔵文書、それらに加えて、子孫へのインタビューにもとづくオーラル・ヒストリーを用いて復元することを試みた。

本報告は、時系列に沿うかたちで、以下に示す四つの部分から構成された：1. 中国領へ



の移動・帰還；2. 流刑への途；3. 流刑帰還後の兄弟：モクシュとカマル；4. 孫たちの動向：アジマーン、アジガブル、アブディルダベク。第1部、「中国領への移動・帰還」は、ロシア帝政の瓦解が始まる1916年から1921年におけるシャブダンの息子たちの動向を検討した。彼らは、1916年反乱においてセミレチエ南部における指導的な役割を果たし、中華民国統治下の新疆に移動したことが知られている。本パートでは、1919年末から1921年にかけて、ソヴィエト権力側が、難民の帰還・定着事業を進めるうえで、カマルを筆頭とするシャブダンの息子たちを、居住地と身の安全保障と引き換えに、その仲介者として活用していたことを明らかにした。第2部「流刑への途」は、1921年から1926年までを扱い、中国領からソ連領に帰還した彼らが最終的にウラルへ流刑に処されるまでの過程を検討した。1920年代中期、スターリンによる権力掌握と連動するかたちで、上からの強いリーダーシップのもと、キルギジア現地においては、旧部族首領層マナブに対する撲滅キャンペーンと流刑が進められていった。にもかかわらず、そうしたなかであって、シャブダンの息子たちが、ロシア帝政期からの旧知の間柄で、当時ソ連政権において要職を占めていたブロイドに流刑決議の破棄を要請し、実際に同決議を一旦破棄に追い込んだことを明らかにした。第3部「流刑帰還後の兄弟」は、おおよそ5年間の流刑を経て1930年代初頭にキルギジアへ帰還して以降のシャブダンの息子たちの動向を、対照的な生涯を送ったモクシュとカマルに焦点をあてて検討した。モクシュが、キルギジア帰還後も共和国南部の中心都市オシュのラーゲリに送られ、獄死していった一方で、カマルは、第二次世界大戦状況下におけるソヴィエト権力の対イスラーム融和策のもとでその存在が重視され、1944年に中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務管理局の「カーズイー」に任命されるなど、要職に取り立てられていたことを明らかにした。第4部「孫たちの動向」は1930年代～1950年代後半におけるシャブダンの孫たちの動向を、アジマーン、アジガブル、アブディルダベクに焦点を当てて検討した。彼らは父親たちと同様に、共和国内流刑、そしてアジマーンに至っては肅清という宿命に甘んじることを余儀なくされたものの、他方において、ソ連政権は、民族文化や民族言語の創出をはじめとして、彼らを民族共和国の建設に利用しようとしていた側面もまた明らかとなった。以上の考察から、ソ連政権下におけるシャブダンの息子たちのみならず孫たちの処遇は概して「抑圧的」なものであったことはたしかである。しかし、その過程は決して単線的とはいえない、葛藤と紆余曲折を孕んだものであり、その中に彼らの生存戦略を見いだしてゆくことも可能である点をむすびとして指摘した。

(早稲田大学高等研究所)

サマルカンド市所在グリ・アミール廟出土の織物について

村上 智見

1. はじめに

本報告では、ウズベキスタン共和国科学アカデミーサマルカンド考古学研究所（以下、サマルカンド考古学研究所）に保管されているグリ・アミール廟出土織物を詳細に調査し織技を明らかにするとともに、発掘当時の中間報告書の記述について検証することで、ティムール朝期における染織文化の一端を明らかにしたい。

2. グリ・アミール廟発掘調査の概要

グリ・アミール廟は、ティムールの孫ムハンマド・スルタン（1403年没）の廟として建設され1405年に完成した。1941年6月19日、旧ソ連の学者らによる発掘調査で、ティムール、ムハンマド・スルタン、ウルグベク、シャー・ルフの棺から人骨と共に織物が出土した。資料にはエルミタージュ美術館の保存科学者である V・コノノフ（V. N. Kononov）作成の中間報告書とメモが添付されており、織物はナヴォイ博物館に引き渡されたとあるが、発掘当時に一部がサマルカンドに残されたものとみられる。

3. 中間報告書の記述

(1)ティムールの棺

棺覆布と見られる全長約 2 m の織物が木棺蓋上から出土。

①上部の布

文 様：縞文様。25 cm 幅に、黒 2 cm、金糸 2 cm、黒地に金文様 4.6 cm、黒字に金糸文字 8.5 cm、黒 2 cm。

織密度：1 cm²に経糸 5～6 ペア、経糸径 0.500 mm。緯糸 15～16 ペアの撚糸、糸径 0.25 mm 以上。撚絹糸に幅 0.300 mm、厚さ 0.005 mm の鍍金平銀糸を左から右にらせん状に巻く。

②下部の布

文 様：無色の平織り。

織密度：経糸 12、緯糸 20ペア。糸径は経糸 0.6mm、緯糸 0.1～0.4mm。

③頭部は革製品が覆い、無撚りの棉糸と見られる織物が伴うが消失。

(2)ムハンマド・スルタンの棺

ティムールの棺覆布と一致。ティムールと同時期にグリ・アミール廟に移されたのかもしれない。M・ゲラシモフ(M. M. Gerasimov)のスケッチには死装束断片が多く記録されている。

(3)ウルグベクの棺

①シャツ

織組織：平織り。

色：くすんだ茶色い糸の束であるがもとは黄色。

経糸径：0.150mm。

織密度：1 cm²に50本。緯糸はおそらく32本。

②ズボン

織組織：平織り。

色：脆くくすんだ緑色。

織密度：1 cm²に50本。緯糸はおそらく32本。

材質：緯糸はおそらく棉。

③ベルト

織組織：平織り。

文様：市松文様。インディゴと見られる緑色と黄色を確認。黄色には十字模様の1mmの細長い切れこみ。

織密度：1 cm²に84本。緯糸は50本。無撚絹。

高品質であり高い価値を持っていたと考えられる。結び目を作って腰に巻かれていた。

③その他：薄い高品質な平織りの、死装束と見られる茶色布、遺体包カバーと推測される青色布。青色布は1 cm²に13×33本。

(4)シャー・ルフの棺

ウルクベクの棺出土の青・茶色布と同じ。

(5)ミラン・シャーの棺

織物は未確認。

4. サマルカンド考古学研究所保管の織物調査結果

詳細に調査した結果、無地で絹製の縐子であることが分かった。織密度・糸径が均一であり、熟練した技術が窺える。経糸は2本一組のZ撚糸、緯糸は引き揃えの無撚りであり、織密度は経15本(/1cm)、緯14本(/1cm)、糸径は経0.2mm、緯0.6mmであった。

中間報告書と照合した結果、一致するものは見られなかったが、ティムールの棺覆布下部の単色平織物の経糸と緯糸を逆にすると数値がほぼ一致した。今後、コノノフの最終報告書の内容と照合する必要がある。

5. 考察

経糸はZ撺で丸みがあり、中央ユーラシアなどに多く見られる特徴がある一方、緯糸はまっすぐ引き揃えた無撺りの平たいリボン状を呈し中国的である。

縐子は中国・宋代に出現したと考えられており、文様縐子は元代に盛んに製作されたが、ダマスカス製のダマスク織でも縐子が織られたという指摘があるため、今後西アジア資料との比較も必要である。

アラビア文字をあしらう例は、10世紀頃からエジプト出土品、ヨーロッパの教会、14世紀頃から宗教画等にも見られ、ティムール朝においてもイスラームの影響を受けた染織文化が発達していたと考えられる。

1221年、ヘラートの織工がビシュバリクへ連行され織物製作に従事したが、1236～1239年に10～20%程がヘラートへ戻ったとされ、当地の染織文化はある程度復興したと考えられる。ビシュバリクに残った織工は1275年に大都に移され、東西の技術と文様とが合体した金欄「納失失」(ナシシ)を製作した。この時期に中央アジアの織物産地にも元朝の技法が伝わり、ティムール朝においてもそれが受け継がれたのではないだろうか。東西の特徴がみられる当該資料からは、元朝以来の絹製作技術を受け継ぎ発展させようとする、ティムール朝初期の染織文化の一端を見ることができのかもしれない。この後、サファビー朝でも金糸織物やタペストリーが盛んに製作され、海を渡り日本にももたらされることになる。

参考文献

小松久男ほか(編) 2005『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社。

坂本和子 2008「金糸織物の発展——特に「納失失」について——」『古代オリエント博物館紀要』28、151–166頁。

Кононов, В. 1941. *Предварительный отчет по техническому исследованию тканей из погребений в Гюри-мире*, С. 1-11.

(北海道大学)

「中央アジア+日本」対話

—— 着想から実行へ ——

ディシュコフ・アルマス

2019年には「中央アジア+日本」対話の第7回外相会合（FMM7）がタジキスタンで開催された。2004年、当時の日本の川口外相は、「中ア+日本」対話を立ち上げた。外交の専門家によると、対話は橋本元首相によるユーラシア外交（1997）の改訂の結果であり、これによって中央アジアとの新しいタイプの関係を示すことができたとされている。彼らは、中央アジア、韓国、欧州、そして米国の間で同様の関係を構築するための出発点として役立ったのが、この対話であったと確信している。

この対話の特徴は何だろうか。

対話の最初の、多くの点における成功は、中央アジアと日本の本格的な協力を発展させる機会が、それまで非常に限られていたという事実によるものだった。中央アジア諸国と日本はそれまで二国間パートナーシップのメカニズムすら脆弱で、法的基盤を欠いていたのである。

この地域のいくつかの国が対話の初期段階で、日本との共同作業の成果として新たなイニシアチブを取ろうとしたということを証言する人々がいる。しかし、日本側はタシケントで新しいイニシアチブを正式に発表し、アスタナでのFMM1の開催を支援することによって、この地域に対する敬意を示すことができた。

川口氏のタシケント演説で指摘されたように、対話は「新たな次元」、あるいは日本と中央アジアの間の協力の「一つの選択肢」となった。対話メカニズムには3つの基本原則が定められた。それは「多様性の尊重」、「競争と協調」、「開かれた協力」だった。その1年後に参加国は、対話の5つの主要な柱、すなわち「政治対話」、「地域内協力」、「ビジネス振興」、「知的対話」および「文化交流・人的交流」を承認した。

対話の活動を分析すると、参加国が設定された枠組みを遵守し続けていることがわかる。2004年以来、対話の40以上の会合とイベントが開催されており、そのうち7回は外相レベル、13回は高級実務者レベル、11回は専門家レベルだ。対話の会合は基本的に日本または中央アジア諸国で行われる。日本での開催は全会議の60%以上を占める。

FMM1から10年後の2014年になって初めて、中央アジアと日本の外相はビシュケクで閣僚レベルの会合を開くことができた。最終文書として採択することができたのは、「行動計画」(2006)、ロードマップ「農業分野地域協力」(2014)、「運輸・物流分野地域協力」(2017)を含む約10件だ。

これまでの合意にもかかわらず、対話の参加国は会合に第三国または国際機関を招待していない。この対話の会合に参加した最初で唯一の第三国は、アフガニスタンだ。また、対話の文書では、ADBやEBRDなどの金融関係の代表者の参加については、ほとんど言及されていない。

最近では、学術的専門家によって、トルコの対話参加の可能性という案も提起された。そのようなオプションが実際に参加国によって交渉されたならば、それは少なくとも2つの意味を持つ。つまり、対話の活動において目に見える進歩がないこと、そしてそのような現在のフォーマットで対話を続けることに対する関心の欠如である。

対話の内容については、いくつかの興味深い事実が注目されるべきである。

2006年には、対話の枠組みの中で、中央アジアと日本の最初のサミットを開催するという案が表明された。しかし、現在では実現しそうなこのイニシアチブは、中央アジアの指導者たちに適したものとは思われず、残されたままである。

また、対話の枠組みの中で、取引関係の活性化のための統一的な仕組みを構築するという提案が繰り返し行われたが、これについて対話は、それほど重要でない2つのイニシアチブを生み出すのみにとどまった。それは、経済フォーラムと専門家会合だ。

上記の事柄をまとめると、中央アジアは対話の参加国の数を制限し、日本とのパートナーシップの発展に焦点を合わせたいと考えているのかもしれない。しかし、明らかなのは、対話の枠組みの中で表明されたすべてのイニシアチブが参加国の全面的な支持を得たわけではないということである。

とはいえ、多国間アプローチの困難さにもかかわらず、参加国は対話の規範と規則を策定することができた。第1に、対話には独自のアーキテクチャがある。

第2に、参加国は、対話の活動が実用的であるべきだと理解している。これまでのところ、日本側はいくつかの重要な決定を下すことができた。例えば、中央アジアから研修員を受け入れ、FAOを通じた「バッタ管理対策改善計画」を支援し、中央アジア諸国の国民に対するビザ制度の緩和なども行った。しかし、現在のプロジェクトの数が、対話の枠組みにおける長い協力の歴史にふさわしいものでないことは明らかだ。

第3に、参加国は、地域のプロジェクトが限定的なものである可能性があることを認識している。たとえば、2、3か国のみに向けて設計されているものがある。さらに、日本側は、プロジェクトが本質的に地域全体にかかわるものであり、すべての参加国の支持を得るべき

であると考えているようだ。一方で、中央アジアは、日本との協力を強化し、日本の「特殊性」、すなわち日本のノウハウの活用を目指すべきである。

日本は15年間にわたり、対話の手続きにおける自らの役割の規定を繰り返し試みて来た。当初、日本は中央アジア諸国の「自然なパートナー」としての地位を確立した。後になって、日本の外交用語集には、「触媒」という用語が登場した。また、初期段階では、川口氏が対話の枠組みの中で、「小切手外交」と言われることを拒否したことも特徴的だった。しかし、2014年には、当時の玄葉外相が、MDGsに関連する地域プロジェクトに7億ドルを融資する用意があると発表した。2017年には、岸田元外相が、同地域における輸送および物流プロジェクトの資金調達を240億円で行うと発表した。そうしたことを背景に、高級実務者会合には、対話の枠組みの中で検討されたプロジェクトをレビューし監視する機能が割り当てられた。

多くの専門家の中には、対話が日本の地政学的野心の産物であるという考え方や、東京がロシアや中国と競っていると主張する傾向も強い。だが、対話の文書には、いくつかの事例を除いて、他の国々、たとえば米国、ロシア、中国への直接の言及はない。

2年前、中央アジア諸国はサマルカンドにおいて、米国、韓国、欧州、日本などの多国間対話プラットフォームの中で彼らの立場を調整していくことに合意した。この点に関して言えば、それまでアジア中心主義的な語り口だった河野前外務大臣は何もできなかったが、新任の茂木敏充大臣は中央アジアと共同で対話を変革するという、さらなる重要課題に直面している。

(筑波大学大学院人文社会科学研究所)

一つの文書から何を読み取るか —— 近現代史の史料について ——

小松 久男

本報告では近刊予定の論集『近代中央ユーラシアの眺望』に寄せた拙稿「言説空間の広がり——アブデュルレシト・イブラヒムの足跡をたどって」の内容を紹介したうえで、今後の近現代史研究の展望についていくつかの点を述べた。

この拙稿では1点のロシア語文書を取り上げた。これは1912年2月29日付で憲兵大尉ザズレフスキーがトルキスタン地方保安局長に提出した報告書であり、当時ロシアの保護国であったブハラ・アミール国の首都における汎イスラーム主義の動向について述べている。ロシア当局は、汎イスラーム主義はロシア帝国の一体性を破壊する危険なイデオロギーであるとして、その動向を注視し、多数の報告書が作成されていた。これらのほとんどは、先行研究が示すとおり汎イスラーム主義を警戒、敵視することで共通している。

しかし、当該の報告書はロシア帝国首相ストルイピンが名指しで非難したこともあるロシア出身の汎イスラーム主義者、アブデュルレシト・イブラヒムの動静を伝えながら、彼の目的や活動について肯定的に述べていることが注目される。たとえば、報告書は彼のことを「きわめて教養があつて進歩と啓蒙の支持者であり、国際法にも通じた人物」と伝え、その動機と行動については、「イスラームは日ごとに弱体化し、ムスリムの君主は臣民をかえりみることなく、諸国や諸民族の法を知らず、虚栄と利己主義におぼれ、私欲を求めるばかり。学識者やカーディー、ムフティーはゆすりをはたらき、学知を求めるマドラサの住人も、正しい道はずれて知識にうとく、手探りで歩むありさま。アブドゥラシド・イブラギム・エフェンディは、このような有様を見て、粗末なデルヴィシユのいでたちで故郷の町ブハラを去り、同志を求めて世界遍歴の旅に出た」と記している。これは多数の報告書の中にあつてじつにユニークな評価と言ってよいだろう。

それでは、なぜこのような記述がなされたのだろうか。それは憲兵大尉自身が述べているとおり、彼はブハラでもっとも見識の高いウラマーと見なされていたハジ・ダムッラー・イクラムから情報を得ていたからだろう。イクラムは、イスラーム法の学識において卓越していたばかりではなく、清廉潔白の人士としても知られており、イスラーム世界の動向にも通

じていた。憲兵大尉は、イブラヒムをジャマルッディーン・アフガーニーからイラン立憲革命に貢献した一連の思想家・革命家の人脈の中に位置づけているが、こうした理解も、イクラムから得た情報によるものと考えられる。イクラムという情報源を持つことによって、この報告書は他の定形的な報告書とは異なる認識を示すことになったにちがいない。

そうだとすれば、ムスリム側の史料とのさらなる突合せが必要となるだろう。たとえばブハラのカーディー、サドリ・ズィヤーは、同時期の「日記」に「これら〔ヨーロッパ〕の文明化した人々がクレタやキプロス、タブリーズ、マシュハドなどのイスラームの諸地域で犯している無差別の虐殺やひどい略奪、文明化した強国の残忍なふるまい、これらのすべてはイスラーム世界を覚醒させ、ムスリムの間に共感とお互いを知ろうとする意欲を生み出したのである」と記しているが、こうした認識は、憲兵大尉の伝えるブハラにおけるジハードの気運やオスマン帝国・アフガニスタンの君主に対する期待感と重なっていることがわかる。

近年、A. Ю. Арапов や Б. Бабаджанов、Т. В. Котюкова らによってトルキスタン総督府などに集積されていたロシア語文書資料の公刊や研究が進められていることは心強い。これをさらに先に進めるには、当然のこととはいえ、同時代の現地語史料との比較・対照の必要性が不可欠だろう。一方、20世紀初頭のブハラに目を向けるとどうだろうか。ここは一見すると世界の辺境に見えるかもしれないが、先にふれたサドリ・ズィヤーの例を見ると、ここはロシア帝国はもとよりイスラーム世界、すなわちオスマン帝国やイラン、アフガニスタン、インドなどの情勢を眺望することのできる絶好の位置にあったと言えるだろう。これは、いわば世界史の「観測点」であり、辺境だからこそ見えてくるものがあるにちがいない。これは中央ユーラシア近現代史研究についてもあてはまることではないだろうか。ローカルなテーマに沈潜することなく、たえず世界史の文脈を意識することが必要と思われる。

(東京外国語大学)

中央ユーラシア史研究がロシア史・比較帝国論に対して持つ意義

宇山 智彦

西洋中心史観や一国史の枠組みを越える世界史研究の必要性が叫ばれ始めて久しいが、いわゆるメジャーな国・地域の研究は依然としてそれぞれの固有性にこだわりがちであり、近年流行のグローバルヒストリーも、経済史や海洋ネットワークを重視するあまり新たな偏りを生む危険性がある。むしろマイナー視されがちな中央ユーラシア史研究こそ、ロシアをはじめ隣接諸地域の歴史を普遍化し、諸地域の比較と、世界史のより深い理解に貢献できるのではないかというのが、本報告の問題意識である。具体的には以下の論点を検討した。

1. ロシアの拡大と中央ユーラシア：ロシアの東方拡大の歴史は、「無主地」的な地域にフロンティアを拡大させていったようなイメージを持たれがちだが、中央ユーラシアから見れば、ロシアとカザン・ハン国、クリミア、ノガイなどにまたがる広域的な政治・国際関係の文脈で起きた現象であったことが明らかになる。中央アジアの併合・征服も、18世紀前半以降のジュンガルとナーディル・シャーの興亡による中央ユーラシアの大変動を遠景とし、ウズベク三ハン国と周辺諸勢力の複雑な関係を近景としながら進んだものである。

2. 多宗教・多民族・多法域帝国としてのロシア：ロシア帝国統治下のイスラームのあり方、特にヴォルガ・ウラルで宗務協議会とその傘下の聖職者が国家権力と社会を媒介した様子は、ロシアが宗教・宗派ごとに臣民を管理する多宗教国家だったことを示す例として盛んに研究されてきた。しかし中央アジアには宗務協議会のような制度を導入しなかったこと、中央アジアの中でも地域や民族により異なる政策が採られたことは、ロシア帝国の個別主義的な性格を示す。個別主義という視角は、ロシアとイギリス、日本など他の帝国を比較するうえでも有用である。また慣習法とシャリーアというテーマは、帝国の多法域性や植民地イスラーム法制の観点から、ロシア帝国のムスリム地域と英領インド、仏領アルジェリア、オスマン帝国という、同時代的にも相互参照関係にあった地域を比較するための材料を提供する。

3. 帝国への協力・抵抗と植民地近代：イギリス帝国の植民地に関するコラボレーター論、すなわち帝国権力とローカル・ポリティクスの複雑な相互作用や、現地有力者の帝国権力に対する協力と抵抗の両面にわたる態度に注目するアプローチを応用して、ロシアの中央アジ

ア進出時や統治下における現地の有力者・知識人の活動などを分析する研究が近年進んできた。今後は、ブハラ・アミールやヒヴァ・ハンと英領インドの藩王の比較、第一次世界大戦期の戦争協力と反乱に関するロシア領中央ユーラシアと他の植民地の比較を行うのも有意義だろう。また、植民地の知識人にとっての帝国支配と近代化と自治運動の関係については、日本統治下の朝鮮に関して提起されている植民地近代論・植民地的公共性論を参考にしながら、比較研究を深めていくことが有益だと考える。植民地近代論は、帝国の近代化政策を賛美する植民地近代化論とは異なり、帝国権力下での差別や格差の構造を前提としたうえで、それでも現地には一定の主体性を持つ言説空間・政治空間が成立したことに注目する議論である。最近、イスラーム中心主義的な中央アジア史観を持つ欧米の研究者によって過小評価されがちなジャディード運動を再評価するためにも、こうした視角は有用だろう。

4. 国際関係の中の中央アジアとロシア帝国：近代国際関係における中央アジアの重要性は、グレートゲームというキャッチフレーズによって知られてはいるが深く研究されてきたとは言えず、オスマン帝国、イラン、インドなどをめぐる英露間の対抗と連動させて再考する必要がある。日本で研究蓄積のある露清関係や東トルキスタンの政治史についても、グレートゲームとの関わりをさらに掘り下げるべきだろう。ロシアによるイランの半植民地化においてザカスピ地域（トルクメニスタン）が持った意義の研究も重要である。こうした諸問題の考察により、ロシアがユーラシア国際秩序の変革に果たした役割も明らかになる。

5. ロシア革命・内戦とソ連史の再考：中央ユーラシアにおける民族運動・改革運動の展開は、1905年以降のロシア、イラン、オスマン各国における立憲革命の連鎖や、ロシア人を含む大民族のナショナリズムの勃興と関係づけて研究を深める必要がある。1917年以降のこの地域の政治過程の分析は、十月革命中心史観から脱却して二月革命と内戦を再評価することにつながる。また、18年まで継続していた第一次世界大戦を含む国家間の戦争・対立が、旧ロシア帝国諸地域の独立・自治の問題に大きく関わっていたことも浮かび上がってくる。ソ連史については、「アフーマティヴ・アクションの帝国」論のようなソ連民族政策論を中央ユーラシア研究からのインプットで修正する必要性や、民族共和国史のコラボレーター論による見直しの可能性が指摘できる。

6. 現代世界の理解に向けて：ソ連崩壊後四半世紀以上経ってもソ連の遺産が中央ユーラシアに色濃く残っていることは、グローバル化と脱植民地化の複雑性・限界の理解につながる。民主主義の危機が叫ばれる現在、1990年代の中央アジア諸国における権威主義体制の確立は、世界的な政治動向のさきがけとして再検討することもできる。以上のように中央ユーラシア近現代史の研究は、世界史の理解を深めるために大きな有用性と可能性を持っている。

（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

内陸アジア史研究と中央ユーラシア史

—— 近現代新疆研究の動向を中心に ——

新免 康

本報告では、近現代史に主眼を置き、日本における内陸アジア史研究の歴史的潮流の文脈の中で中央ユーラシア史研究の動向の特徴について触れた上で、近年の新疆史研究の動向について言及する。

まず、本報告における地域区分・名称について、本パネルセッションの主題となっている論集で扱われている範囲を斟酌する形で、「中央ユーラシア」をユーラシア中央部のムスリム居住地域として設定する。これに対し、「内陸アジア」は上記のような「中央ユーラシア」に、モンゴル、チベット、満洲などの諸地域を加えた、広域的な領域を指すものとする。この意味での「内陸アジア」は、ムスリム地域とチベット仏教徒居住地域に分かれる一方、歴史上の国家的枠組に関しては、清朝－中華民国－中華人民共和国と、ロシア帝国－ソ連、という区分を見出すことができる。この中で、ムスリム居住地域として「中央ユーラシア」に含まれる一方、清朝時代にその版図に組み込まれ、現代中国の領域の一部を構成するという地域としての特性を備えた新疆は、ユニークな位置づけをもつと言える。

日本における内陸アジア史、とくにモンゴル史・満洲史に関する研究は、特有な研究蓄積と歴史的背景をともなっており、世界的に見ても先端的な研究成果を産出してきたとされる。そもそも日本の東洋史学には、その嚆矢が那珂通世『成吉思汗実録』にあると言われるように、中国の西域史・塞外史などを一つの軸として形成された側面がある。また、日本の中国大陸進出と連動しつつ、満洲・モンゴルを中心に、新疆やロシア領・ソ連領中央アジアなども含む諸地域に関する戦略的観点からの研究も進展した。中国東北部(満洲)や河北地域への日本の勢力拡大にともない、これら地域に居住するムスリム(回民)に対する工作と対応しつつ、イスラームへの学問的関心が喚起され、部分的に実地調査をともないつつ研究が推進されたことも看過できない。

第二次世界大戦後、上記のような状況が転換されるにともない、前後の時期で研究動向にある種の断絶は見られるものの、やはり以前の地域的な関与と研究蓄積も背景としつつ、とくに現地語史料の利用に基づくモンゴル史・満洲史に関する研究が高い水準を維持してきた。

これに対し、日本における旧ソ連領中央アジア地域の近現代史に関する研究は、一部の先駆的業績を除けば、とくにここ数十年間で一気に飛躍的な進化を見せたと言って過言ではない。そのことは、本パネルセッションの主題となっている論集の構成・内容に如実に表れている。その背後には、内陸アジア史研究全体において、1990年代以降、ロシア・中央アジア・モンゴル・中国におけるアーカイヴ史料へのアクセスを中心として、史料をめぐる条件が劇的に好転したことともなう、共通の事情を見てとることができる。ただし、新疆やチベットなど史料面での制約を抱える地域と、モンゴル史研究や中央アジア史研究との間で、研究環境のある種の「格差」が顕在化した面も見逃せない。この点に関しては、近代史において各地域が辿った道筋とその結果固定化された政治的枠組が、研究条件にも反映していると言えるだろう。

さて、日本における近現代新疆に関する研究は、上記のような制約を抱えながらも、1980年代以後、いわゆる現地語史料の本格的な活用を基礎に、まさに新しい地平を切り拓いてきた。とりわけ、19世紀後半のムスリム反乱期、20世紀前半期における改革運動・民族運動などの局面におけるテュルク系ムスリムの活動とその背景、などに焦点を当てた考究において、豊かな収穫が得られたと考えられる。また、中華人民共和国期については、民族政策・民族問題、少数民族をめぐる教育状況、ウイグル人の社会・経済、生活文化・職業文化・ジェンダー、イスラームを軸とする宗教文化・宗教実践、少数民族の民族文化の動態、などに関する実に多彩な研究が、場合により実地調査を踏まえながら続々と出現し、その成果を蓄積した。しかし、近年の趨勢として、新疆をめぐる困難な諸情勢が、史料面も含め、学術研究を取り巻く環境に決定的な暗い影を落としていることは否定できない。

このような諸条件を勘案した上で、新疆近現代史研究の今後の方向性について、考えられる例として、以下の二つのトピックを指摘しておきたい。一つは、越境移動を含む、中央ユーラシアの広域的な地域間関係への視点に基づき、国家間関係と政治変動の文脈との連関において、地域の社会・文化変容にアプローチする研究である。その際、ロシアや中央アジア諸国の文書館所蔵の文書史料を中核とするロシア帝国・ソ連側史料を利用することの有効性は言を俟たない。他方、文学・歴史方面を中心とした、既存の現地語による史料に基づき、いまだ未開拓の領域を残している、精神文化史的な視角からの思想・心性面の検討を通して、新疆の地域性や文化様態に対する理解の深化を目指す研究も想定されるであろう。現在、新疆に関する研究は、現地との学術交流の機会などを閉ざされた苦境の下にあるが、中央ユーラシア史研究のバランスのとれた成熟化に向けて、新疆研究に新たな活性化の可能性が見出されることを期待したい。

(中央大学文学部)

中国元代医書に見る「回回医学」の特徴

方 麗娟

本報告では、中国元代の出版文化、とりわけ「回回医学」の出版物の特徴を分析した。当時の出版文化は、著しい発展を遂げ、上は中央から下は地方に至るまで、出版事業に多大な貢献がなされた。中央政府の出版物に関しては、世祖フビライが至元10年(西暦1273年)に秘書監を設置し、図書経籍の管理にあたらせ、翌年また興文署を設置し、経籍を管理させたことから、モンゴル・元朝政府が出版を非常に重視していたことがわかる。

元代の医学の中で、ムスリムの医学(すなわち「回回医学」)は最も特色がある。大量のアラブ、ペルシア文献と「方剂」、薬物が中央アジアのシルクロードを通じて伝来したため、アラブ、ペルシア医学の伝統を継承し、且つその他の系統の医療技術を吸収して形成された中国ムスリム医学——すなわち「回回医学」が元代に完成した。「回回医薬術」は当時民衆に歓迎され、元朝政府は「太醫院廣惠司」を設置し、「回回薬物」を専門に管理し、大都と上都に「回回薬物院」を設置し、さらに『回回薬方』等の医薬専門書を翻訳し、回回医術を広めた。それゆえ本報告では、元代の西域の「本草医薬」の伝来とムスリム医学の形成から始まり、元代医学書の出版状況と出版の特色を論じ、ムスリム医学がモンゴル・元朝期に演じた役割について考察した。

(馬偕醫護管理專科學校通識教育中心、台湾)

タジキスタン政治の変遷 —— 世俗・宗教関係の考察 ——

周 耿生

本報告では、独立以来のタジキスタンの国内政治を分析した。タジキスタンは中央アジアで唯一、ソ連解体後の独立に伴い、深刻な内戦が発生した国家である。タジキスタンで内戦が発生した原因は数多いが、イスラームの要素もまた内戦発生の主要な要因の一つである。本報告は、この観察から出発し、タジキスタンの政治構造の中にあるイスラームの要素が、様々な時期にもたらした影響を探究するとともに、政治体制の移行の観点から、現在のタジキスタン政治権力構造の中にある世俗とイスラームの要素の調和を分析した。

独立以来のタジキスタン政治の変遷を概観すると、これまでの政治の発展により大統領の専制と弱い議会からなる体制が形成されたと言えよう。タジキスタン政府も国外の反テロの情勢を利用し、国内で行政権力と司法権力を入れ替わり用いて、イスラーム政治勢力を分裂させ、打撃を与えた。さらに、中国の「一帯一路」政策により、インフラ建設を積極的に進め、経済を発展させ、長引く地域主義的分裂の状態を変えようとしている。他方、ラフモン大統領の後継問題、イスラーム過激派の更なる過激化、中国、ロシア等大国の外からの介入も、今後のタジキスタン政治の発展の重要な変数となっていると言えよう。

(馬偕醫護管理專科學校、台湾)

追記

2018年度年次大会では、台湾中央アジア学会より方麗娟先生、周耿生先生をお迎えし、公開講演を実施した。講演に引き続き、質疑応答が行われた。「中国元代医書に見る「回回医学」の特徴」に対しては、伝来した医学書の問題、翻訳の問題等について、フロアから質問が提起された。「タジキスタン政治の変遷—— 世俗・宗教関係の考察」に対しては、タジキスタン政府とイスラーム政治勢力の関わりについて、また中国の影響力等について、質問が出された。質疑応答を通じて、両先生との学術交流を深めることができた。

要旨翻訳・追記 熊倉 潤 (アジア経済研究所)

**Ayida Kubatova, *Kırgızistan'da Ceditçilik Hareketi (1900–1916)*,
Aktaran: Ali Ünal, Ankara: Bengü, 2018, 276 p.**

小松 久男

周知のように、19世紀末クリミア半島やヴォルガ・ウラル地方で始まったジャディード運動は、20世紀の初頭、とくに1905年革命以後ロシア領トルキスタンにも広がり、各地に新方式学校が開校されるとともに、それを拠点として近代の諸条件に適合した啓蒙・改革運動が進展していった。この運動は1917年のロシア革命期やソ連時代初期に中央アジアの政治と文化において指導的な役割を果たした現地出身の知識人を育成したことで大きな意義をもっている。しかし、ソヴィエト政権が確立するにともなって、それは反動的な「汎イスラーム主義」や「汎テュルク主義」あるいは「ブルジョワ民族主義」の烙印をおされ、長く正当な評価を受けることはなかった。ロシア・ムスリム地域におけるジャディード運動の再評価は、ソ連末期のバレストロイカ時代に始まり、ソ連解体後タタルスタンやウズベキスタンの研究者を中心として多数の研究が発表されている。しかし、中央アジアについて言えば、これまでのジャディード運動研究には地理的な偏りが見られた。すなわち、対象はほとんど現在のウズベキスタンに相当する地域に限られており、クルグズ人地域（おもにセミレチエ州とフェルガナ州）における動向については知られるところが少なかった。本書、アイダ・クバトヴァ著『クルグズスタンにおけるジャディード運動（1900～1916）』は、このような研究上の欠落を埋めるものである。

本書はクルグズ語の原書（Аида Эсенкуловна Кубатова, *Кыргызстандагы жадидчилик кыймылы (1900–1916)*, Бишкек, 2012, 203 p.）からのトルコ語訳である。評者はクルグズ語を読むことはできないが、本書の興味深い内容にふれて紹介を思い立ったしだいである。このことをあらかじめお断りしておきたい。著者のクバトヴァ氏は、1989年にクルグズ国立大学を卒業、2013年歴史学博士候補となったのち、現在はクルグズ共和国科学アカデミー・歴史・文化遺産研究所で19～20世紀初頭クルグズスタン史部長を務められている。また、訳者はビシュケクに所在するクルグズ・トルコ・マナス大学に所属するアリ・ウナル氏である。

本書は、訳者のまえがきが続いて以下の構成をとっている。

序文

第1部：テュルク諸民族の統合とトルキスタンにおける民族独立運動の先駆としてのジャディード運動

- 1.1 ジャディード運動の出現とタタール人・バシキール人教員のクルグズ人地域における活動
- 1.2 ジャディード運動の中央アジアへの普及、著名な指導者
- 1.3 ジャディード知識人の刊行した新聞・雑誌とその社会・政治的な役割

第2部：クルグズスタンにおけるジャディード知識人の社会・政治的および教育活動

- 2.1 ジャディード知識人の社会・政治的活動：シャプダン・ジャンタエフの請願(1905年6月)、第1回セミレチエ地方ムスリム大会(1906年3月31日～4月1日)、第3回ロシア・ムスリム大会(1906年8月16～21日)、カザフ・クルグズのウズンアガチ大会(1910年10月21日)
- 2.2 ジャディード知識人の教育分野における活動、クルグズスタンにおける新方式学校
- 2.3 クルグズ民族教育システムの先駆者としてのジャディード知識人(教育家)

結論

参考文献

用語解説

まず、本書の内容を簡潔に紹介しておこう。序文では、研究の目的と研究史の整理、主な史料の解説がなされている。20世紀初頭からトルキスタンのクルグズ人地域において教育改革さらには社会・政治変革をめざしたジャディード運動の解明は、独立後のクルグズスタンにおける新しい国民意識の形成に資するというのが、著者の基本的な立場である。研究史では、近年の動向に限ることなく、帝政期に教育行政に携わったS. M. グラメニツキーらの著作やソ連時代の研究にも目を配っていることが注目される。ソ連期の研究はたしかに体制のイデオロギーに制約されていたが、そうした中でも実証的な研究をおこなっていた研究者がいたことは事実であり(彼らも現代の研究者と同一の史料を読んでいたはずである)、著者の姿勢は公正と言えるだろう。史料として第1に挙げられているのは、ウズベキスタン中央国立文書館に所蔵されているトルキスタン地方保安局の文書であり、この中にはセミレチエ州でジャディード知識人の動静を探った秘密諜報員たちの報告が少なからず含まれている。第2は1900～1910年代にロシア・ムスリム地域で刊行された『アイカプ』や『シューラー』などの定期刊行物である。第3はクルグズスタン中央国立文書館など国内の文書館に所蔵される史料であり、これにクルグズスタン科学アカデミー写本フォンドが加わっている。この

フォンドにはジャディード知識人の残した手稿も含まれていて興味深い。

第1部の1.1ではガスプリンスキーらの先達によるロシア・ムスリム地域におけるジャディード運動の展開を概観するとともに、タタール人やバシコルト人がクルグズ人地域に創設した新方式学校について考察を加えている。カラコル(プルジェヴァリスク)市にはイスマイル・ガスプリンスキーの名前を冠した新方式学校が彼の存命中に創設され、それは1920年代初めまで存続したこと、またウファのガリーイエ・マドラサには少なからぬクルグズ人学生が留学し、そこからイシェナル・アラバエフ(1882-1933)をはじめとする指導的なクルグズ知識人が輩出したことは、ジャディード運動のネットワークがクルグズ人地域にたしかなインパクトを与えたことを例証している。

1.2では、ロシアによる征服以前からトルキスタンではワクフ財に支えられたマドラサとモスクに付属するマクタブによる教育システムが機能していたことを確認したうえで、ジャディード運動の普及とその担い手、これに対する植民地当局の対応について考察している。後半ではタシケントのムナツヴァル・カリやサマルカンドのベフブーディーらトルキスタンの指導的なジャディード知識人に加えて、アフメト・バイトウルスノフらのカザフ知識人、そして彼らの思想や行動に触発されたクルグズ知識人の活動が描かれている。

1.3ではジャディード運動の普及に大きな役割を果たした新聞・雑誌を概観し、そこに掲載されたいくつかのクルグズ関連記事を紹介している。これらの定期刊行物にはロシア・ムスリムの全国紙ともいえるガスプリンスキーの『テルジュマン』やアブデュルレシト・イブラヒムの『ウルフェト』などのほか、トルキスタンやカザフ草原の新聞(著者は『カザク』の編集部にはアラバエフも加わっていたと指摘しているが(112頁)、根拠は示されていない)も含まれている。フェルガナ盆地奥のオシユの郵便局でも1913年には81,795部、79種の新聞を扱っていたという事実は興味深い。

第2部の2.1は、1905年革命以後に活発化したクルグズの社会・政治運動とそれを担ったアフマトベク・コイバガロフらのジャディード知識人に光をあてる。表題にある請願やロシア・ムスリム大会への参加、地方的な大会の開催などからこの時期の社会・政治運動の実像を明らかにしたことは本書の功績と言える(ウズンアガチ大会ではロシア農民の入植を停止させるようドゥーマとツァーリに請願することが決議された)。ここではジャディード知識人の行動を監視していた「カラ」などの暗号名をもつ秘密諜報員の報告が叙述に生彩を与えている。たとえば、「カラ」は1912年4月、コイバガロフらに取り寄せている『アイカプ』などの新聞は「遊牧のムスリム民衆は土地や郷土を奪われている」と記し、政府の事業は敵対的に論じられている」と報じていた。

2.2ではクルグズ人地域に開設された新方式学校を丹念に調べ上げて詳細な考察を加えている。それは1901～1902年にはピシュベクに2校、トクマクに1校を数えるのみだったが、

シャブダン・バートウル(1839-1912)らのマナプや篤志家、教育家の支援と努力によって増大し、しばしばヴォルガ・ウラル地方のマドラサに学んだクルグズ人が教員を務めた。著者によれば、1917年トルキスタンにはおよそ100校の新方式学校があり、4,000人の生徒が学んでいたが、このうち30校はクルグズ人地域にあった。その上で「新方式学校の3分の1がクルグズ人地域に所在したことはジャディード知識人の活発な活動の証拠である」(197～198頁)と指摘する。

2.3ではクルグズ人地域に教育システムを作り上げるのに貢献したイシェナル・アラバエフ(イスタンブルへの留学経験ももつ)、カイユム・ミフタコフ(バシコルト人の教育家、1892-1949)、オスモナル・スドゥコフ(1875-1940)、詩人のモルド・クルチ(1866-1917)、ウブライ・アブドラフマノフ(1888-1967)、カスム・トゥヌスタノフ(1901-38)、アルダシュ・モルド(1874-1930)らの活動を列伝風に解説している。これまであまり知られることのなかったジャディード人士について、読者はまとまった情報を得ることができる。高名なモルド・クルチを迎えたドゥンガン人の店主がラグマンをふるまったところ、モルド・クルチが即興で絶賛の詩を読んだという逸話も紹介されている。彼らの多くは1916年反乱の惨劇を経験し(一時新疆に避難した例も多い)、また新生クルグズ共和国の建設に貢献しながらスターリン時代の粛清の犠牲となった場合も少なくない。

結論では本書の要点をまとめた後、ジャディード運動研究の深化のためにいくつかの提言を行っている。たとえば、ジャディード知識人がソヴィエト政権の初期に行った活動に関する資料の収集、クルグズ人地域のジャディード知識人の著作を翻訳し、研究成果を文学や哲学の専門家と共同して刊行すること、トルコ、ウズベキスタン、カザフスタン、タタリスタン、バシコルトスタンなどの研究者との共同研究、アルヒーフ情報の共有、イスラーム文化と歴史の講義に際してジャディード運動史を活用することなどが提案されている。

本書の最大の功績は、先にもふれたように、これまで長く見過ごされてきたクルグズ人地域におけるジャディード運動の展開を解明したことにある。その際、著者はロシア・ムスリム地域という広域に目を配ると同時に、クルグズ人地域というローカルな地域におけるジャディード運動の実情を丹念に掘り起こしている。結論に示された提言も、建設的かつ実践的と言えるだろう。

その上で、いくつか気の付いたことを記しておきたい。まず、著者は1.2に見られるように、トルキスタンのジャディード知識人とカザフ草原の知識人をすべてジャディード知識人と見なしているが、これは両者の背景や戦略の違いを無視することになる。クルグズ知識人はカザフ草原のアラシュ派知識人やヴォルガ・ウラル地方ならびにトルキスタンのジャディード知識人など多様な知的潮流から刺激を受けて成長したと考えるべきだろう。なお、ムスタファ・チョカエフを含むカザフ知識人がトルキスタンの新方式学校を卒業した(91頁)とい

うのは明らかな誤りである。彼らが学んだのはロシア式の学校であった。どのような教育を受けたかは、各人のプロフィールをつかむうえで重要な要素である。

次に著者は1917年初頭のトルキスタンに約100校を数えた新方式学校のうち3分の1はクルグズ人地域に所在したと指摘しているが、この数値は過大に見える。この学校数は、同じくウズベキスタンのアルヒーフ資料に依拠したベンドリコフの先行研究にほぼ対応しており、これによれば、1917年ころ行政当局が算定した新方式学校の数は92校で、その内訳はシルダリヤ州に39校、フェルガナ州に30校、セミレチエ州に18校、サマルカンド州に5校であった[Бендриков 1960: 261]。これを見るとセミレチエ州はともかくとして、稠密な定住民人口をもつフェルガナ州にも相当数のクルグズ人学校があったことになる。仮にそうだとすれば「ジャディード知識人の活発な活動」以外にもその要因を検討する必要があるだろう。たとえば、新方式学校の普及を阻害したのはムスリム社会内部の保守派の反対と行政当局の介入であった。クルグズ人地域の場合、はたしてこのような阻害要因は働かなかったのだろうか。また、新方式学校には時期によって消長があり、とりわけ、1910年ころからトルキスタン総督府は新方式学校の教師は「生徒と同族の現地民」でなければならないと定めた結果、多くの新方式学校からタタール人教師が追放され、学校数は一時的に減少したことが確認されている。著者の列挙する学校はこうした政策の影響を受けなかったのだろうか。一方、行政当局が把握していなかった学校も相当数あったことも考慮すると、学校数については慎重に扱う必要がある。上記のような検討をふまえなければ、著者の指摘は誇張と受け取られることだろう。

関連して、著者は多くのクルグズ知識人が輩出したガリーイエ・マドラサに注目しているが、最近のハプトディノフの研究によれば、1910年以降カザフ草原やトルキスタンからタタール人教師が大量に追放されると、この先進的なマドラサはカザフ人やトルクメン人など非タタール人学生の受け入れを急速に増やしたという。これはロシア・ムスリム地域における教育システムの動態を示す一例として興味深い。なお、著者がソ連期の研究に依拠して掲げているウファの新方式学校における週ごとの科目時間数(たとえば理科・社会 35.6%、ロシア語 14.1%、宗教 28.8% など)は、まさに1914年のガリーイエ・マドラサのものと思われる[Хабутдинов 2013: 122]。ここは初等学校レヴェルの新方式学校とは区別して、「新方式のマドラサ」とすべきではないだろうか(56頁)。

著者が利用した史料の一つにロシア・ムスリム地域に流通していた定期刊行物があり、これはいくつか興味深い事実を伝えている。その実例を著者が引用している『シュレー』誌上の二つの記事から見てみよう。最初の記事は、1915年にアンディジャンの著名な詩人チョルパンがオシュについて書いた記事であり、該当部分を訳出すると次のとおりである。

オシュはトルキスタンの他の都市と比べるとあらゆる面で後れをとっている。ここには二つの新方式学校があり、両校では60名の生徒が学んでいる。またロシア語・現地語学校が一つあり、ここでは昼間は40名、夜間は30名ほどのムスリム生徒が学んでいる。個人的に学ぶ者も5～6名いる。〔新聞などの〕読書室はなく、ロシア人もいないというか、少ない。図書館もなかったが、最近オシュの青年からカドルジャン・カブルジャンフとユスフジャン・ユヌソフ両氏が図書館開館の請願をしたとのことである。成功を祈りたい〔Cholpan 1915: 288〕。

チョルパンは立ち後れたオシュの町にも近代の変容の兆しが表れていることを指摘している。もう一つの記事は、1913年にコーカンド在住のアハル・アッラーなる人物がオシュとその聖地タフティ・スレイマンについて寄稿した記事である。該当部分にはこう書かれている。

オシュ市にはいくつかのマドラサと多数のマクタブがある。学生たちは学問を学ぶためにアンディジャンやコーカンド、ブハラに行く（そこには新方式学校があったが、タタール人教師が追われてから新方式が存続できたかについては知らない）〔下線は引用者〕。オシュでは老若のウラマーやムフティー、ムダッリスにこと欠かず、庶民の中にも開明的な人はいるが、その数は太陽の一閃、海の一滴ほどにすぎない〔Ahal Allāh Khayrallāh oghli 1913: 456〕。

この筆者はロシア当局によるタタール人教師追放という措置によって新方式学校の存続が危なくなったことを示唆している。なお、本書では下線部分を「これを継続させる教師はいなくなった muallimler kalmadı」と訳しているが、原文は *ma'lūmātīm yoq* であり、上記のように訳すべきだろう (71 頁)⁽¹⁾。

著者はこの二つの記事に着目しながら、別々に紹介しているために両者のつながりが見えなくなっている。後者の後にチョルパンの記事を並べてみれば、オシュにおける変化のありようを明示することができたはずである。この例に限らず、ムスリムの定期刊行物を精査すれば、ロシア行政当局が残したアルヒーフ資料に優るとも劣らぬ情報をえることができるだろう。

最後に、著者はセミレチエ州のムスリム知識人が、1906年8月にニージニー・ノヴゴロドで開催された第3回ロシア・ムスリム大会に積極的に関与していたことを指摘し、アフマトベク・コイバガロフと I. アブドゥルダエフ (結論ではダブルダエフ) の二人が出席 (135 頁)

(1) この誤りはクルグズ語の原書 (51 頁) でも同様であり、トルコ語への翻訳時に起こったものではない。なお、著者はこの引用については別の文献に依拠しており、そこでの誤りを受け継いってしまったと考えられる。

したほか、セミレチエ州のカザフ・クルグズ名で、大会宛に民衆教育の重要性を訴える書簡を急送した(146頁)と述べている。しかし、注に示された大会議事録の該当頁にこれらを明示する記述は見当たらず、典拠としては正確さを欠いている。さらに言えば、管見の限り議事録にこうした記述を見出すことはできなかった。ただし、大会中の8月18日のマクタブ・マドラサ検討委員会で、「トクマクから、セミレチエ州のムスリムから」大会の成功を祈る電報が寄せられていると報告されたことは議事録に明記されており〔*Rusya Müslümanlarının 3. Nedvesi* 1906: 81〕、セミレチエ州の知識人が学校改革に関する審議を注視していたことは明らかである。なお、この電報の送信者たちが、これはロシア化政策ではないかとして抗議の意思を示したロシア国民教育省の通達は、1870年ではなく1906年3月31日に出されたものである。

以上いくつか問題点を指摘したが、ジャディード運動の総合的な研究のためには、著者のあげる国々のほか、欧米や日本の研究者との情報の共有および共同研究が不可欠である。その意味でも、本書をクルグズ語からトルコ語に翻訳して幅広い研究者に提供した訳者の労を多としたい。ただし、もう一度丁寧な校正をしておけば、散見する誤植は避けられたことだろう。

参考文献

- Ahal Allāh Khayrallāh oghli 1913. “‘Osh’ shahri ham ‘Takht-i Sulaymān’,” *Shūrā*, 1913, No. 15.
- Cholpan 1915. “Osh,” *Shūrā*, 1915, No. 9.
- Rusya Müslümanlarının 3. Nedvesi* 1906. *Rusya Müslümanlarının 3. Nedvesi*, Kazan.
- Бендриков, К.Е. 1960. *Очерки по истории народного образования в Туркестане (1865-1924 годы)*, Москва.
- Хабутдинов, А.Ю. 2013. *Институты российского мусульманского сообщества в Волго-Уральском регионе*, Москва.

(東京外国語大学)

中央アジア関連研究文献リスト2018

本リストは、2018年（1月～12月）に刊行された、原則としてイスラーム化以降の中国新疆、旧ソ連領のムスリム地域およびその周辺地域に関する学術文献をリストアップしたものである（理科系のものを除く）。原則的に、国内で刊行された、国内で活動する研究者による著作を中心とし、エッセイや辞典項目等は除外した。ただし、本学会会員の著作については、海外刊行のものも一部含まれる。なお、各文献の副題はコロンつなぎで統一した。

書籍

- UYAMA Tomohiko ed., *Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order*, Sapporo: Slavic-Eurasian Research Center (非売品)
 - UYAMA Tomohiko, “Invitation, Adaptation, and Resistance to Empires: Cases of Central Asia”
などを所収
- 宇山智彦、樋渡雅人編著『現代中央アジア：政治・経済・社会』日本評論社(3,400円＋税)
 - 地田徹朗「環境問題と環境政策：ソ連時代の負の遺産と新たな課題」
などを所収
- ONUMA Takahiro, David BROPHY, and SHINMEN Yasushi eds., *Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformations (Toyo Bunko Research Library 18)*, Tokyo: The Toyo Bunko (非売品)
 - ONUMA Takahiro, “Political Power and Caravan Merchants at the Oasis Towns in Central Asia: The Case of Altishahr in the 17th and 18th Centuries”
 - NODA Jin, “Crossing the Border, Transformation of Belonging, and ‘International’ Conflict Resolution between the Russian and Qing Empires”
 - SHINMEN Yasushi, “The Historical Development of Ürümchi: Focusing on Nanliang District from the Late-19th to Mid-20th Centuries”
などを所収

- 帯谷知可編『ウズベキスタンを知るための60章』明石書店(2,000円+税)
- 帯谷知可、後藤絵美編『装いと規範：現代におけるムスリム女性の選択とその行方(CIRAS Discussion Paper No. 80、社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族2)』京都大学東南アジア地域研究研究所(非売品)
 - 帯谷知可「ルモルとヒジョブの境界：社会主義的世俗主義を経たウズベキスタンのイスラーム・ヴェール問題」などを所収
- 小松久男『近代中央アジアの群像：革命の世代の軌跡』山川出版社(800円+税)
- 小松久男編『1861年 改革と試練の時代』(歴史の転換期9) 山川出版社(3,500円+税)
- 小松久男、荒川正晴、岡洋樹編『中央ユーラシア史研究入門』山川出版社(3,000円+税)
- 櫻間瑛『現代ロシアにおける民族の再生：ポスト・ソ連社会としてのタタルスタン共和国における「クリャシェン」のエスニシティと宗教=文化活動』三元社(5,093円+税)
- 谷口洋和、アリバイ・マムマドフ『アゼルバイジャンが今、面白い理由』KKロングセラーズ(1,300円+税)
- 広島県立美術館学芸課(福田浩子、岡地智子)編『広島県立美術館所蔵作品ミニガイド5：中央アジアの工芸』広島県立美術館(非売品)

論文

- Аширов, Адхамжон ва Сейка Вазаки. “Марказий Осиёда тасаввуф таълимотлари тарихини ўрганилиш ҳақида айрим мулоҳазалар,” *“Ижтимоий-гуманитар фанларнинг ривожланишининг долзарб масалалари” мавзусидаги халқаро илмий-назарий анжуман материаллари*, Нукус: Қарақалпоғистон, Б.13–17
- 磯貝真澄「ロシアのウラマーとイスラーム教育網に関する試論：19世紀前半まで」『史林』101(1), 116–149頁
- Исогай, Масуми. “Метрические книги как источник для изучения правовых аспектов брака и развода у тюркских мусульман Урало-Поволжья,” *Традиционный ислам в России и выдающийся башкирский ученый-теолог, просветитель мусульманского мира шейх Зайнулла Расулев*, Уфа: Институт истории, языка и литературы УФИЦ РАН, С.135–137
- 稲垣文昭「エネルギーインフラに見るタジキスタンと中国関係の深化」『国際情勢紀要』88, 91–99頁
- Уяма, Томохико. “Политическая стратегия Алаш-Орды во время гражданской войны: сравнение с национально-культурной автономией тюрко-татар,” *Личность, общество и власть в истории России: сборник научных статей*, Новосибирск: Изд-во СО РАН. С.260–

271

- UYAMA Tomohiko, “Sino-Russian Coordination in Central Asia and Implications for U.S. and Japanese Policies,” *Asia Policy* 13 (1), pp. 26–31
- 宇山智彦「ユーラシア地政学の縮図としての中央アジア」『JFIR WORLD REVIEW』創刊号, 38–48 頁
- 宇山智彦「中央アジアと中国の関係の現実的な理解のために」『東亜』2018 年 12 月号, 30–38 頁
- Әбділәшімұлы, Д. және Нода, Дж. “Уәли хан хаттарының тілдік сипаты,” *Әл-Фараби атындағы Қазақ ұлттық университеті харабиы, Филология сериясы* 4 (172), Б.12–20
- OKA Natsuko, “Grades and Degrees for Sale: Understanding Informal Exchanges in Kazakhstan’s Education Sector,” *Problems of Post-Communism*, published online on May 30, 2018, <https://doi.org/10.1080/10758216.2018.1468269>
- ONUMA Takahiro, “Dispatch of the Nusan Mission: The Negotiations Between Qing and Ablay in 1757,” *GLOBAL-Turk* 1-2, pp. 55–74
- 小沼孝博 (呉阿木古冷訳)「清朝統一準噶爾及其管轄制度的設計」『中国辺疆民族研究』11, 210–234 頁
- 加藤直人「咸豊年間、「新疆」における大銭の鑄造について：天理図書館所蔵「伊犁奏摺稿檔」の分析をとおして」『桜文論叢』96, 1–15 頁
- 上出徳太郎「新疆建省前後における協餉の變遷：甘肅新餉に注目して」『東方学』135, 74–89 頁
- KAWAHARA Yayoi, “Valī Khān Tūra: A Makhdūmzāda Leader in Marghīnān During the Collapse of the Khanate of Khoqand,” Devin DEWEESE and Jo-Ann GROSS eds., *Sufism in Central Asia: New Perspectives on Sufi Traditions, 15th–21st Centuries*, Leiden/ Boston: Brill, pp.162–190
- 木下恵二「建国初期中国の新疆統治における民族と階級：帝国継承国家における国民形成と「帝国の遺産」」『常磐総合政策研究』創刊号, 29–51 頁
- 熊倉潤「文化大革命期（1966～76 年）における新しい少数民族エリートの登場」『問題と研究：アジア太平洋研究専門誌』47 (1), 127–156 頁
- 坂井弘紀「ユーラシアの「甲賀三郎」：テュルクの英雄譚とシャマニズム」山本ひろ子編『諏訪学』, 372–412 頁
- 坂井弘紀「テュルクの英雄伝承」荻原眞子、福田晃編『英雄叙事詩：アイヌ・日本からユーラシアへ』, 151–179 頁
- 坂井弘紀「中央ユーラシアの「チョラ・バトゥル」」荻原眞子、福田晃編『英雄叙事詩：アイヌ・日本からユーラシアへ』, 291–317 頁

- 坂井弘紀「中央アジアのシャマニズム」『季刊エス』63, 復刊ドットコム, 88-89頁
- 澤田稔「歴史書としての聖者伝: 16~18世紀カシュガル・ホージャ家の伝記『タズキラ・イ・ホージャガン』」『日本中央アジア学会報』14, 1-22頁
- シェリンアイ・マソティ(希日娜依・買蘇提)、大谷順子「中国新疆都市部におけるウイグル人女性の言語使用状況に関する調査: 北新疆のウルムチ市、グルジャ市と南新疆のカシュガル市、ホータン市を事例として」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』44, 263-279頁
- 塩谷哲史「1842年ガージャール朝使節団のヒヴァ派遣: シーア派捕虜解放問題と英露両国の関与について」『内陸アジア史研究』33, 51-73頁
- 篠原建仁「中国の一带一路政策と中央アジア・ロシア: 石油ガスの観点から」『ロシア・ユーラシアの経済と社会』1034, 2-28頁
- 新免康「中国新疆における歴史書『東方五史』の「アルティ・シャフル」章について」『中央大学アジア史研究』42, 100-77(1-24)
- 田中周「中国の反テロ政策: 新疆を事例として」『国際情勢 紀要』88, 69-80頁
- ダシ・ドノロブ「中華人民共和国による新疆統合の第一歩: 中国「軍旅文学」からみる強制移住と強制結婚」『千葉大学人文研究』47, 177-189頁
- 地田徹朗「カザフスタンにおける「近代化」と強制農業集団化」『ロシア・ユーラシアの経済と社会』1031, 31-52頁
- 中生勝美「歴史認識と人類学: 満鉄資料『新疆ニ於ケル楊柳青人』の分析を通じた日本帝国主義の新疆戦略」『桜美林論考 人文研究』9, 167-182頁
- 中村朋美「ゴロフキン使節団の陸路貿易構想: 19世紀初頭のブフタルマ貿易を中心に」『東洋史研究』77(3), 35-68頁
- バヤリタ「オイラト・モンゴル人における野生植物の家畜利用について: 中国新疆ウイグル自治区イリ・カザフ自治州テケス県を事例に」『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』328, 3-43頁
- 平川幸子「中国のエネルギー政策と地域主義外交: 「一带一路」のモデルとしての中央アジア」『アジア太平洋討究』30, 89-101頁
- 冒茜茜「中国西部地域における少数民族の生計戦略の動態に関する一考察: 新疆ウイグル自治区北部カザフ族を中心に」『公共政策志林』6, 249-261頁
- 水谷尚子「新疆「バレン郷事件」考」『現代中国研究』40, 62-80頁
- 水谷尚子「1960年代初頭、新疆ウイグル自治区から国外移住した「新疆人」を追って」『中国』21』48, 147-166頁
- 水谷尚子「中国正教会の歴史と現状: 中国と香港の正教会とロシア、日本」『社会システム

研究』37, 97-125頁

- 八木風輝「音楽学校として機能する劇場：改良楽器とモンゴル国カザフ民俗楽器オーケストラの事例から」『総研大文化科学研究』14, 109-126頁
- 山田勅之「新疆ウイグル自治区の今：民族問題と観光」『アジア研究』13, 43-59頁
- リズワン・アブリミティ（熱孜万・阿布里米提）、大谷順子「中国新疆の農村地域におけるマハッラの社会的仕組みとその機能：1990年代を中心に」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』44, 281-296頁

『日本中央アジア学会報』投稿規定

1. 投稿者は、原則として日本中央アジア学会の会員に限ります。
2. 原稿は、過去に他の学術誌・書籍等に掲載されたことのないもの、投稿時点で他の学術誌・書籍等に投稿中・寄稿中でないものに限ります。
3. 原稿の使用言語は原則として日本語とします。
4. 投稿に際しては、完成原稿を MS-Word 形式で作成し、電子メール添付にて送付してください。手書き原稿は受け取りません。
5. 原稿の送付先は下記の通りです。
E-mail: jacaseditor@gmail.com
日本中央アジア学会編集委員会
6. 原稿の種別は、「論説」、「研究ノート」、「書評」、「中央アジア研究動向」、「中央アジア現地事情」、「年次大会発表要旨」からなります。投稿者は、掲載を希望する種別を明記のうえで投稿してください。ただし、掲載される際の種別に関する最終的な判断は、本学会編集委員会が行います。
7. 原稿の分量は、種別ごとに、1枚400字換算にてそれぞれ、「論説」と「研究ノート」：60枚以内、「書評」：20枚以内、「中央アジア研究動向」と「中央アジア現地事情」：15枚以内、「年次大会発表要旨」：5枚以内、とします。なお、上記の枚数には、本文のほか、表題、注、参考文献、図表等も含まれます。
8. 原稿の書式については、執筆要領を参照してください。
9. 原稿の締め切りは、「論説」、「研究ノート」、「書評」について1月10日とし、「年次大会発表要旨」については4月20日とします。他の原稿については2月28日とします。
10. 投稿された原稿の採否は、編集委員会において決定します。「論説」、「研究ノート」、「書評」の原稿については、審査を行なった上で、編集委員会が最終的な採否の決定を行います。掲載が決定された場合でも、編集委員会より手直しを求めることがあります。
11. 投稿された原稿は返却しません。
12. 校正は、初校についてのみ著者校正をお願いします。その際、大幅な修正や加筆はご遠慮ください。再校以降の校正は、編集委員会の責任で行ないます。
13. 本誌に発表したものを転載する場合は、予め編集委員会に通知した上で、『日本中央アジア学会報』に掲載されたものである旨を記載してください。また、転載された出版物の

発行後、速やかに本学会事務局宛てに1部寄贈をお願いします。なお、刊行後の1年間は、ウェブページを含め、転載をご遠慮願います。

14. 編集委員会は、本誌に掲載されたすべての原稿について、電子化された媒体により複製・公開し、公衆に送信することができるものとします。

(2017年6月21日改訂、2017年12月1日メールアドレス変更)

『日本中央アジア学会報』執筆要領

1. 原稿の形式・体裁

- (1) 表紙に、原稿の種別（「論説」、「研究ノート」など）、表題、英文タイトル、要旨（800字以内）、執筆者名、所属・職位等、および連絡先（郵便番号、住所、電話番号、メール・アドレス）を記す。
- (2) A4判とし、余白は天地30ミリ、左右25ミリとする。
- (3) 原稿は横書きとし、1行の文字数は41字、1ページの行数は32行に設定する。
- (4) フォントについては、和文はMS明朝、英文はTimes New Romanを用いる。アラビア文字等のローマ字転写を示す際は、Times New Romanで表示できる文字については必ずTimes New Romanを用い、表示できないものについてのみ特殊フォントを使う。特殊フォントを使用する場合は、原稿のファイルをメール添付で送付する際に、あわせて原稿のPDFファイル（特殊フォント部分をマーカーで示すこと）も添付する。フォントの文字サイズは、10.5ポイントとする。アラビア数字（算用数字）はすべて半角とする。
- (5) 数字は原則としてアラビア数字（算用数字）を用いる。ただし、本文中ではコンマを用いない。万以上の数字については、万・億・兆などの漢数字を用いることもできる。概数の場合は、十数年、数十人などとする。
- (6) 読点は「、」、句点は「。」を用いる。
- (7) 引用文を提示する際は、引用部分の行の始まりをすべて2字下げるとともに、引用部分の上下を半行空ける。
- (8) 日本語以外の諸言語の文字については、原則として、漢字、ローマ字、キリル文字以外の文字を使用しない。漢字は原則として日本の常用漢字を使用する。ただし、固有名詞の表示や漢文文献の引用など、必要な場合はこの限りでない。アラビア文字等についてはローマ字による転写を用いる。ローマ字転写の方式は、基本的に国内外で採用されている標準的な方式にしたがい、原稿内で方式を統一する。
- (9) 注は脚注とし、1からはじまる通し番号とする。原稿ファイルにおいて、MS-Wordの脚注機能を用いて作成する。
- (10) 出典を示す参考文献とページ番号のみの注は設けない。下記3.で示すような形式にしたがって本文内に入れる。
- (11) 原稿末に参考文献リストを置き、参考文献を示す。具体的な様式等については下記の2.を参照。
- (12) 図版は、執筆者が完全版下となるデータを提供する。図版には通し番号を付し、本文中に挿入希望箇所を表示する。また、別紙に各図版の説明（キャプション）を記す。図

版のデータについては、必ずファイル名に図版の通し番号を入れ、原稿のファイルを送付する際に、画像データも合わせてメール添付で送付する。後者のファイルはBMP形式が望ましい。

2. 参考文献リストの様式

- (1) 参考文献リストにおける文献の配列は、著者の姓のアルファベット順とする。単著・編著の区別は、配列順に関係しない。同一著者の複数の文献を掲げる場合は、出版年の古い順に並べる。同一著者の文献が同一年に複数ある場合は、タイトルのアルファベット順に、刊行年にa、b、cなどを付加して区別する。なお、文献の言語別に分けて表示する方法を採ってもよい。
- (2) 同じ著(編)者の文献が複数ある場合、2番目以下の文献の著(編)者名部分を——(3倍ダッシ)で表記する。
- (3) 史料等について任意の略号を使用する場合は、参考文献リストにそれを示し、原稿内で統一的に用いる。
- (4) 参考文献リストにおける書誌データの具体的な記載方法については、基本的に下記にしたがう。

①単行本

和文：著(編)者名、出版年、書名、出版地、出版社、の順に記す。

欧文：著(編)者名(姓, 名の順)、出版年、書名(イタリック体)、出版地、出版社の順に記す。

(例)

佐口透 1986『新疆民族史研究』東京：吉川弘文館。

Jarring, Gunnar. 1991. *Prints from Kashgar: The Printing Office of the Swedish Mission in Eastern Turkestan, History and Production with an Attempt at a Bibliography*, Stockholm: Svenska Forskningsinstitutet i Istanbul.

②学術誌掲載論文等

和文：著者名、発行年、論文名、雑誌名、巻号、掲載ページ、の順に記す。

欧文：著者名(姓, 名の順)、論文名、雑誌名(イタリック体)、巻号、掲載ページ、の順に記す。

(例)

佐口透 1950「新疆ウイグル社会の農業問題——1760-1820年——」『史学雑誌』59(12)、22-50頁。

Fletcher, Joseph F. 1982. "The Biography of Khwush Kipäk Beg (d.1781) in the Waifan Meng-ku Hui-pu wang kung piao chuan," *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 36, pp. 167-172.

③論文集等掲載論文

和文：著者名、出版年、論文名、編者、書名、出版地、出版社、掲載ページ、の順に記す。

欧文：著者名(姓, 名の順)、論文名、編者名、著書名(イタリック体)、出版地、出版社、掲載ページ、の順で記す。

(例)

羽田明 1964「Ghazāt-i-Müslimin 訳稿 — Ya'qūb-bāg 反乱の一史料 —」内陸アジア史学会編『内陸アジア史論集』東京：株式会社大安、324–339頁。

Togan, Isenbike. 1992. “Islam in a Changing Society: The Khojas of Eastern Turkestan,” in *Muslims in Central Asia: Expressions of Identity and Change*, edited by Jo-Ann Gross, Durham and London: Duke University Press, pp. 134–148.

④史料等に略号を使用する場合

略号、コロン(:)を挟んで書誌データを記す。

(例)

新疆図志：『新疆圖志』百十六卷、袁大化修、(清)王樹枏等撰、東方學會據志局本重校正増補、天津博愛印刷局印行、民国12年。

TN: (Mullā Sharaf al-Dīn A'lam ibn Nūr al-Dīn), *Tārīkh-nām (Tārīkh-i Rāqim)*, ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所蔵・写本番号: r. 10190.

3. 本文・注における文献の表記

- (1) 本文もしくは注において参考文献に言及する際には、著(編)者姓、出版年、ページを表示し、括弧[]内に入れる。ページ番号は、出版年の後に半角コロン(:)を挟んで示す。
- (2) 同一文献に関して複数回の言及がある場合、前掲書、前掲論文、同上書、同上論文、*op. cit.*、*ibid.*、等の語は使用しない。
- (3) 具体的な表記の方法については下記の形式にしたがう。

(a) 文の冒頭で言及する場合

佐口[1986: 173–174]は……

Jarring [1991: 85]によれば、……

ジャリロフ・河原・澤田・新免・堀[2008: 9]は……

羽田[1982: 80–81]、佐口[1963: 109–110]によれば……

(b) 文中または文末で言及する場合

……という指摘もあり[佐口 1986: 173–174]、本稿では……

……と指摘されている[羽田 1986: 86–87]。

……と指摘されている [Jarring 1991: 85]。

……という記述がある [TN: 122b–123a]。

……とされている [ジャリロフ・河原・澤田・新免・堀 2008: 9]。

……と論じられている [羽田 1982: 80–81; 佐口 1963: 109–110]。

……といわれる [羽田 1982: 80–81; 1986: 109–110]。

- (4) インターネット取得のデータを用いる際には、脚注に、記事等の題目、サイト名、URL アドレス、閲覧年月日を記す。

(例)

“Strategy of Innovative Industrial Development of Kazakhstan for 2003–2015,” URL: <http://en.government.kz/resources/docs/doc3>, 閲覧日: 2009年6月18日。

(2017年6月21日改訂)

日本中央アジア学会会則

第1条(名称) 本会は日本中央アジア学会(JACAS: The Japan Association for Central Asian Studies)と称する。

第2条(目的) 本会は、中央アジアを対象とする諸分野の研究を推進し、普及するとともに、研究上の連携を図ることを目的とする。ここで言う中央アジアとは、旧ソ連領中央アジア諸国と中国新疆ウイグル自治区を中心とし、その周辺地域を含むものとする。

第3条(事業) 本会は前記の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 研究および研究発表のための会合の開催
2. 会誌の発行
3. ウェブサイトの公開・運用
4. その他の必要な事業

第4条(会員) 本会の会員については以下の通りとする。

1. 中央アジア研究に関心をもつ個人で、本会の主旨に賛同する者。
2. 入会に際しては、原則として会員1名の推薦を必要とする。
3. 会員は、所定の会費を納入しなければならない。

第5条(役員) 本会は、会員の中から以下の役員をおく。役員の任期は4年とする。ただし、再任を妨げない。

1. 会長 1名
2. 理事 10名程度
3. 監事 2名

理事10名は会員の投票によって選出される。会長は投票によって選ばれた理事の中から互選される。また、理事会は本会の運営の必要に応じて、会員の投票によらない理事を若干名指名することができる。監事は理事会が指名する。いずれの役員も総会で承認を受けるものとする。

第6条(事務局) 本会の会務遂行のため、会長は若干名の担当者を選任して事務局を構成する。

第7条(総会) 原則として年1回、総会を開催する。

第8条(編集委員会) 会誌の編集・発行のため、本会に編集委員会を置く。編集委員会は、編集委員若干名により構成される。編集委員のうち1名を編集委員長とする。編集委員の任期は本会役員と同一とする。また、編集委員長は編集幹事を選任することができる。

第9条(会則変更) 本会則の改正は、総会において承認を経なければならない。

付則 1 (1) 本会則は2004年4月1日から施行する。

(2) 会費は当面、年間3,000円(学生1,000円)とする。

付則 2 (2010年3月29日改正)

(1) 第8条(編集委員会)の規定については、2010年4月1日から施行する(2019年3月23日一部改正)。

付則 3 (2019年3月23日改正)

(1) 第5条(役員)の規定のうち役員選出方法については、2020年4月1日に就任する役員の選出から施行する。

※ 2010年3月29日改正
2012年3月31日一部改正
2019年3月23日改正

日本中央アジア学会 役員（2019年7月31日現在）

会長 宇山智彦

理事 岡奈津子 小沼孝博 帯谷知可 川本正知

坂井弘紀 澤田 稔 新免 康 樋渡雅人

堀川 徹 湯浅 剛 吉田世津子

監事 地田徹朗

日本中央アジア学会 編集委員会

岡奈津子 小沼孝博 帯谷知可（委員長）

坂井弘紀 野田 仁 樋渡雅人 藤本透子

湯浅 剛 吉田世津子

『日本中央アジア学会報』編集幹事

磯貝真澄

日本中央アジア学会報 第15号

2019年7月31日発行

編集・発行 日本中央アジア学会

〒060-0809

札幌市北区北9条西7丁目

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

宇山智彦研究室内

E-mail: jacasoffice@gmail.com

URL: <http://www.jacas.jp/>

©2019 JACAS